

平成 17 年度

雷別地区 鳥類調査

報 告 書

平成 18 年 2 月

北 海 道 森 林 管 理 局
環 境 コ ン サ ル タ ン ト 株 式 会 社

目 次

1. 調査概要	1
1-1. 調査目的	1
1-2. 調査箇所	1
1-3. 調査時期	1
1-4. 調査内容	1
1-5. 調査位置	2
図 1-1 調査位置図	4
2. 調査結果	5
表 2-1 確認鳥類一覧	6
表 2-2 ラインセンサス結果	8
表 2-3 定点観察結果	10
表 2-4 夜間定点観察結果	11
表 2-5 指定等鳥類の指定状況	12
表 2-6 指定等鳥類確認状況	13
図 2-1 指定等鳥類確認位置図	14
3. まとめ	16
資料編	17

1. 調査概要

1-1. 調査目的

雷別地区自然再生モデル事業地周辺の自然環境を明らかにするため、基礎的な生態系調査の一環として、鳥類の調査を実施する。

1-2. 調査箇所

標茶町 雷別地区(根釧西部森林管理所管轄 293 林班とその周辺)

1-3. 調査時期

秋季調査 : 平成 17 年 10 月 16 日、17 日

冬季調査 : 平成 18 年 1 月 10 日、12 日

1-4. 調査内容

ラインセンサス法、定点観察法を用いて鳥類相調査を行った。また、10 月には夜間の定点観察も行った。各調査法については次の通りである。

(1)ラインセンサス法

調査地内に設定したルートを時速 2～3km 程度で歩き、ルートの片側 25m(両側 50m)に出現した種と個体数を記録した。なお、範囲を越える場所で確認した鳥類についても同定が出来る限り、記録を行った。調査ルートは環境を勘案し、2 ルートを設定した。



(2)定点観察法

調査地点に 2 時間とどまり、出現した種および個体数を記録した。調査地点は出来るだけ調査地区を見わたせるように、眺望のよいところに 2 地点を設定した。



(3)夜間鳥類調査(定点観察法)

夜行性の鳥類を対象とし、日没直後から 2 時間一定箇所にとどまり、主に鳴声による種の確認を行った。調査地点は環境を勘案し 2 地点を設定した。






1-5. 調査位置

ラインセンサス、定点観察及び夜間鳥類調査地点を図 1-1 に示し、各地点の概要を下記に示した。

(1)ラインセンサス

<p>R-1</p>  <p>起 点</p>  <p>終 点</p>	<p>全長 1.5km のルートである。ルート沿いにはカラマツ植林、アカエゾマツ植林、ミズナラとシラカンバなどからなる広葉樹林、沢地が見られる。沢地にはハンノキ、ハルニレ、エゾノコリンゴ、ハシドイ、ホザキシモツケ、ヨシなどが生育する。</p>
<p>R-2</p>  <p>起 点</p>  <p>終 点</p>	<p>全長 2.0km のルートである。ルート沿いにはトドマツ立枯被害跡地、トドマツ植林、ケヤマハンノキとシラカンバからなる広葉樹林、牧草地などが見られる。</p>

(2) 定点観察(夜間鳥類調査)

<p>P-1</p> 	<p>自然再生事業地のトドマツ立枯被害跡地の尾根に設定した。周辺にはトドマツ、ミズナラ、シラカンバ、ハリギリ、ハルニレ、ケヤマハンノキなどが見られる。林床はオオクマザサが優占し、オオヨモギ、ハンゴンソウなども見られる。この地点では昼間の定点観察及び夜間鳥類調査を実施した。</p>
<p>P-2</p> 	<p>自然再生事業地のトドマツ立枯被害跡地の尾根に設定した。周辺にはトドマツ、ミズナラ、シラカンバ、ハルニレなどが見られる。林床はオオクマザサが優占する。この地点では昼間の定点観察を実施した。</p>
<p>P-3</p> 	<p>尾根沿いの雷別林道上に設定した。周辺にはトドマツ林、アカエゾマツ林、シラカンバ、ミズナラ、ハルニレ、ヤチダモからなる広葉樹林が見られる。この地点では夜間鳥類調査を実施した。</p>

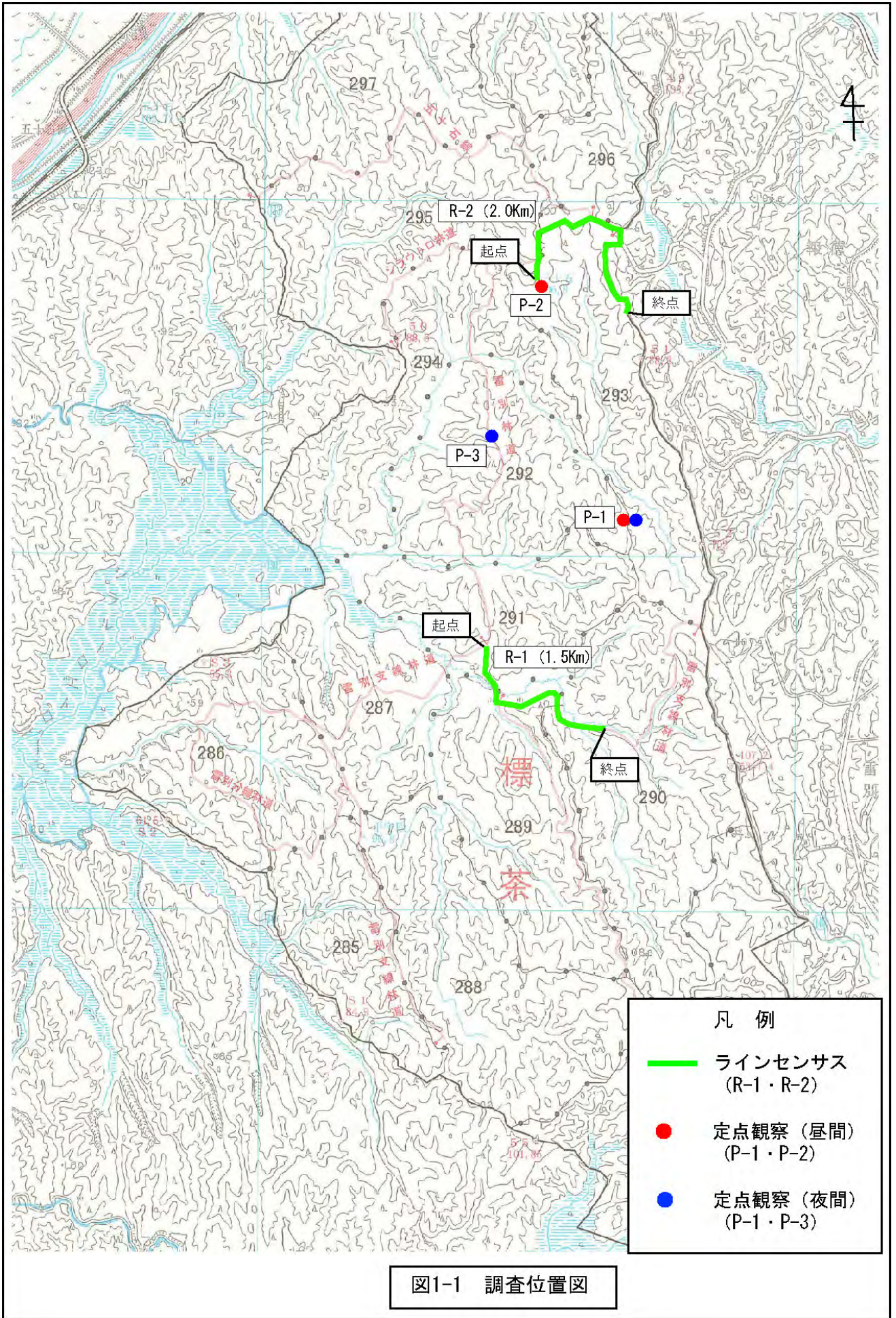


図1-1 調査位置図

2. 調査結果

調査の結果、9 目 20 科 43 種の鳥類を確認した。確認した鳥類は表 2-1 に示した。

下表は鳥類の目別の科数及び種類数を表したものである。

目別の科数及び種類数

No.	目	科数	種数
1	カモ	1	3
2	タカ	1	5
3	キジ	1	1
4	ツル	1	1
5	チドリ	1	1
6	ハト	1	1
7	フクロウ	1	1
8	キツツキ	1	5
9	スズメ	12	25
合 計	9	20	43

目別の科数及び種類数ではスズメ目の 12 科 25 種が最も多く、次いでタカ目、キツツキ目の 1 科 5 種、カモ目の 1 科 3 種、キジ目・ツル目・チドリ目・ハト目・フクロウ目の 1 科 1 種の順であった。

確認した種は調査地の環境を反映する結果となった。本地区は針葉樹植林地、広葉樹二次林などの森林環境がほとんどを占めており、確認された種のほとんどが樹林性の種であった。この他に沢地(湿地)、調査地周辺の牧草地などの環境がみられ、タンチョウなどの湿地、草地などを生息地にする種も確認した。

表2-1 確認鳥類一覧

調査日：秋季 平成17年10月16日・17日
 冬季 平成18年1月10日・12日

目名	科名	和名(注1)	時期(注3)	主な生息環境(注3)	ラインセンサス		定点観察		夜間 定点 観察	移動時	その他 調査時	指定等鳥類の 指定内容 (注2)			
					秋季	冬季	秋季	冬季							
カモ	カモ	オオハクチョウ	冬鳥・旅鳥	河川・湖沼						○					
		オシドリ	夏鳥	河川・湖沼							○	r			
		オナガガモ	冬鳥・旅鳥	河川・湖沼		○									
タカ	タカ	トビ	周年	森林・草原・市街地・河川・湖沼・海	○	○	○	○							
		オジロワシ	周年・冬鳥	海・河川・湖沼				○				b,c,f,m			
		オオワシ	冬鳥	海・河川・湖沼			○	○				b,c,f,n			
		オオタカ	周年	森林・草原						○		c,g,n			
		ノスリ	周年	森林・草原・河川・湖沼・海			○	○	○						
キジ	ライチョウ	エゾライチョウ	周年	森林						○	h,p				
ツル	ツル	タンチョウ	周年	草原・河川・湖沼	○					○	a,c,f,n				
チドリ	シギ	ヤマシギ	夏鳥	森林					○						
ハト	ハト	キジバト	夏鳥	森林・草原・市街地						○					
フクロウ	フクロウ	フクロウ	周年	森林						○					
		キツツキ	キツツキ	ヤマゲラ	周年	森林			○						
				クマガラ	周年	森林	○		○			b,g,n			
				アカゲラ	周年	森林	○	○	○						
				オオアカゲラ	周年	森林			○				i		
		コゲラ	周年	森林	○	○	○	○							
スズメ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	周年	森林・市街地			○	○	○						
		ミンサザイ	ミンサザイ	周年	森林	○		○		○					
		ウグイス	ウグイス	夏鳥	森林	○									
			クイタダキ	周年	森林	○									
		エナガ	エナガ	周年	森林	○	○								
		シジュウカラ	ハシブトガラ	周年	森林	○	○	○	○						
			コガラ	周年	森林						○				
			ヒガラ	周年	森林	○	○	○	○	○					
			シジュウカラ	周年	森林	○	○	○	○	○					
		ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	周年	森林	○	○	○	○	○					
		キバシリ	キバシリ	周年	森林	○	○	○	○						
		メジロ	メジロ	夏鳥	森林	○									
		ホオジロ	アオジ	夏鳥	森林・草原	○		○		○					
		アトリ	アトリ	冬鳥・旅鳥	森林	○			○						
			カワラヒロ	夏鳥	森林・草原・市街地	○		○							
			マヒワ	周年	森林	○	○	○	○						
			ギンザンマシコ	周年・冬鳥	森林			○	○				h		
			イスカ	周年	森林			○							
			ウソ	周年	森林			○							
			シメ	夏鳥	森林・草原	○		○	○						
ムクドリ	コムクドリ	夏鳥	森林・市街地	○		○									
	ムクドリ	周年	森林・市街地			○		○							
カラス	カケス	周年	森林	○	○	○	○	○							
	ハシボソガラス	周年	草原・市街地・河川・湖沼・海			○	○	○							
	ハシブトガラス	周年	森林・草原・市街地・河川・湖沼・海	○	○	○	○	○							
9目20科43種					種合計			24	20	22	18	13	4	3	
					5目16科 32種			3目11科 26種		4目 10科 13種	4目 4科 4種	3目 3科 3種	6目6科 9種		

注1)種の配列・和名は「日本鳥類目録 改訂第6版(日本鳥学会、2000年)」に基づく。

注2)指定内容

カテゴリー	発行年	指定等文献
a. 特別天然記念物, b. 天然記念物	1950年	文化財保護法
c. 国内希少野生動植物種	1995年政令 改正1998年	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律
d. 絶滅種, e. 絶滅危機種, f. 絶滅危惧種, g. 絶滅危惧種, h. 希少種, i. 留意種	2001年	北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001
j. 絶滅, k. 野生絶滅, l. 絶滅危惧IA類, m. 絶滅危惧IB類, n. 絶滅危惧II類, o. 準絶滅危惧, p. 情報不足, q. 絶滅のおそれのある地域個体群	2002年	改訂 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—

注3)時期および主な生息環境は「北海道野鳥図鑑 2003年 亜瑠西社」を参考とした。

時期はその種が生息する主要な時期を以下に示す用語で示した。

周年:年間を通して見られるもの。 夏鳥:春季から夏季の繁殖期に渡来するもの。 冬鳥:秋季から冬季に渡来し越冬するもの。

旅鳥:春秋に道内を通過するもの。

(1) ラインセンサス

ラインセンサスでは 5 目 16 科 32 種の鳥類を確認した。ラインセンサスの結果については表 2-2 に示した。また、平均多様度を求め、地点を比較した。

Shannon-Wiener 関数 H'

$$H' = -\sum [(n_i / N) \cdot \log_2(n_i / N)]$$

n_i は i 番目の種の個体数、 N は総個体数

•R-1

秋季調査

優占種にはマヒワ(25.0%)、ヒガラ(15.2%)、ハシブトガラ(14.4%)があげられる。1km 当たりの個体数は 44.0 羽であった。多様度指数は 3.1 であった。

冬季調査

優占種はマヒワ(54.2%)が突出した。次いでヒガラ(16.7%)、ハシブトガラ(10.8%)となっている。1km 当たりの個体数は 40.0 羽であった。多様度指数は 2.3 であった。

•R-2

秋季調査

優占種としてはヒガラ(28.3%)、マヒワ(22.2%)、ハシブトガラ(13.6%)があげられる。1km 当たりの個体数は 69.8 羽であった。多様度指数は 3.0 であった。

冬季調査

優占種はヒガラ(72.3%)が突出した。次にハシブトガラ(6.3%)となっている。1km 当たりの個体数は 47.8 羽であった。多様度指数は 1.7 であった。

優占種となったマヒワ、ヒガラ、ハシブトガラは非繁殖時期には群れで行動することが多いため個体数が多く確認された。これらの種の確認状況は針葉樹林での採餌行動がほとんどである。

また、R-2 では R-1 より出現種数が多いが、多様度指数を見ると、秋季及び冬季において R-2 より R-1 で大きい。

R-2 ではトドマツ植林が環境要素の大部分を占めることに対して、R-1 ではカラマツ植林が多くを占めている。調査では、カラマツ植林よりトドマツ植林での鳥類の出現が多かった。このため、R-2 ではハシブトガラ、ヒガラ、マヒワなど、非繁殖時期に群れで行動する種の出現個体数が他の種に比べ極端に多くなった。

平均多様度は、群集構造の種の均一性を表現しているため、R-2 で見られた個体数の偏りの結果、多様度が小さくなったと推察される。

多様度指数

		(H)	(H)地点別	(H)全体
R-1	秋季	3.1	3.0	3.0
	冬季	2.3		
R-2	秋季	3.0	2.8	
	冬季	1.7		

表2-2 ラインセンサス結果

	R-1 (調査距離:1.5km)								R-2 (調査距離:2.0km)							
	秋季				冬季				秋季				冬季			
	調査日		n/km	dom (%)	調査日		n/km	dom (%)	調査日		n/km	dom (%)	調査日		n/km	dom (%)
	10/16	10/17			1/10	1/12			10/16	10/17			1/10	1/12		
オナガガモ	13		4.3	9.8												
トビ						2	0.7	1.7	+					+		
オオワシ						1	0.3	0.8								
ノスリ					+	1	0.3	0.8						+		
タンチョウ										2	0.5	0.7				
ヤマゲラ													1		0.3	0.5
クマガラ									+							
アカゲラ	1		0.3	0.8	1		0.3	0.8		1	0.3	0.4				
オオアカゲラ													1		0.3	0.5
コゲラ	2		0.7	1.5		1	0.3	0.8	2	1	0.8	1.1	1		0.3	0.5
ヒヨドリ						1	0.3	0.8					1	1	0.5	1.0
ミソサザイ										1	0.3	0.4				
ウグイス		1	0.3	0.8						1		0.3	0.4			
キクイタダキ										1	+	0.3	0.4			
エナガ						6		2.0	5.0	2		0.5	0.7			
ハシブトガラ	11	8	6.3	14.4	7	6	4.3	10.8	21	17	9.5	13.6	3	9	3.0	6.3
ヒガラ	13	7	6.7	15.2	13	7	6.7	16.7	30	49	19.8	28.3	54	84	34.5	72.3
シジュウカラ	4	4	2.7	6.1	2		0.7	1.7		9	2.3	3.2				
ゴジュウカラ	8	2	3.3	7.6	2	2	1.3	3.3	10	11	5.3	7.5	2	7	2.3	4.7
キバシリ		1	0.3	0.8	+					2		0.5	0.7			
メジロ										2		0.5	0.7			
アオジ	2	11	4.3	9.8						16	10	6.5	9.3			
アトリ											+					
カワラヒワ										9	8	4.3	6.1			
マヒワ	13	20	11.0	25.0	3	62	21.7	54.2	53	9	15.5	22.2	2		0.5	1.0
ギンザンマシコ													8		2.0	4.2
ウソ														2	0.5	1.0
シメ										6		1.5	2.2			
コムクドリ	6		2.0	4.5												
カケス	4	1	1.7	3.8	1	1	0.7	1.7	1	3	1.0	1.4	2	3	1.3	2.6
ハシボソガラス														+		
ハシブトガラス					+	1	0.3	0.8	+	2	0.5	0.7	9	1	2.5	5.2
合計(羽)	77	55	44.0	100.0	35	85	40.0	100.0	156	123	69.8	100.0	84	107	47.8	100.0
目科種	3目10科13種				3目9科15種				4目13科22種				3目7科15種			
	4目16科19種								4目14科28種							
	5目16科32種															

注: +=センサス範囲(片側25m)外での出現記録、n=個体数、n/km=1km当たりの出現個体数、dom(dominance)=優占度の略。

(2) 定点観察

定点観察では3目11科26種の鳥類を確認した。定点観察の結果については表2-3に示した。

・P-1

秋季調査

出現数が多かった種としては、マヒワ(11.5羽)、ヒガラ(8.0羽)、ゴジュウカラ(6.0羽)があげられる。

冬季調査

出現数が多かった種としては、マヒワ(16.0羽)、ヒガラ(5.5羽)、ゴジュウカラ(4.0羽)があげられる。

・P-2

秋季調査

出現数が多かった種としては、カワラヒワ(12.5羽)、マヒワ(11.0羽)、カケス(7.0羽)があげられる。

冬季調査

出現数が多かった種としては、マヒワ(10.0羽)、ヒガラ(8.5羽)、ゴジュウカラ(4.0羽)があげられる。

優占種となったマヒワ、ヒガラ、カワラヒワは群れで行動するため個体数が多く確認された。

表2-3 定点観察結果

調査地点	P-1						P-2					
	秋季			冬季			秋季			冬季		
調査日	10/16	10/17	平均	1/10	1/12	平均	10/16	10/17	平均	1/10	1/12	平均
トビ	2	1	1.5		1	0.5	1	1	1.0			
オジロワシ										1		0.5
オオワシ				1		1.0				1	1	1.0
ノスリ	1	1	1.0				1	4	2.5		1	0.5
クマガラ								1	0.5			
アカゲラ	1	1	1.0				5	1	3.0			
コゲラ	1	1	1.0	1		0.5		2	1.0			
ヒヨドリ	1	2	1.5		1	0.5						
ミソサザイ								1	0.5			
ハシブトガラ	4		2.0	4	2	3.0	3	4	3.5	2	2	2.0
ヒガラ	8	8	8.0	8	3	5.5	3	9	6.0	4	13	8.5
シジュウカラ	1	4	2.5		2	1.0						
ゴジュウカラ	9	3	6.0	4	4	4.0	1	6	3.5	2	6	4.0
キバシリ		1	0.5	1		0.5		2	1.0			
アオジ								1	0.5			
アトリ				1		0.5						
カワラヒワ	1	2	1.5				3	22	12.5			
マヒワ	14	9	11.5	29	3	16.0	15	7	11.0	16	4	10.0
ギンザンマシコ					5	2.5						
イスカ	1		0.5					1	0.5			
シメ	5	5	5.0	5		2.5	2		1.0		3	1.5
コムクドリ								2	1.0			
ムクドリ		3	1.5									
カケス	4	5	4.5		1	0.5	8	6	7.0		2	1.0
ハシボソガラス		4	2.0		2	1.0	1	6	3.5	4		2.0
ハシブトガラス	3	4	3.5	4	1	2.5	2	2	2.0	1	6	3.5
合計(羽)	56	54	55.0	58	25	41.5	45	78	61.5	31	38	34.5
目科種	3目9科18種			3目8科16種			3目10科19種			3目5科11種		
	3目9科21種						3目10科21種					
	3目11科26種											

(3) 夜間鳥類調査

夜間鳥類調査では4目10科13種の鳥類を確認した。夜間に活動するフクロウとヤマシギの2種は夜間鳥類調査のみで確認された。

表2-4 夜間定点観察結果

調査地点	P-1			P-3		
	10/16	10/17	平均	10/16	10/17	平均
ヤマシギ				1		0.5
フクロウ	1	1	1.0		2	1.0
クマガラ		2	1.0		1	0.5
アカゲラ		1	0.5			
ヒヨドリ		1	0.5			
ミンサザイ		2	1.0	1		0.5
ヒガラ	3		1.5	4	3	3.5
シジュウカラ		2	1.0			
ゴジュウカラ	2	2	2.0			
アオジ		2	1.0	2		1.0
ムクドリ		7	3.5			
カケス	1	3	2.0	2	2	2.0
ハシブトガラス	2		1.0		1	0.5
合計(羽)	9	23	16.0	10	9	9.5
目科種	3目9科12種			4目7科8種		
	4目10科13種					

(4) その他調査時及び移動時に確認した鳥類

その他調査時及び移動時に確認した鳥類は、鳥類調査以外の調査時及び移動している時に確認した種の内、ラインセンサス、定点観察(夜間鳥類調査)で確認していない種と指定等鳥類の記録を行った。

その他調査時及び移動時に確認した鳥類としてはオオハクチョウ、オシドリ、オオタカ、エゾライチョウ、タンチョウ、キジバト、コガラの7種があげられる。オシドリは平成17年10月6日、エゾライチョウとキジバトは平成17年9月28日にその他調査時に確認された。オオタカ、タンチョウは秋季の鳥類調査時の移動時に確認され、オオハクチョウとヒガラは冬季の移動時に確認した。

(5) 指定等鳥類

確認した鳥類のうち、指定等鳥類に該当する種はオシドリ、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、エゾライチョウ、タンチョウ、クマガラ、オオアカゲラ、ギンザンマシコの 9 種があげられる。各種の指定状況を表 2-5 に示し、確認状況を表 2-6、確認位置を図 2-1 に示した。クマガラについては定観地点の P-1 付近で採餌痕も確認された。

表 2-5 指定等鳥類の指定状況

種名	カテゴリー			
	天然記念物等	種の保存に関わる法律	北海道 RDB(2001)	環境省 RDB(2002)
オシドリ			希少種	
オジロワシ	天然記念物	国内希少野生動植物種	絶滅危惧種	絶滅危惧 I B 類
オオワシ	天然記念物	国内希少野生動植物種	絶滅危惧種	絶滅危惧 II 類
オオタカ		国内希少野生動植物種	絶滅危急種	絶滅危惧 II 類
エゾライチョウ			希少種	情報不足
タンチョウ	特別天然記念物	国内希少野生動植物種	絶滅危惧種	絶滅危惧 II 類
クマガラ	天然記念物		絶滅危急種	絶滅危惧 II 類
オオアカゲラ			留意種	
ギンザンマシコ			希少種	
計(種数)	4	4	9	6

文献名

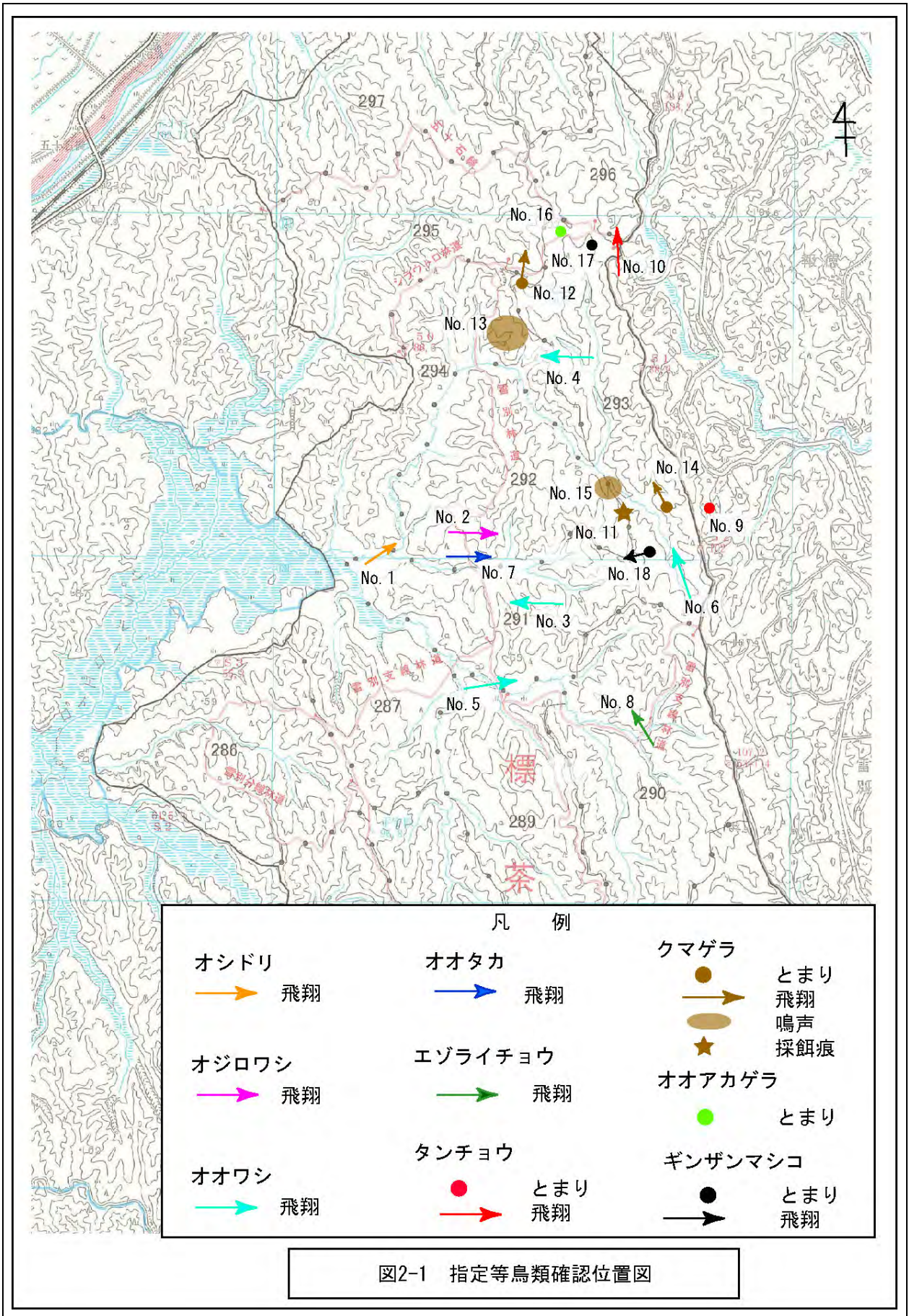
- 天然記念物等 …… 文化財保護法(1950年)
- 種の保存に関わる法律 …… 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関わる法律(1995年政令、1998年改訂)
- 北海道 RDB(2001) …… 北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック 2001 (北海道、2001年)
- 環境省 RDB(2002) …… 改訂 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—(環境省、2002年)



クマガラの採餌痕

表 2-6 指定等鳥類確認状況

No.	和名	確認日	個体数	確認時間	確認状況
1	オシドリ	平成 17 年 10 月 6 日	1	12:13	飛翔移動(♀)。
2	オジロワシ	平成 18 年 1 月 12 日	1	9:58	飛翔移動(成鳥)。
3	オオワシ	平成 18 年 1 月 10 日	1	11:26	飛翔移動(成鳥)。
4	オオワシ	平成 18 年 1 月 12 日	1	10:29	飛翔移動(成鳥)。
5	オオワシ	平成 18 年 1 月 12 日	1	10:29	飛翔移動(成鳥)。
6	オオワシ	平成 18 年 1 月 12 日	1	13:40	飛翔移動(幼鳥)。
7	オオタカ	平成 17 年 10 月 17 日	1	5:45	飛翔移動(成鳥♀)。
8	エゾライチョウ	平成 17 年 9 月 28 日	1	10:30	飛翔移動。
9	タンチョウ	平成 17 年 10 月 16 日	1	6:51	牧草地でとまり(成鳥)。
10	タンチョウ	平成 17 年 10 月 17 日	2	7:07	飛翔移動(成鳥)。
11	クマガラ	平成 17 年 10 月 7 日	-	11:05	トドマツに採餌痕を確認。
12	クマガラ	平成 17 年 10 月 16 日	1	5:59	トドマツにとまり。その後飛翔(♀)。
13	クマガラ	平成 17 年 10 月 17 日	1	8:00	鳴声の確認。
14	クマガラ	平成 17 年 10 月 17 日	1	16:13~16	ドラミングを確認。その後飛翔(鳴声)。
15	クマガラ	平成 17 年 10 月 17 日	1	16:13	鳴声の確認。
16	オオアカゲラ	平成 18 年 1 月 10 日	1	9:42	広葉樹林で採餌(♂)。
17	ギンザンマシコ	平成 18 年 1 月 10 日	8	9:25	トドマツ林で採餌。
18	ギンザンマシコ	平成 18 年 1 月 10 日	5	9:25	広葉樹樹上にとまり。その後飛翔。



(6) その他確認動物

調査中に鳥類以外に哺乳類が確認された。確認された哺乳類はエゾリス、エゾシマリス、エゾユキウサギ、エゾシカ、キタキツネである。

エゾリスは冬季調査のラインセンサス(R-2)で1個体を目撃した。また、R-1では足跡を確認した。エゾシマリスは秋季調査時にラインセンサス(R-2)周辺で1個体を目撃した。エゾユキウサギは冬季調査時に調査範囲全域で多数の足跡が確認された。エゾシカは冬季調査時に定点観察(P-1)で雄ジカを2頭目撃した。足跡は調査範囲全域に見られたが小数である。その中でP-1周辺は比較的多く確認され、休息跡なども確認された。キタキツネは冬季調査時に足跡を確認した。

3. まとめ

- ・ 調査の結果 9 目 20 科 43 種の鳥類を確認した。
- ・ 確認された種は調査地の環境を反映し、主要な生息環境を森林とする種が多くを占めた。
- ・ ラインセンサス及び定点観察での優占種はヒガラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、マヒワ等であった。これらの種は群れで行動するため個体数が多く確認された。
- ・ 夜間鳥類調査では、夜間に活動する種としてフクロウ、ヤマシギの 2 種が確認された。
- ・ 確認した鳥類のうち、指定等鳥類に該当する種はオンドリ、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、エゾライチョウ、タンチョウ、クマガラ、オオアカゲラ、ギンザンマシコの 9 種である。
- ・ 今年度の調査は、秋季と冬季のみであったため、雷別地区の鳥類相を把握するには春季と夏季の調査を行うことが必要である。

資料編

- ・ 既存文献

文献 1：釧路湿原学術調査中間報告 田中 瑞穂
北海道教育大学釧路分校 1973年3月
3.鳥類 (P40～47)

文献 2：釧路湿原保全対策緊急調査報告書
環境庁 1984年1月
第3節 鳥類 (P169～182)

文献 3：標茶町の自然(2) 標茶町の鳥類 橋本 正雄
釧路短期大学・標茶町教育委員会 1995年7月

文献 4：標茶町郷土館報告 第8号 標茶町郷土館 1995年3月
シラルトロ沼周辺の鳥たち-春のバードウォッチングから-
阿部 信行 (P26～P29)

文献 5：標茶町郷土館報告 第9号 標茶町郷土館 1996年3月
シラルトロ沼周辺の鳥たちⅡ 阿部 信行 (P113～P114)

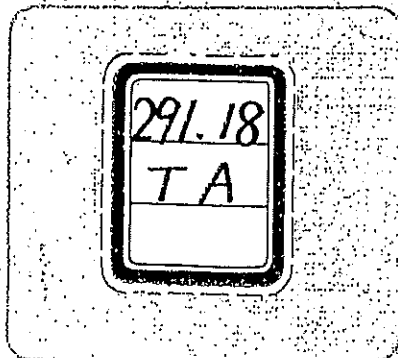
- ・ 業務写真帳

釧路湿原学術調査 中間報告

昭和48年3月

田中瑞穂

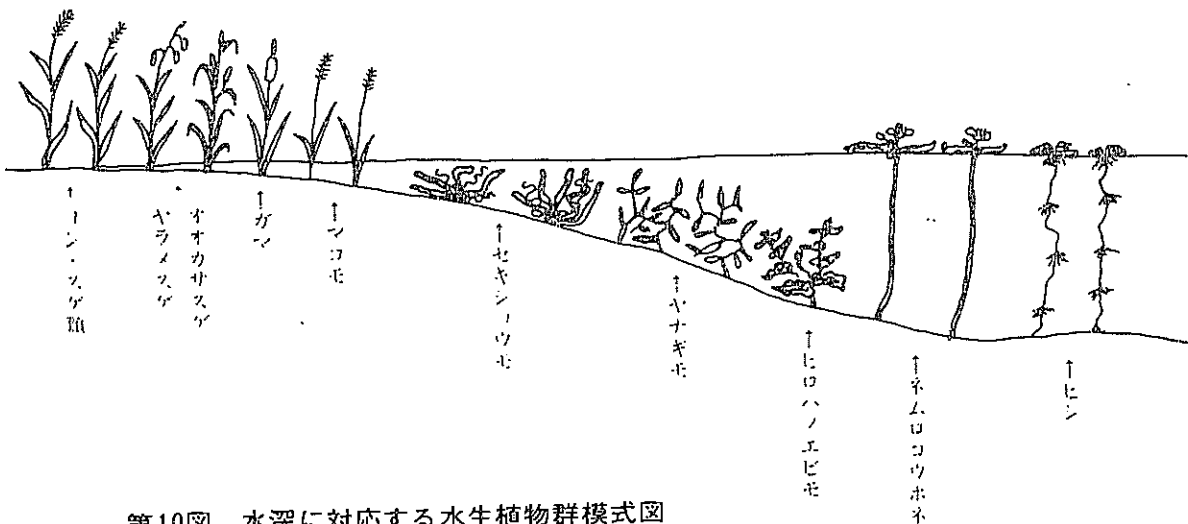
北海道教育大学釧路分校



このような状況を一つの系列においてみれば、ここでは、ミズドクサ→ミズスギナ→フトイ→マコモ→ガマ→ミツガシワ→キタヨシというような順序も推測される。つまり水生植物群は本来それぞれが独立した群集を構成すると考えるのが適當のように思うが、現在の湿原の中で観察される範囲において、その量的なひろがり、識別的な特質など分布の概況をもとにしてここではつぎの群集を設定した。

- | | |
|---------------|-----------|
| ミズスギナ→ミズドクサ群集 | ヒシ群集 |
| マコモ群集 | エゾヒツジグサ群集 |
| フトイ群集 | オヒルムシロ群集 |
| ミツガシワ群集 | ネムロコウホネ群集 |

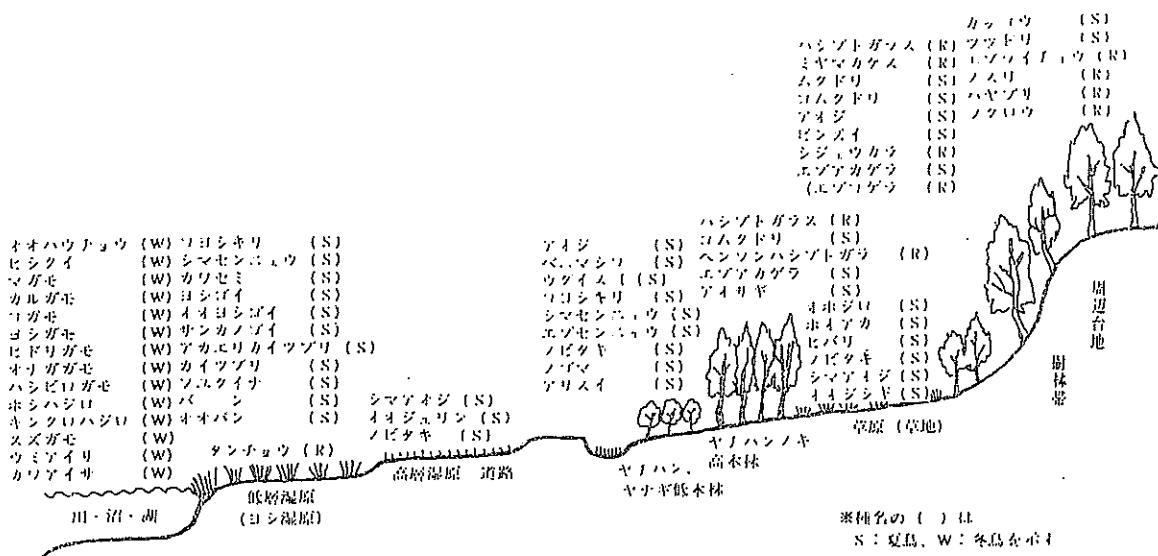
現在流れのほとんどとまった状態の川をはじめ、すでにある古川等では浮葉植物としてネムロコウホネが他を圧して多く、岸に近いところでは全般にミツガシワ、ミズスギナが量的に多くなっている。



第10図 水深に対応する水生植物群模式図
(シラルトロ沼)

3. 鳥 類

釧路湿原はタンチョウをはじめとして、かなりの種類数の鳥類が生息している。第16表には釧路湿原をキタヨシ群集のひろがる低層湿原域、ヤチハンノキ・ヤチダモ・ヤナギ類の低木林やヤチハンノキの高木林の広がる湿原周辺域、諸河川、湖沼などの内水面域に分け、過去の調査及び記録より釧路湿原での生息が確認されている鳥類を示した。85種の鳥類を記載してあるが、その中には森林性の鳥がかなり含まれているが、それは釧路湿原に長く突き出た宮島崎・キラコタン崎などの舌状台地や湿原周辺の台地の湿原と接する地区の樹林帯の一部も釧路湿原の一地域として考え、そこに生息する鳥類も記載したためである。



第11図 釧路湿原の環境勾配と鳥類相

なお、サンカノゴイについては近年その生息が確認されていないが、過去に釧路湿原での生息が確認されており、現在もその生息が十分考えられるので記載した。

オジロワシは、ここ数年塘路湖の周辺に2羽連れで出現しており、繁殖の可能性も考えられている。

ガン・カモ類は秋期オオハクチョウをはじめとして多数湿原の内水面域に渡来するが、厳寒期には内水面域の殆んどが結氷するため、釧路湿原で越冬するものは少ない。

17表には、釧路湿原の各環境とその鳥類相をおおまかに示した。釧路湿原で大きな面積を占める低層湿原域には、キタヨシの密生する湿原を管渠適地とするタンチョウを除いては、生息する鳥は非常に少ない。コヨシキリ・シマセンニユウ・ヨシゴイ・オオヨシゴイといった鳥も、川や湖沼や低木林帯の周辺の低層湿原が切れる付近のキタヨシ湿原に主に生息している。

第17表 釧路湿原で見られる鳥類

学名・和名	渡り	生息場所			繁殖	その他
		湿原周縁	低層湿原	内水面		
1. <i>Corvus leuillanii japonensis</i> ハシブトガラス	R	A・B			◎	
2. <i>Garrulus glandarius pallidifrons</i> ミヤマカケス	R	A			◎	
3. <i>Sturnus cineraceus</i> ムクドリ	S	A			◎	
4. <i>Sturnia sturnia philippensis</i> コムクドリ	S	A・B			◎	

学名・和名	渡り	生息場所			繁殖その他	
		湿原周縁	低層湿原	内水面		
5. <i>Passer montanus</i> Kaibatoi カラフトスズメ	R	J			◎	
6. <i>Chloris sinica sitchitoensis</i> カラフトカワラヒワ	S	A・B・C			◎	
7. <i>Carduelis spinus</i> マヒワ	W					
8. <i>Carduelis flammea</i> ベニヒワ	W					
9. <i>Uragus sibiricus sanguinolentus</i> ベニマシコ	S	C・D			◎	
10. <i>Emberiza aureola ornata</i> シマアオジ	S	D	E		◎	
11. <i>Emberiza spodocephala personata</i> アオジ	S	A・C			◎	生息数多い
12. <i>Emberiza cioides ciopsis</i> ホオジロ	S	D			◎	冬期も一部残るものあり
13. <i>Emberiza fucata fucata</i> ホオアカ	S	D			◎	
14. <i>Emberiza schoeniclus nortoniensis</i> オオジュリン	S	D	E・F		◎	
15. <i>Alauda arvensis japonica</i> ヒバリ	S	D			◎	
16. <i>Anthus hodgsoni hodgsoni</i> ビンズイ	S	A			◎	
17. <i>Anthus spinoletta japonica</i> タヒバリ	W					
18. <i>Motacilla alba lugens</i> ハクセキレイ	S			I	◎	
19. <i>Motacilla grandis</i> セグロセキレイ	S			I	I	冬期も一部残るものあり
20. <i>Sitta europaea baicalensis</i> シロハラゴジュウカラ	R	A・B			◎	
21. <i>Parus major minor</i> シジユウカラ	R	A・B			◎	
22. <i>Parus palustris hersoni</i> ヘンソンハシブトガラ	R	A・B			◎	
23. <i>Parus ater insularis</i> ヒガラ	R	A・B			◎	
24. <i>Aegithalos condatas japonicus</i> シマエナガ	R	A			◎	
25. <i>Lanius bucephalus bucephalus</i> モズ	S	A・B			◎	
26. <i>Lanius cristatus superciliosus</i> アカモズ	S	A・B			◎	

学名・和名	渡り	生息場所			繁殖	その他
		湿原周縁	低層湿原	内水面		
27. <i>Phylloscopus tenellipes</i> エゾムシクイ	S	A			◎	
28. <i>Phylloscopus occipitalis coronatus</i> センダイムシクイ	S	A			◎	
29. <i>Cettia diphone cantans</i> ウグイス	S	A・C			◎	
30. <i>Locustella fasciolata</i> エゾセンニユウ	S	C			◎	
31. <i>Locustella ochotensis ochotensis</i> シマセンニユウ	S	C	F	G	◎	生息数多い
32. <i>Acrocephalus bistrigiceps</i> コヨシキリ	S	C	F	G	◎	〃
33. <i>Acrocephalus arundinaceus orientalis</i> オオヨシキリ	S	C	F		○	
34. <i>Turdus chrysolaus chrysolaus</i> アカハラ	S	A			◎	
35. <i>Saxicola torquatus stejnegerri</i> ノビタキ	S	C-D-E			◎	生息数多い
36. <i>Eritacus calliope calliope</i> ノゴマ	S	C-D			◎	
37. <i>Troglodytes troglodytes fumigatus</i> ミソサザイ	T	A			○	冬期も少数残る
38. <i>Riparia riparia ijimae</i> ショウドウツバメ	S				◎	湿原周辺の崖地
39.						
40. <i>Chaetura caudacuta caudacuta</i> ハリオアマツバメ	S				○	湿原上空時折飛翔
41. <i>Alcedo atthis bengalensis</i> カワセミ	S			I	◎	
42. <i>Dendrocopos leucotos subcirris</i> エゾオオアカゲラ	R	A・B			◎	
43. <i>Dendrocopos major japonicus</i> エゾアカゲラ	R	A・B			◎	
44. <i>Dendrocopos kizuki seebohmi</i> エゾコゲラ	R	A・B			◎	
45. <i>Jynx torquilla japonica</i> アリスイ	S	B・C			◎	
46. <i>Cuculus canorus telephonus</i> カッコウ	S	A			◎	
47. <i>Cuculus saturatus horsfieldi</i> ツツドリ	S	A			◎	
48. <i>Asio flammeus flammeus</i> コミミズク	W					

学名・和名	渡り	生息場所			繁殖	その他
		湿原周縁	低層湿原	内水面		
49. <i>Strix uralensis japonica</i> エゾフクロウ	R	A			◎	冬期湿原に現われる
50. <i>Falco peregrinus japonensis</i> ハヤブサ	R				◎	時折湿原で見られる
51. <i>Falco subbuteo subbuteo</i> チゴハヤブサ	S				○	〃
52. <i>Buteo buteo burmanicus</i> ノスリ	R				◎	時折湿原で見られる
53. <i>Milvus migrans lineatis</i> トビ	R				◎	〃
54. <i>Ardea cinerea jouyi</i> アオサギ	S	B			◎	繁殖コロニーを作っている
55. <i>Ixobrychus sinensis</i> ヨシゴイ	S		F	G	◎	
56. <i>Ixobrychus eurhythmus</i> オオヨシゴイ	S		F	G	◎	
57. <i>Botaurus stellaris stellaris</i> サンカノゴイ	S		F	G	○	
58. <i>Cygnus cygnus</i> オオハクチョウ	W			H・I		
59. <i>Anser fabalis serrirostris</i> ヒシクイ	W			H・I		
60. <i>Anas platyrhynchos platyrhynchos</i> マガモ	W		H・I	H・I	◎	一部繁殖する
61. <i>Anas poecilorhyncha zonorhyncha</i> カルガモ	W			H・I	◎	一部繁殖する
62. <i>Anas crecca crecca</i> コガモ	W		H・I	H・I	○	少数繁殖
63. <i>Anas falcata</i> ヨシガモ	W			H・I	○	少数繁殖の可能
64. <i>Anas penelope</i> ヒドリガモ	W			H・I		
65. <i>Anas acuta acuta</i> オナガガモ	W			H・I		
66. <i>Anas querquedula</i> シマアジ	W			H・I		
67. <i>Anas clypeata</i> ハシビロガモ	W			H・I		
68. <i>Aythya ferina</i> ホシハジロ	W			H・I		
69. <i>Aythya fuligula</i> キンクロハジロ	W			H・I	○	
70. <i>Aythya marila mariloides</i> スズガモ	W			H・I		

学名・和名	渡り	生息場所			繁殖	その他
		湿原周縁	低層湿原	内水面		
71. <i>Bucephala clangula clangula</i> ホオジロガモ	W			II・I		
72. <i>Mergus albellus</i> ミコアイサ	W			II・I		
73. <i>Mergus serrator serrator</i> ウミアイサ	W			II・I		
74. <i>Mergus merganser orientalis</i> カワアイサ	W			II・I		
75. <i>Podiceps griseigena holbollii</i> アカエリカイツブリ	S			II	◎	
76. <i>Podiceps ruficollis poggei</i> カイツブリ	S			II	◎	
77. <i>Streptopelia orientalis orientalis</i> キジバト	S	A			◎	
78. <i>Scolopax rusticola rusticola</i> ヤマシギ	S	D			◎	
79. <i>Gallinago hardwickii</i> オオジシギ	S	D			◎	
80. <i>Tetrastes bonasia vicinitas</i> エゾライチョウ	R	A			◎	
81. <i>Grus japonensis</i> タンチョウ	R		F		◎	
82. <i>Rallus aquaticus indicus</i> フェウイナ (新称、旧名クイナ)	S			G	◎	
83. <i>Gallinula chloropus indica</i> バン	S			G・II	◎	
84. <i>Fulica atra atra</i> オオバン	S			G・II	◎	
85. <i>Haliaeetus albicilla albicilla</i> オジロワシ	R	A			○	

※ 渡り S:夏鳥 W:冬鳥 R:留鳥 T:旅鳥
 生息場所 A:樹林帯 B:ヤチハンノキ林 C:ヤチハンノキ・ヤナギ低木林
 D:草原 E:高層湿原 F:中間～低層湿原ヨシ原
 G:内水面隣接湿地 H:湖沼
 I:川 J:人家付近
 繁殖 ◎繁殖確実のもの ○繁殖していると考えられるもの ○繁殖の可能性あるもの

湿原周辺部のヤチハンノキやヤナギ類の低木林やヤチハンノキの高木林帯は、かなり豊かな鳥類相となっているが、今後の調査により、更に、ここに生息する鳥類は増えるものと思われる。

第18表には1972年6月18日、シラルトロ沼で行なった鳥類生息調査の結果を示した。シラルトロ沼はタンチョウの営巣地として知られており、この時にもヒナ連れのタンチョウの一番が確認されている。

第18表 シラルトロ沼及びその周辺での鳥類調査結果一覧 (1972.6)

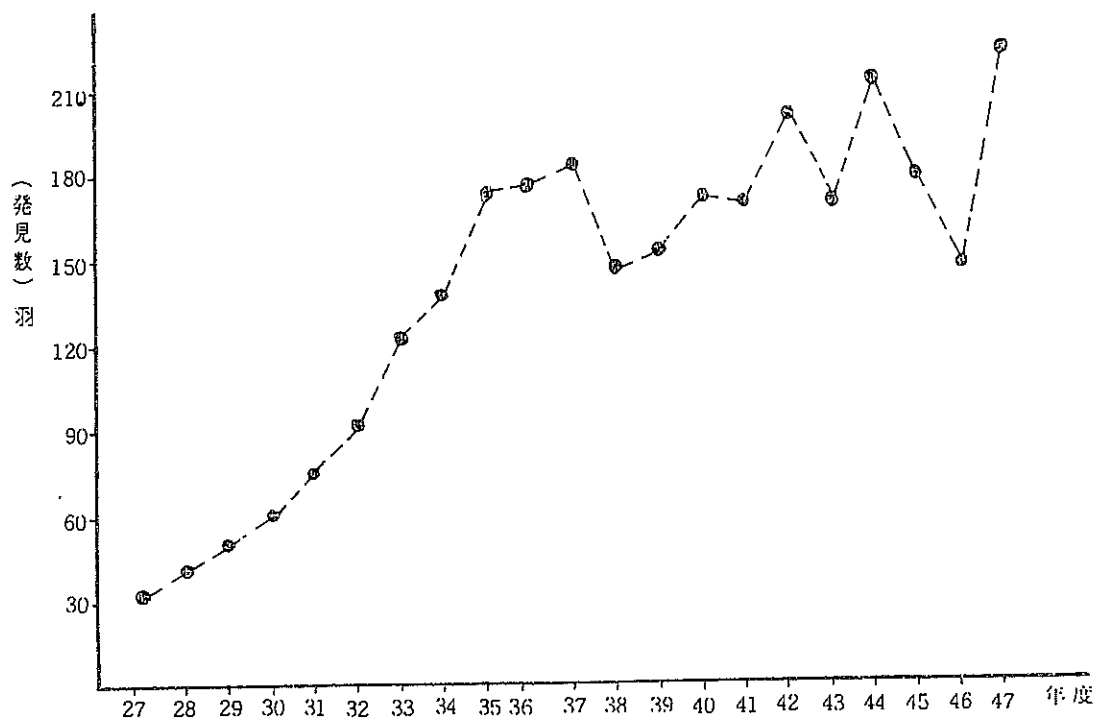
種名	移動 習性	生息場所					出現 頻度
		湖	湿地	湿地 灌木	森林	草地 人家 付近	
ハシブドガラス <i>Corvus leuallantii japonensis</i>	R			○	○		1
ムクドリ <i>Sturnus cineraceus</i>	R				○		1
カラフトスズメ <i>Passer montanus kaihatoi</i>	R					○	2
ニューナイスズメ <i>Passer rutilans rutilans</i>	R				○		1
カラフトカワラビウ <i>Chloris sinica sitchitoensis</i>	S			○	○		2
ベニマシコ <i>Uragus sibiricus sanguinolentus</i>	S			○	○		1
シマアオジ <i>Emberiza aureola ornata</i>	S		○			○	1
アオジ <i>Emberiza spodocephala personata</i>	S			○	○	○	2
オオジュリン <i>Emberiza schoeniclus hortoniensis</i>	S		○				1
ヒバリ <i>Alauda arvensis japonica</i>	S					○	1
ビンズイ <i>Anthus hodgsoni hodgsoni</i>	S				○		1
ハクセキレイ <i>Motacilla alba lugens</i>	R	○				○	1
シジュウカラ <i>Parus major minor</i>	R				○		1
コガラ <i>Parus atricapillus restrictus</i>	R				○		1
ヘンソンハシブトガラ <i>Parus palustris hensoni</i>	R			○	○		1
エゾムシクイ <i>Acanthopneuste tenellipes</i>	S				○		1
センダイムシクイ <i>Acanthopneuste occipitalis coronatus</i>	S			○	○		2
ウグイス <i>Horeies cantans cantans</i>	S			○	○		1
エゾセンニュウ <i>Locustella fasciolata</i>	S			○			3
シマセンニュウ <i>Locustella ochotensis ochotensis</i>	S		○	○			4
コヨシキリ <i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	S		○	○			4
トラツグミ <i>Turdus aureus aureus</i>	S				○		1
アカハラ <i>Turdus chrysolaus chrysolaus</i>	S				○		1
ノビタキ <i>Saxicola torquatus stejnegeri</i>	S		○	○		○	2
コハリ <i>Luscinia cyane</i>	S				○		3
ハリオアマツバメ <i>Chaetura caudacuta caudacuta</i>	S				○		1
エゾアカゲラ <i>Dendrocopos major japonicus</i>	R				○		1
カウコウ <i>Cuculus canorus telephonus</i>	S				○		1
ツツドリ <i>Cuculus saturatus horsfieldi</i>	S				○		1
ノスリ <i>Buteo buteo burmanicus</i>	R					○	1
トビ <i>Milvus migrans lineatus</i>	R					○	1
アオサギ <i>Ardea cinerea jouyi</i>	S	○					1
ヨシガモ <i>Anas falcata</i>	W	○					4
キンクロハジロ <i>Aythya fuligula</i>	W	○					3
アカエリカイツブリ <i>Podiceps griseigena holbellii</i>	S	○					1
オオジシギ <i>Gallina hardwickii</i>	S					○	1
タンチョウ <i>Grus japonensis</i>	R		○				1
キジバト <i>Streptopelia orientalis orientalis</i>	S			○	○		1

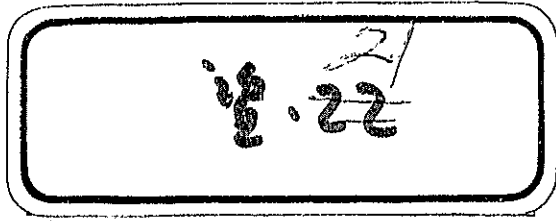
※ 移動習性 R:留鳥 resident, S:夏鳥 summer visitor, W:冬鳥 winter visitor
出現頻度 1:1から5回 2:6から10回 3:11から15回 4:16から20回 5:21から25回

釧路湿原の鳥類については、調査が行われ始めた段階であり、今後に負うところが多い。

第19表 特別天然記念物タンチョウ生息一斉調査結果一覧

調査年月日 昭和	発見数 羽	調査年月日 昭和	発見数 羽
27.11.29	33	38.12.12	147
28.12.4	42	39.12.5	154
29.12.3	52	40.12.4	172
30.12.3	61	41.12.5	170
31.12.3	76	42.12.5	200
32.12.5	92	43.12.5	171
33.12.5	125	44.12.5	212
34.12.8	139	45.12.5	179
35.12.13	172	46.12.4	147
36.12.5	175	47.12.5	222
37.12.5	184		





釧路湿原保全対策緊急調査報告書

昭和 5 9 年 1 月

環 境 庁

は じ め に

この報告書は、環境庁の請負調査に基づき（社）北海道自然保護協会に設置された、釧路湿原保全対策調査委員会が実施した「釧路湿原保全対策緊急調査」の調査結果について、その成果をとりまとめたものである。

釧路湿原は、タンチョウの生息地として広く知られているが、我が国に残された最大規模の湿原であり、昭和55年には「特に水鳥の生息地として、国際的に重要な湿地に関する条約」（ラムサール条約）による登録湿地として発効するなど、国際的・国家的な見地からその保全が強く要請されている。今回の調査は、釧路湿原の保全対策に資するために、湿原域とその周辺域の環境の現況及び保全方策等について調査・検討を行ったものである。

単年度のため、長期にわたる湿原環境への影響に関する調査・検討は不完全であったが、今後における湿原環境のモニタリング・システムの確立に期待する次第である。

この調査にあたっては、多くの関係各位、関係機関の御協力をいただき、また、調査および報告書のまとめについては、短期間の調査にもかかわらず、調査委員会の各調査員及び協力調査員諸氏の精力的な御努力によるところがきわめて大きい。ここに心から謝意を表するとともに、この報告書が釧路湿原の保全に貢献することを期待する次第である。

昭和59年1月

社 団 法 人 北海道自然保護協会

目 次

第1章 調査の概要	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の対象地域	1
3. 調査の期間	1
4. 調査の実施及び調査分野の分担	1
第2章 釧路湿原を取りまく社会環境	3
第1節 釧路湿原及び周辺の概況	3
1. 釧路湿原と行政区画	3
2. 人口等	3
3. 産 業	4
4. 土地利用等	6
5. 土地所有	14
6. 法令等に基づく指定状況	16
7. 湿原の管理・監視状況	20
第2節 釧路湿原を取りまく動向	21
第3章 釧路湿原の地形・地質	23
第1節 はじめに	23
第2節 釧路湿原と周辺の地形	24
1. 概 要	24
2. 地形模式図（ダイヤグラム）	24
3. 釧路湿原の地形	24
4. 河川と湖沼	26
5. 砂丘地	28
6. 台地・丘陵及び河岸段丘	28
第3節 釧路湿原と周辺の地質	29
1. 概 観	29
2. 湿原と周辺の地質系統	30
3. 釧路湿原の地史	38
第4節 泥炭層の構造	39
1. はしがき	39
2. 調査の目的と資料	39
3. 泥炭の厚さ（深さ）	40
4. 泥炭層の構造	43
5. 泥炭層の火山灰と泥灰の発達	48

第5節 土壌の現況	50
1. 調査の目的	50
2. 土壌柱状の調査と既存資料	51
3. 土壌層位	51
4. 火山灰土の分布	56
第6節 地形改変の経年変化	57
1. 本節の目的	57
2. 調査に用いた資料	57
3. 地形改変の推移	58
第4章 釧路湿原の水文・気象	69
第1節 釧路湿原の水文・気象特性	69
1. 釧路湿原の水文的特性	69
2. 釧路湿原の気象特性	70
第2節 地下水位	72
1. 泥炭地の地下水位	72
2. 地下水位変動のタンクモデル	74
3. 釧路泥炭地における地下水位変動パターン	80
第3節 水質	85
1. 水質	85
2. 農用地開発と水質	86
3. 水質調査事例	88
4. 1983年の調査結果	95
第4節 蒸発散	98
1. 蒸発散の調査・研究フロー	98
2. 蒸発散量の測定	98
3. アルベドの地域差と時間変動	102
4. 釧路地域における乾燥・湿潤の長期変動	113
第5節 接地微気象	113
1. 接地微気象調査の目的	113
2. 観測方法	114
3. 結果と解析	114
第5章 釧路湿原の植物相	120
第1節 釧路湿原をめぐる諸条件	120
第2節 釧路湿原の植生帯的位置付け	122
第3節 調査の項目と方法	128
第4節 調査結果	128
1. 湿原植生とその分布	128

2. ハンノキ林の構造	146
3. ハンノキ林の分布と経年変化	154
4. 周辺植生	162
第6章 釧路湿原の動物相	167
第1節 はじめに	167
第2節 哺乳類	167
1. 種類相と分布	167
第3節 鳥類	169
1. 種類相と分布	169
2. タンチョウについて	170
第4節 両生・爬虫類	182
1. 両生類	182
2. 爬虫類	183
第5節 魚類	183
1. 釧路川本流域	184
2. 支流域	184
3. 湖沼	184
第6節 昆虫類	185
第7節 考察	186
第7章 釧路湿原周縁の埋蔵文化財	189
第1節 はじめに	189
第2節 釧路湿原西縁の遺跡群	189
1. 大楽毛周辺の遺跡群	189
2. 山花・桜田周辺の遺跡群	189
3. 北斗遺跡群	190
4. 温根内・下雪裡間の遺跡	190
5. 宮島岬とキラコタン岬の遺跡	191
6. 下久著呂・コッタロ周辺の遺跡	191
第3節 釧路湿原東縁の遺跡群	192
1. 五十石周辺の遺跡群	192
2. 茅沼・シラルトロ沼周辺の遺跡	192
3. 塘路湖周辺の遺跡	193
4. 達古武・細岡・岩保木周辺の遺跡群	193
5. 遠矢・テンネル・別保の遺跡群	194
6. 釧路市内の遺跡群	194
第4節 むすび	194
第8章 釧路湿原の景観	199

第1節 景観の形成	199
1. 地形の概要	199
2. 景観形式	200
3. 自然公園内と国内の湿原	203
4. 釧路湿原とサロベツ原野	205
第2節 景観の構成	207
1. 植生の概要	207
2. 特殊景観	209
3. 景観構成	211
第3節 主要な展望地点	213
1. 北斗展望地点	213
2. キラコタン岬展望地点	215
3. 岩保木山展望地点	215
4. その他の展望地点	216
第4節 野外レクリエーション利用	217
1. 車による主要な利用ルート	217
2. 野外レクリエーション利用	219
3. 管理上の二・三の問題	220
第9章 地元意向調査	222
1. 調査の目的	222
2. 調査の方法	222
3. 調査の結果	222
第10章 保全方策と提言	238
1. 湿原の評価	238
2. 湿原の保全と利用のための提言	242
3. おわりに	252

表6-1 釧路湿原域産哺乳類目録

食虫目	エゾヤチネズミ
トガリネズミ科	エゾアカネズミ
カラフトヒメトガリネズミ	カラフトアカネズミ
エゾトガリネズミ	ヒメネズミ
オオアシトガリネズミ	ハツカネズミ
翼手目	ドブネズミ
ヒナコウモリ科	クマネズミ
チチブコウモリ	食肉目
ウサギコウモリ	クマ科
コテングコウモリ	エゾヒグマ
兎目	イヌ科
ウサギ科	キタキツネ
エゾユキウサギ	イタチ科
齧歯目	ニホンイイズナ
リス科	ホンドイタチ
エゾリス	ミンク
エゾシマリス	偶蹄目
エゾモモンガ	シカ科
ネズミ科	エゾシカ
ミカドネズミ	

第3節 鳥類

釧路湿原の鳥類に関しては橋本(1975)によってその全体の概要が明らかにされ、次いで正富(1979)、橋本(1981、'82)、島田(1983)によりさらに新たな知見が追加された。ここではこれらの結果のほかに、主として周辺域で行った新たな調査結果を加えてこの地域の鳥類群集について以下にとりまとめを行った。

1. 種類相と分布

釧路湿原地域においては、これまでに16目38科164種の鳥類が記録されている(表6-2)。橋本(1975)はこのほか、戦前に記録されたもので近年その記録のないサギやカモ類数種をあげているが、今回の目録ではそれらを省略した。なお、この表のうち「その他」の項に掲げられているものは主として橋本(1975)による市街地を中心とした地域での情報である。ここでの記録数は非常に多いが、これは偶然に迷行して捕獲されたものなどが集積されたため、必ずしも生息の実態を示すものではないと思われる。各環境別の鳥類分布状況をみると次のとおりである。

(1) 湿原内草原

この地域は湿原中央部を占める高層湿原およびキタヨシ、スゲ群集からなる低層湿原を含む地域で、この地域に出現する主要な鳥類は36種ほどである。この地域のうち高層湿原は植生構造が単純で、そこではノビタキ、シマアオジ、オオジュリン、シマセンニュウなどが優占し鳥類相は単純である。

一方、ヨシが優占し、釧路湿原の中で最も大きな面積を占める低層湿原ではコヨシキリの生息密度が最も高く、次いでシマセンニュウ、オオジュリンなどが多い。この地域でみられる他の鳥類の大部分は、他の地域で繁殖する一時的な侵入者である。また、この植生域はタンチョウの主要な繁殖地である。

(2) 湿原内低木林

湿原周辺など、やや乾燥した地域のハンノキ林、河畔のヤナギ林などを含む地域で、ここでは44種の鳥類が記録されている。この地域の林床にはヨシなど湿性草本も多いため、ノゴマ、シマセンニュウ、コヨシキリ、シマアオジ、オオジュリンなど草原性の種が多いと同時に、低木林性のカッコウ、アリスイ、モズ、ビンズイ、ウグイス、カワラヒワ、ベニマシコ、アオジをはじめキジバト、アカゲラ、コゲラ、コルリ、エゾセンニュウ、センダイムシクイ、キビタキ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ニュウナイスズメなど森林性の種なども比較的多いという特徴がある。冬季には周辺丘陵域の森林性鳥類がこの林に漂行する。

(3) 湿原内湖沼および河川

この環境では水鳥類を中心に48種が記録され、湿原内では最も種類が多い。この地域で繁殖するものにマガモ、カルガモ、ヨシガモ、カイツブリ、アカエリカイツブリ、バン、オオバンなどがある。北海道ではサロベツなどで繁殖しているキンクロハジロもここで繁殖している可能性がある。

これらの水域は秋・春の渡りの時期には水鳥類の重要な中継地となっており、オオハクチョウ、ヒシクイ、オンドリ、オナガカモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミアイサ、シマアジ、ハシビロガモ、スズガモ、キンクロハジロ、ビロードキンクロ、ホオジロガモなどが多数渡来する。また、一部の開水面ではこれらの水鳥の一部が越冬する。

(4) 丘陵地森林

湿原周辺の森林地帯では少なくとも71種が記録されている。天然林はミズナラ、ケヤマハンノキ、シラカバなどの広葉樹からなるため、ここではセンダイムシクイ、ハシブトガラ、シジュウカラ、キビタキなどが多く、カラマツ造林地ではヒガラなど針葉樹林性の鳥が多くなる。また、シラルトロ沼周辺の林では1982年7月、達古武周辺の林では1983年6月にオジロワシが記録されており、この付近での繁殖の可能性がある。

(5) 丘陵地草地

この環境でみられる鳥類は少なくとも24種あり、大部分は湿原内の草原のもと共通しており特殊なものはみられない。

(6) 丘陵地河川

この環境の鳥類も大部分は湿原内水系のものと同じくあり、その一部がみられるにすぎない。そのうち、ヤマセミはこの河川域において繁殖しているものと思われる。

2. タンチョウについて

北海道のタンチョウについてこれまで多面的な研究報告があり、主要なものだけでも十数篇に達す

る(井上1970、正富1970、1971、1972 a、b、1974 a、b、1975、Masatomi & Kitagawa 1974、1975、正富ほか1982、北海道教育委員会、1975、1980、林田、1975、北海道、1983、Archibald(in Press)など)。ここではこれらの文献を基礎として、釧路湿原のタンチョウに関する現状の諸問題および今後の保護策等について若干の考察を加えたいと思う。

(1) 分布と数の変遷

明治以前においては、タンチョウは北海道内各地の湿原に多数生息しておりそれらは捕獲して食用にされたほか塩漬にして本州方面へ送られたといわれる。また、夏に北海道で繁殖したものは越冬のため秋には本州の東北地方から南は東京付近にまで渡っていた記録がある。明治に入ってから乱獲はつづいたため北海道のタンチョウは明治20年ころになると著しく減少し、明治22(1989)年5月9日庁令第33号をもって一切の捕獲が禁止されるにいった。しかし、このころは札幌郡、千歳郡、勇払郡、夕張郡、空知郡など道央の池沼や湿原地帯にもまだ繁殖地があった。

その後明治25年、次いで28年にも法令が改正され、捕獲ばかりでなく販売も禁止されるなど法令上の保護策は一段と強化された。しかし、開拓の進展によるタンチョウ生息地の縮小、銃器の普及と密猟等によりタンチョウは急速に姿を消していった。

一時は絶滅したと考えられていたタンチョウが1924年(大正13年)釧路湿原に残存していることが発見され、この当時の生息数は18~20羽以下であると推定されていた(斎藤1925)。釧路湿原における再発見を機会に、生息地の一部が禁猟区となり(1925)、1935年(昭和10年)にはこの鳥が天然記念物、1952年(昭和27年)には釧路湿原の生息地の一部2,748町歩が特別天然記念物に指定された。この間釧路湿原における生息数は1925年(大正14年)には15羽、次年には25羽と推定されている(葛1928)。また、1935年には地元でタンチョウ保護会が結成され、冬期の死亡を減らし、生息数を増やすための手段としてドジョウ、セリ、トウモロコシなどの給餌が行われた。しかしこの時は餌付けに成功しなかった。1939年ころになると大楽毛の湿地でもよくタンチョウの姿がみられるようになったが、これは生息数が急増したことによるものとは考えがたい。1952年(昭和27年)2月、釧路地方で数日間にわたって猛吹雪という悪天候が続いた折に、はじめてタンチョウがトウモロコシに餌付き、それがこれ以後の生息数増加の基礎を築くことになった。巨大な開発が行われる以前のこの当時の北海道の自然環境は、昭和30年代以降に比べると著しく良好であったことは疑いのないところである。それにもかかわらずこの時期タンチョウの生息数が増加し得なかったのは、渡りをしなくなったこの鳥において冬の餌不足というものがそれをはばむ大きな障害になっていたことを示すものであろう。冬の餌付け成功後極めて急速に生息数の増加をみたことがそれを証明している。

さて、1951年(昭和26年)以前には釧路湿原以外の地域でタンチョウの生息記録はなかったが、1952年(昭和27年)根室風連湖周辺地域においてタンチョウの生息および、旧巣が発見され、1953年6月にはヒナをつれた親鳥など、少なくとも5羽の生息が確認された(周1954)。この風連地区のタンチョウが、釧路湿原のものと同様古くからここに生息していたものの残存個体であるか、あるいは釧路湿原で増殖したものの分散個体であるのかは明らかでない。しかし、前述のようにすでにここで繁殖が行われていたこと、およびその時期はまだ釧路湿原での餌付けが開始されたばかりで、その効果による増加個体とは考えにくいことから、風連地区のこれらの個体は前者の可能性が

強い。もしそうではない場合でも、比較的早い時期からこの地域に分散定着していたものであろう。このような推定の根拠の一つは、後述するように、分散個体が新しい土地に定着した後、繁殖を開始するまでにはかなり長年月を要するという事実があることがあげられる。

根室地方でのタンチョウ生息の初期の状況は以上のようなものであるが、1953～4年（昭和28～9年）には十勝大樹町にも分布していることがわかり、1967年（昭和42年）5月には十勝豊頃町大津において営巢中のものが初めて発見された。この場合、最初の分散個体発見から営巢までに10年以上を要しているところに興味がある。この営巢の発見年が実際の繁殖開始年よりも多少おくらしている可能性もあるが、タンチョウのように生長がおそく、長命な鳥の場合新しい土地へ分散個体が移動し、それが定着繁殖するまでにはかなり長年月を要することが予想され、この場合はその例であろうと思われる。この予想を裏付けるもう一つの良い例が斜里郡小清水町濤沸湖畔への分散個体の定着過程においてみられる。濤沸湖へは1971年（昭和46年）に初めて若齢個体と思われる2羽が出現し、その後毎年生息がみられると共に近年の繁殖期にはその数が5～8羽に達し、1982年（昭和57年）には初めて繁殖が確認された。この場合もやはり移住から繁殖開始までには10年余を要しており、十勝の例と一致しているところが興味深い。

さらに、移住定着過程は不明であるが、1981年（昭和56年）には国後島でも繁殖が確認され、タンチョウの分布拡大が南千島にまで達したことが明らかになった（正富ほか1982）。

さて、次に生息数の増加と分布の変化についてももう少し論議をしておきたいと思う。北海道におけるタンチョウの生息数の変化を、図6-1に示した。1952年以前の生息数についてはきちんと測定がなされたものではないため、そのデータの信頼性には問題がある。しかし、1920年代から1940年代にかけては釧路湿原を中心とした地域において前述の事実から20～30羽程度が生息していたものと仮定してほぼ間違いないであろう。またこの間、生息数の増加はほとんどないか、もしあったとしてもごくわずかであったものと思われる。すなわち、春の繁殖による増加数と冬を中心とした時期の死亡数がバランスを保っていた時期である。しかし、1952年の餌付け成功後、急速に記録数の増加が始まり、1960年ころまでの第一期の急増期をむかえた。この時期の記録数の増加はすべてが真の増加であるかどうかは明らかでない。すなわち、餌付けの誘引効果によるタンチョウの集合性の増加が起り、それまでカウントされなかったものが記録数につけ加わった可能性も否定できないからである。しかし、一部にそのような個体があったとしても、全体として増加したことは明らかで、この生息数増加が圧力となって、タンチョウの第一次の分布拡大がこの時期に起こっている。前述の十勝地方への分布拡大はその一つである。また、詳しい調査がないため詳細は不明であるが、この過程においては釧路湿原内および根室方面での域内分布もより高密になったものと思われる。そして1960年代になると生息数は約170羽に達し、十勝、釧路、根室地域において営巢可能地をほぼうめつくすほど、地域内分布を拡げ高密になったものと思われる。しかしこの時期、各地に分散した個体の多くは第一次増加期に生産された若齢個体であったものと思われるので、繁殖開始までには数年を要し、また、新しい繁殖地でのヒナの生産効率も比較的悪かったものと予想され、それが原因となって1960年代における、タンチョウ総数の増加停滞が生じたものと考えられる。すなわち、前者については十勝での繁殖開始年が分散個体の出現後10年余を経た1967年であったこともその一例であり、また、後者については出生後冬期まで生残した幼鳥の数がほぼ一定であることの原

因の一部はそれによるかも知れない。しかし、タンチョウは長命の鳥であり、給餌の効果もあって亜成体以後の死亡率は低いものと思われるので、この時期に生産された個体は年をおって蓄積され、それらが成体となって繁殖個体群に加入するに従い、分布拡大の圧力は増大したものと予想される。この効果が現われ始めるのが1970年代初めであり、1971年斜里側の濤沸湖畔へ分布を上げたものはまさにその例であろう。また、これまでの記述からも明らかなように、国後島への分散が起こったのもこのころであった可能性が極めて高い。図6-1に示されているように、1970年代後半から北海道のタンチョウ生息数は第二次の増加期を迎えているが、これは以上のような経過を経て、第二次の分布拡大と平行して起っており、北海道内ではオホーツク海側に沿って今後どこまで繁殖地を拡大できるかによって次の停滞期までの時間がきまるものと予想される。また、冬の給餌が続くかぎり、当分はこの増加が続くものと思われる。

(2) 分布域内における釧路湿原の位置づけ

ここではタンチョウ生息域のうち、主として営巣繁殖に重点を置いて、営巣地の数がどのように変化し、全分布域の中における釧路湿原の役割がどのように変化したかについて検討を加えたいと思う。もとより、タンチョウの生活にとっては、繁殖地ばかりでなく越冬地、非繁殖個体の滞留地なども重要なものであり、それらを見捨てるわけにはいかない。しかし、ここでの論議の主旨と資料の豊富さの点から、営巣地の数を利用した。

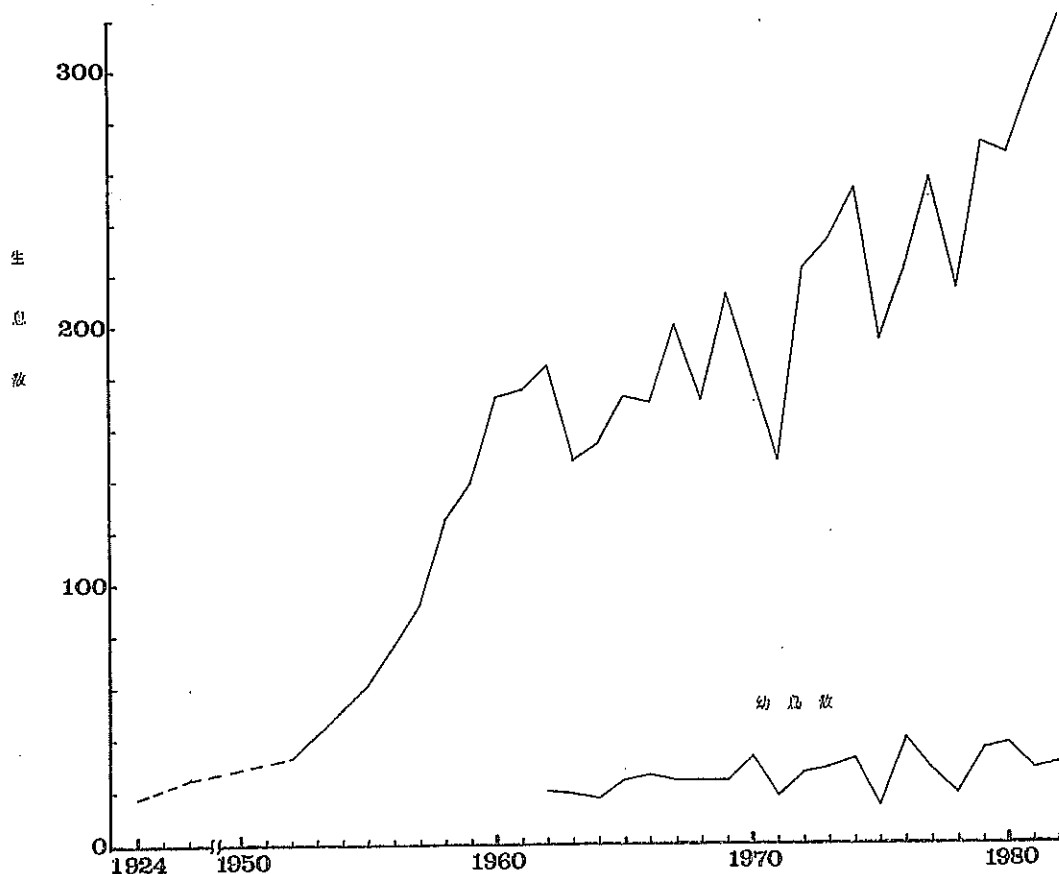


図6-1 タンチョウ生息数の年次変化

前項で示した如く、1950年頃までは生息数が非常に少なく、一部根室地区での繁殖があったとしても、主要な繁殖地は釧路湿原であり、恐らく大部分の営巣地はこの湿原に集中していたものと思われる。また、近年の釧路湿原における営巣数から考えても、この当時の生息数であればすべてをここに収容することも可能であったものと考えられる。

その後1950年代の増加期において営巣地が釧路湿原内においてどのように拡がり、次いでこの湿原以外に拡大して行ったかについてはほとんど資料はなく、検討できない。不完全ではあるが営巣地の記録が比較的多くなるのは1967年以降であり、Archibald (in Press) の資料に基づき次のような検討を行った。まず、タンチョウ個体数増加の停滞期である1970年までの営巣数累計(この間に一度でも利用された営巣地の数)および1971年以降は2年毎の合計利用巣数を求め、各期における釧路湿原内の巣数の比率を計算し、タンチョウ繁殖地としての釧路湿原の寄与率を示したのが図6-2である。各営巣地は毎年利用されるわけではなく、利用率は年によりかなり変化するが、ここではそのような年次変化やセンサス精度の年次変化によるデータの大きなふれを少なくするという目的から、あえてこのような比較法を採用した。従ってこれは正しくは営巣可能地(環境)の比率とみることができる。さて、この図によると個体数の第二次増加が始まる1970年ころまで、その寄与率は急速に減少し、生息数増加率のゆるやかな1970年代のそれは30~40%ではほぼ変化がなかった。しかし、再び急速な増加に転じ始めた1980年代になると寄与率は再び減少傾向を示している。今後分布拡大が進めばこの傾向は一層顕著になるものと思われる。

ここでは資料の関係からヒナの生産率ではなく、営巣可能地数によって寄与率を示してきた。営巣地によってヒナの生産率(生存率)に差がある可能性をもつが、仮にそれらには大差がないものとする、1970年代において、釧路湿原ではタンチョウのヒナ総数の30~40%を生産した可能性があり、この比率は今後減少して行く傾向をみせているといえる。ただし、ここで一つ注目しておく必要があるのは、毎年のセンサス時に記録された総個体数の増加にもかかわらず、幼鳥数にはほとんど変化がなく、1962~1970年の停滞期には年平均23.4羽、1971~1982年のそれは28.3羽で、後期においてわずかに約5羽の増加がみられたにすぎないということである。これは一体何を意味しているのだろうか。一つには密度の増加に伴って幼鳥の初期死亡率が高まり、その結果センサス時における幼鳥の生残数があまり増加しなかったとも考えられる。しかし、図6-2に示したとおり、生息数の増加をみた近年においても営巣地の総数は必ずしも増加していない傾向がみられることを示しており、そのことが原因であるかも知れない。前述のような近年における繁殖地域の拡大にもかかわらず、実際の繁殖番数は本当に増加していないのか?この疑問に関してはセンサス精度の年次変化の問題もあっても詳しく検討できる資料に乏しいが、1974年と1979年のセンサス時に発見された巣のうち抱卵巣数合計を示せばそれぞれ59巣と51巣である。なおこのうち釧路湿原内における抱卵巣数はそれぞれ18巣(全体の30.5%)と17巣(同33.3%)であった。これに関しては更に精度の高い資料を集めて検討する必要があるけれども、もし、この予想が正しいとすれば、近年における生息数の増加はタンチョウ全体の生存率が高まり、それによる生残個体の蓄積が増加の大きな力になっていることを示唆している。

以上に述べてきたように、北海道のタンチョウ個体群の増殖に対して、釧路湿原がはたしている役割の程度は、タンチョウ分布の拡大と共に低下してきた。しかし、このことはタンチョウ個体群

の保護にとってはむしろ喜ばしいことである。また、このような状況のもとでも釧路湿原のもつタンチョウ生息地としての重要性に何ら変更がないということは言うまでもない。

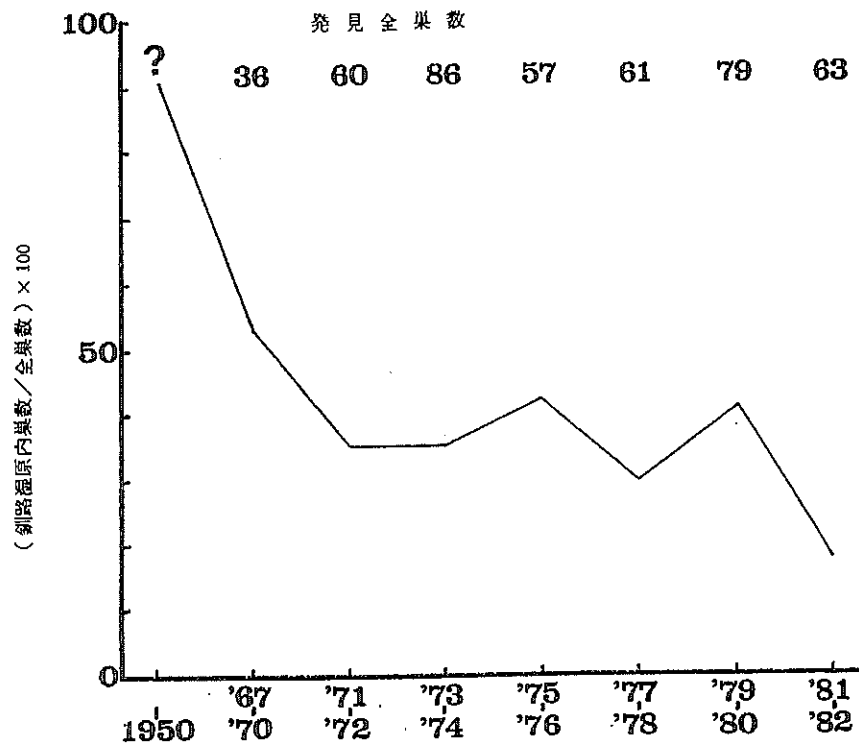


図6-2 北海道地域産タンチョウの繁殖における釧路湿原繁殖地の寄与率の変化

(3) 営巣地の環境とその保護

北海道におけるタンチョウの営巣可能地(一度でも営巣した所)は1970年代を通じて80個所前後に達している(図3-5)。その中には前述のように近年になって新たに営巣地となった所がある反面、大楽毛の営巣地のように環境破壊のため1973年以降は全く営巣しなくなった所がある。ここでは営巣地の環境について検討を加え、その保護について考察したいと思う。

タンチョウの営巣環境について小柳(1980)はA:ヨシ類密生地またはその近くでの営巣、B:河畔や湖畔での営巣、C:ヤチハンノキ等の低木林内またはその近辺での営巣、の3つに分け、調査した35巣中A34%、B43%、C23%であったことを報告している。また、この報告では1974年調査時に比してCタイプのものの増加が目立つことを指摘している。このことは近年におけるヤチハンノキ林地帯の拡大傾向がタンチョウ営巣地に影響していることを示唆している。

図6-6は近年(1979、1980)における釧路湿原内のタンチョウ営巣地32個所の分布を示したものである。営巣地の中、大部分のもの(28個所、87.5%)は湿原周辺の丘陵に近い所または丘陵にはさまれた沢内の湿原に作られている。丘陵地または湿地周辺の地界から1km以上もはなれた湿原の真中に営巣したものはわずかに4例(12.5%)だけである。しかし、この営巣地の分布と1982年時の植生図(北海道1983)を重ね合わせた場合、興味深い結果が得られる。すなわち、湿原の真中に位置すると思われた巣も実はいずれもヤチハンノキ林内かあるいはその群落の外縁に近い所に作られていることである(図6-7)。このことは多くの森林性動物が林縁において最も密度が高いのと同様、タンチョウも湿原の動物であるとはいえ環境の推移帯(辺縁部)を最もよく選好するものであ

ることを示している。この状況は釧路湿原に限らず根室地方などいずれの繁殖地においても同様である。タンチョウにおけるこのような営巣地選好性はこの鳥の保護策を設定する上で重要な意味をもつ事実であると思われる。特に釧路湿原中に設定されている天然記念物指定地域は湿原そのものを対称とする場合はよいとしても、タンチョウ繁殖地という観点からみると、これは必ずしも最良の地域とはいえない。

釧路湿原周辺での環境改変は毎年進行し、南部における都市地域、その他における農業地域の拡大、河川改修などには著しいものがある。特に各地の河川流域は、上でみたとおり、タンチョウ営巣地として最も重要な地域であり、営巣地の約半数がこのような環境にあるだけにその改変は重大なものである。昭和55年北海道土地利用基本計画（農業地域）によると、もしこの計画が将来にわたって実行された場合、釧路湿原におけるタンチョウの繁殖地は3分の1以下に激減し、個体群そのものが壊滅的打撃を受けることが予想される。従って釧路湿原に限らず、タンチョウ繁殖地となっている同様な環境を重点的に保護するための基本計画を策定する必要がある。この中では湿原や植生の維持のための方策を検討すると共に、一様に広がるヤチハンノキ林の一部に小面積の伏開地を作るなど、上の諸事実を応用してタンチョウ営巣地の積極的造成などについても考慮する必要がある。そうすることによって営巣密度を高めることも不可能ではないと思われるからである。

北海道のタンチョウ個体群増加の最大の力は冬の給餌であり、これが冬の餌不足を補い生存率の向上に大きな働きをしていることは疑いのないところである。従って、さらに増加をはかり分布域を拡大させるためには冬の給餌は不可欠のものである。一方、この給餌はこれほどに増加したタンチョウが往時のような南方への渡りを再開しないことの一つの原因になっている可能性があり、そのことがさらに冬期の生存率を高める二次的な効果にもなっていると思う。給餌に関しては以上のような直接、間接の影響があり、その功罪に関して議論もあろうが現状では止むを得ない処置であると思われる。

タンチョウの生態に関してはまだ不明の事項が多い。野外での分散、定着、繁殖開始がどのような個体によりどのように行なわれるのか、定住性はどうか、親子関係、寿命、生存率など、この鳥の保護の上で最も基本となる情報が不足している。これらは個体識別のためのバンディングなどが行われれば急速に解決への道が開かれるものである。タンチョウはこれまで地元の方を初め多数の関係者の努力により、著しい保護効果を上げてきた。しかし、今後長期にわたって保護していくためには生息環境を初め多くの問題があり、上にあげたタンチョウ自体の生態の基礎資料を得ることもまた極めて重要なことである。特に生息数の増加期にある現在こそそれを行う最良の時期であり、バンディングのような諸外国では日常的に行われている技術などは本来ならば余程早い時期から適用されるべきであったと思われる。タンチョウのような長命な鳥の生態情報を整えるためには長年月を要するので技術的に可能な調査は早急に実行されることが望ましい。

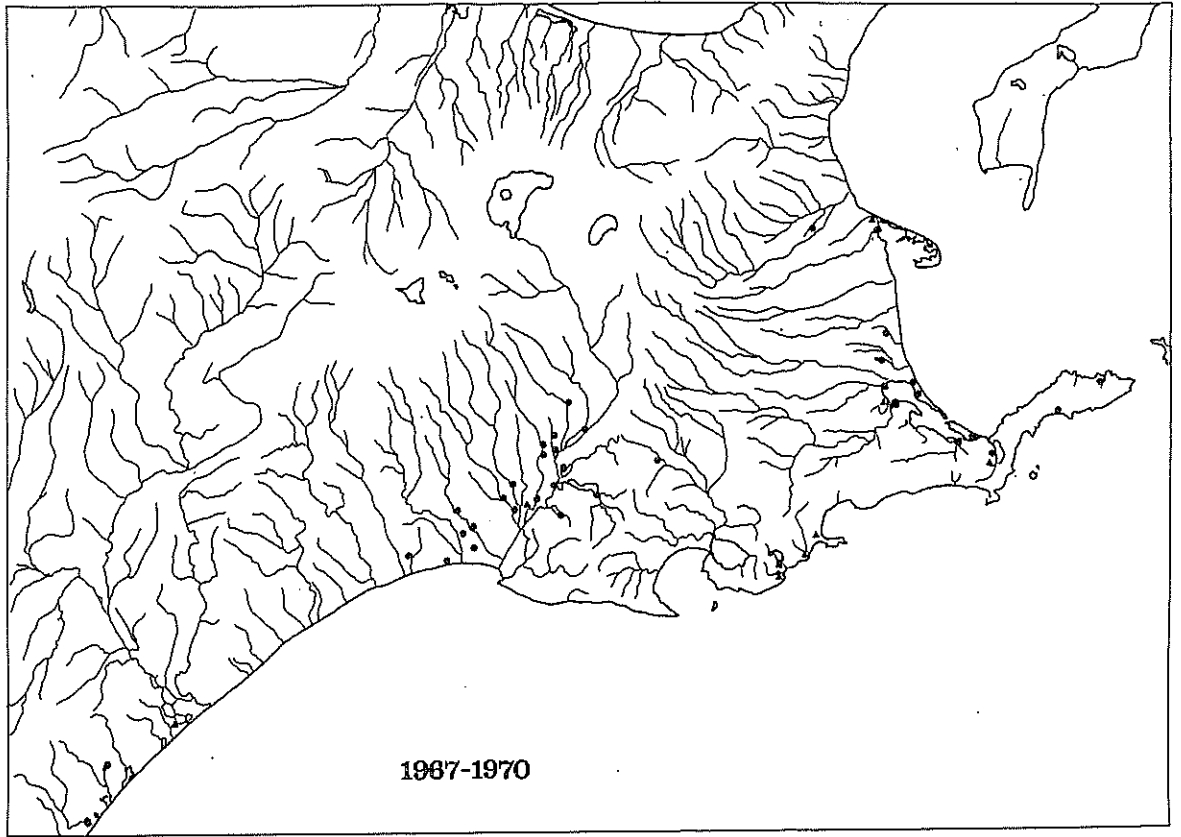


図 6-3 1967-1970年時におけるタンチョウ営巣地の分布 (●営巣地、▲非繁殖個体)

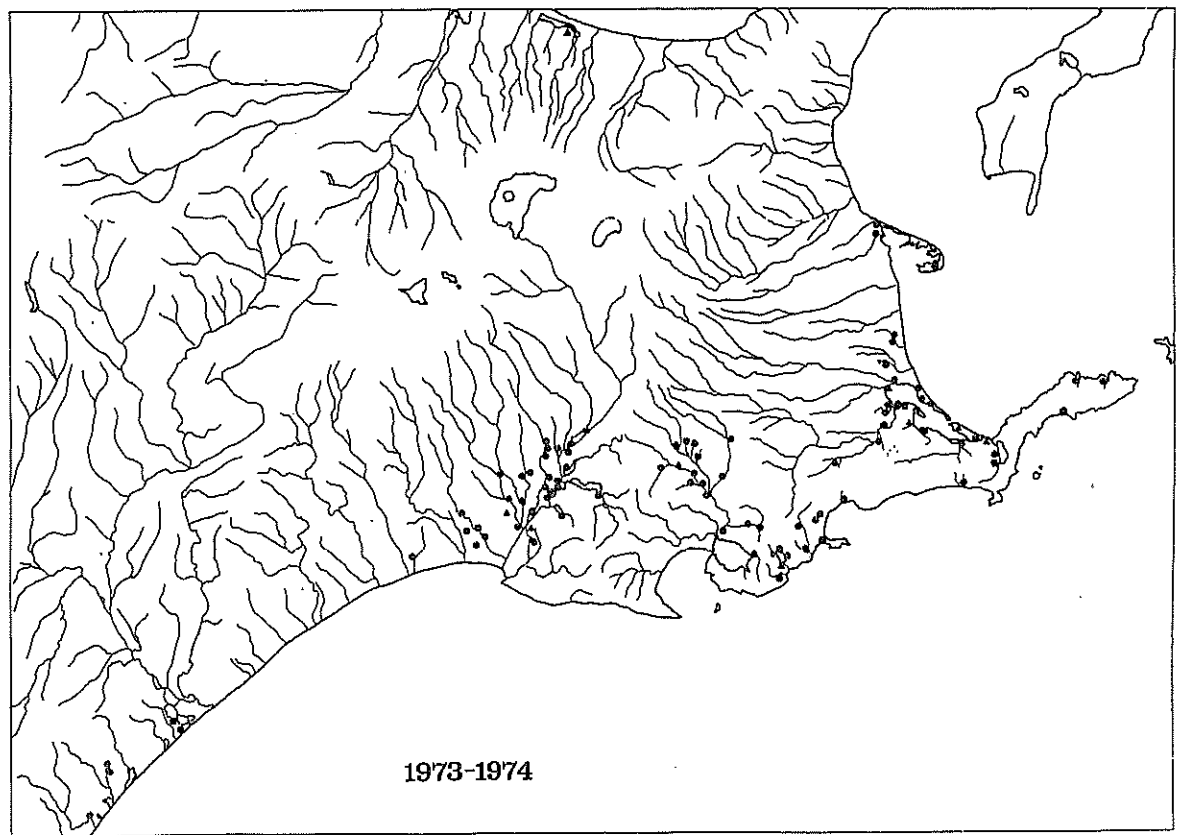


図 6-4 1973-1974年時におけるタンチョウ営巣地の分布

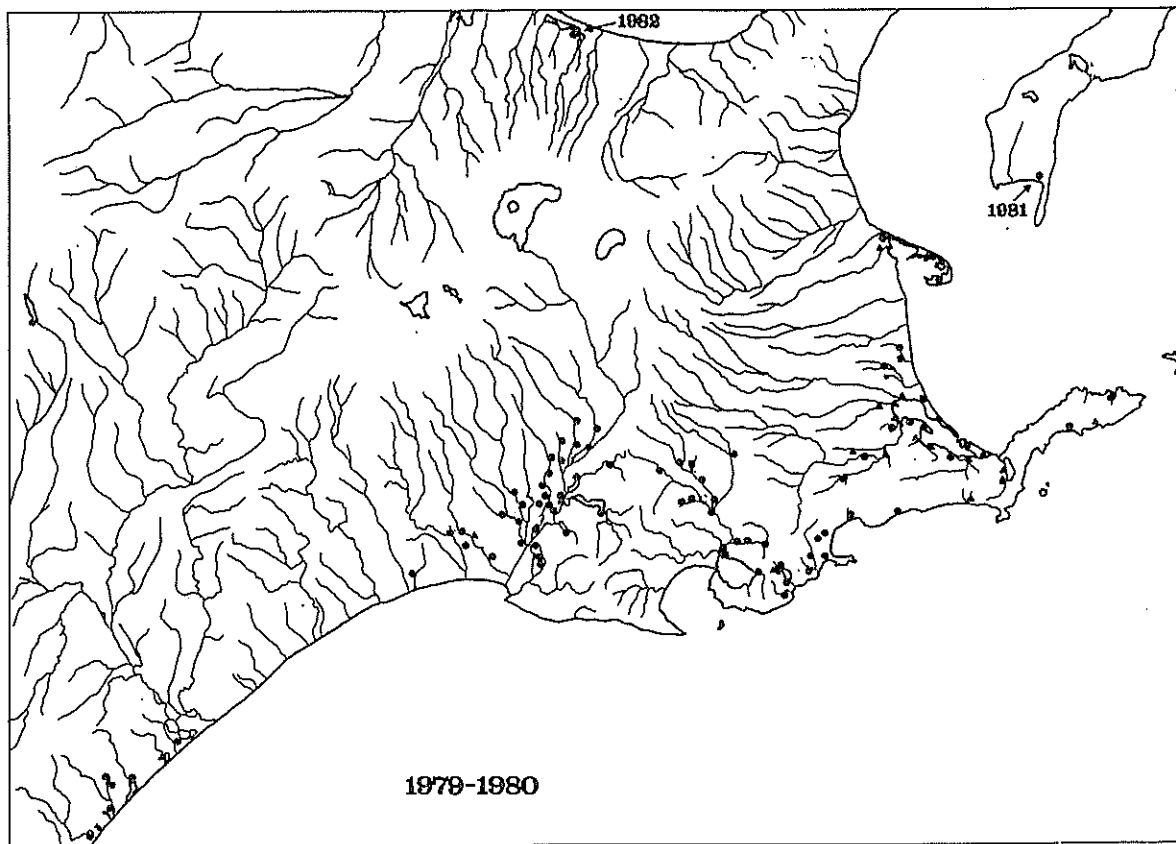


図 6 - 5 1979-1980年時におけるタンチョウ営巣地の分布

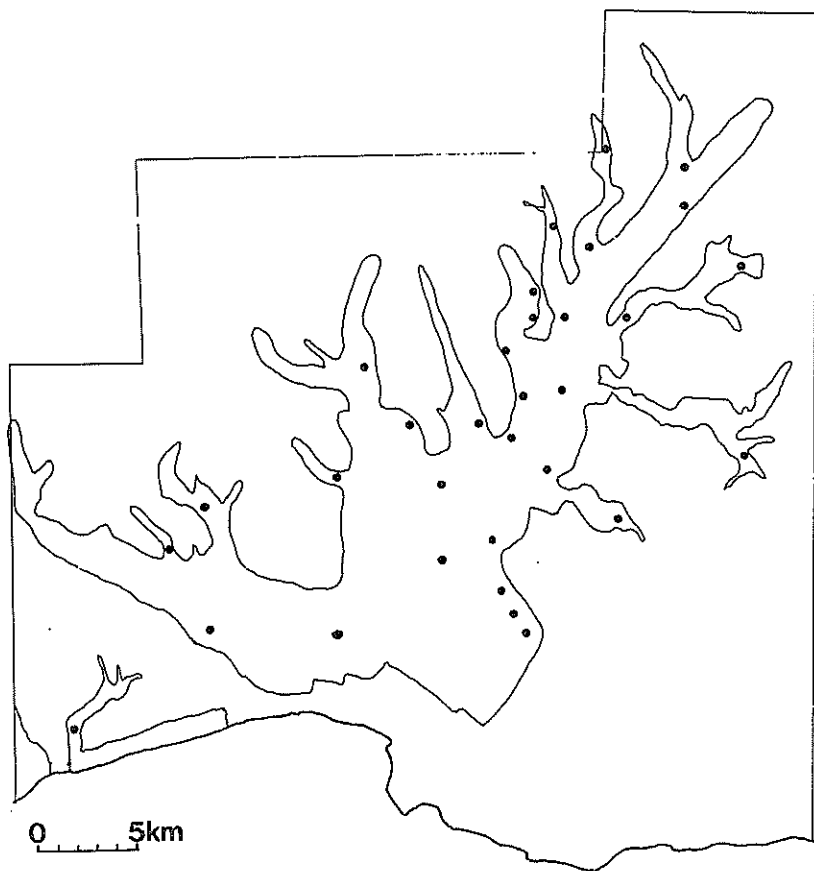


図 6 - 6 釧路湿原内におけるタンチョウ営巣地の分布(1979、1980年)



図6-7 釧路湿原中央部におけるヤチハンノキ林の分布
(1982年、点刻部)とタンチョウ営巣地の分布

表 6-2 釧路湿原域産鳥目録および分布

種 名	湿 原 域		丘 陵 域	そ の 他	種 名	分 布	分 布	分 布
	草 低 湖 原 木 沼 林 河 川	森 草 河 林 地 川						
アビ目					ビロードキンクロ	W-		
アビ科					ホオジロガモ	W++		W+
シロエリオオハム	T-				ミコアイサ	W+		
カイツブリ目					ウミアイサ	W+		W+
カイツブリ科					カワアイサ	W+		
カイツブリ	S++			S+	ワシタカ目			
ハジロカイツブリ	T-				ワシタカ科			
ミミカイツブリ	T+				トビ	R+++R+++R+++	R+++R+++R+++	R++
アカエリカイツブリ	S++			S+	オジロワシ	W+ (R+)		
コウノトリ目					オオワシ	T-		
サギ科					オオタカ			T-
サンカイゴイ				S-	ツミ		S+	
ヨシゴイ				S-	ハイタカ	R+	R++	R+
オオヨシゴイ				S-	ケアシノスリ	W+		
アマサギ	T-			S+	ノスリ	R+++R+++R+++	R+++R+++R+++	R++
チュウサギ	T-				ハイイロチュウヒ	W+		
コサギ	T-				チュウヒ	R+	R+	
アオサギ	S++	S++		S+	ハヤブサ科			
ガンカモ目					ハヤブサ		R+	
ガンカモ科					チゴハヤブサ	S+	S+	
ヒシクイ	T+				コチョウゲンボウ	W+		
オオハクチョウ	W++				コチョウゲンボウ			T++
オンドリ	S+		S+	S+	キジ目			
マガモ	R+ (W++)			R+	ライチョウ科			
カルガモ	S++			S++	エゾライチョウ		R+	
コガモ	R+			W+	キジ科			
ヨシガモ	R+			R+	ウズラ			S-
ヒドリガモ	W++			W+	コウライキジ		R+ R+	R+
オナガガモ	W+				ツル目			
シマアジ	T-				ツル科			
ハシビロガモ	W+			W+	クロヅル			W-
ホシハジロ	R+			R+	タンチョウ	R+++R+++R+++	R++	
キンクロハジロ	R++ (W+++)			R++	カナダヅル			W-
スズガモ	W++			W+	マナヅル			W-
					クイナ科			
					クイナ	S++		
					シマクイナ	T-		
					バン	S+		S+
					ツルクイナ			T+
					オオバン	S++		S++
					チドリ目			
					チドリ科			
					コチドリ	S+		

<u>シギ科</u>					キツツキ目				
ウズラシギ	T+				<u>キツツキ科</u>				
ツルシギ	T+				アリスイ	S++	S++		S+
タカブシギ	T-				ヤマゲラ	R+	R+		R+
イソシギ		S+		S+	クマゲラ		R-		
ヤマシギ			S++	S+	アカゲラ	R++	R++		R+
タシギ				S+	オオアカゲラ	R+	R+		
オオジシギ	S++		S++	S+	コアカゲラ	R+	R+		
<u>カモメ科</u>					コゲラ	R+	R++		
ユリカモメ		W++		W+	スズメ目				
オオセグロカモメ		R++		R++	<u>ヒバリ科</u>				
ウミネコ		R-			ヒバリ	S++	S++		S++
ミツユビカモメ		W++		W++	<u>ツバメ科</u>				
アジサシ		T-		T+	ショウドウツバメ		S++		S+
ハイ目					ツバメ				S+
<u>ハト科</u>					イワツバメ		S+		S+
キジバト		S+	S++	S++	<u>セキレイ科</u>				
アオバト			S+		キセキレイ			S+	
ホトトギス目					ハクセキレイ	R+	R++	R++R++	R++
<u>ホトトギス科</u>					セグロセキレイ				T+
ジュウイチ			S-		ビンズイ	S++S++S++	S++S++S++		S+
カッコウ	S++S++		S++	S+	タヒバリ			T+	T+
ツツドリ			S+		<u>ヒヨドリ科</u>				
フクロウ目					ヒヨドリ				T+
<u>フクロウ科</u>					<u>モズ科</u>				
トラフズク			R+	R+	モズ	S++	S++S++		S+
コミミズク		W+		W+	アカモズ		S+		S+
コノハズク					<u>レンジャク科</u>				
オオコノハズク			R+	R+	キレンジャク				W+
アオバズク				T+	<u>ミソサザイ科</u>				
エゾフクロウ			R+	R+	ミソサザイ		W+	S+	
ヨタカ目					<u>ヒタキ科</u>				
<u>ヨタカ科</u>					ノゴマ	S++S++			S+
ヨタカ				S+	コルリ	S++	S++		
アマツバメ目					ジョウビタキ				T+
<u>アマツバメ科</u>					ノビタキ	S++S++		S++	S+
ハリオアマツバメ			S++		マミジロ			S+	
アマツバメ				T+	トラツグミ			S+	S-
ブッポウソウ目					アカハラ		S++	S++	S+
<u>カワセミ科</u>					ツグミ	W+		W+ W+	W+
ヤマセミ		R+		R+	ウグイス		S++	S++S++	S+
アカショウビン		S+	S+	T-	エゾセンニュウ		S++	S++S++	S+
カワセミ		S+		S+	シマセンニュウ	S++S++		S++	S+

マキノセンニユウ	S+			カシラダカ	T+ T+	T+	
コヨシキリ	S++S+++	S+++	S+	シマアオジ	S++S++	S++	T+
オオヨシキリ			T+	ノジコ			T+
メボソムシクイ		T+		アオジ	S++S++	S++S++	S+
エゾムシクイ		S+	T+	オオジュリン	S++S++	S++	S+
センダイムシクイ	S+++	S+++	S+	<u>アトリ科</u>			
キクイタダキ		R+		アトリ			T+
キビタキ	S++	S++	T+	カワラヒワ	S++S++	S++S++	S+
オオルリ		S+	T-	マヒワ		T-	
サメビタキ		S+		ベニヒワ	T+		
エゾビタキ		T+	T+	ハギマシコ		W+	
コサメビタキ	S+	S+	T-	イスカ			T-
<u>エナガ科</u>				ベニマシコ	S++S++	S+ S+	S+
エナガ	R++	R++	T+	ウソ		S+	S+
<u>シジュウカラ科</u>				イルカ		S+	
ハシブトガラ	R++	R++	R+	シメ	S+	S+	S+
コガラ		R+		<u>ハタオリドリ科</u>			
ヒガラ		R++	R+	ニュウナイスズメ	S++	S+	
ヤマガラ			T+	スズメ	S+		R++
シジュウカラ	R++	R++	R+	<u>ムクドリ科</u>			
<u>ゴジュウカラ科</u>				コムクドリ		S+	S+
ゴジュウカラ	R+	R+	R+	ムクドリ	R++	R++	S++
<u>キバシリ科</u>				<u>カラス科</u>			
キタキバシリ		R+		カケス	R+	R+	R+
<u>メジロ科</u>				ハシボソガラス	R++R++	R++R++	R+
メジロ		S+	S+	ハシブトガラス	R++R++	R++R++	R++
<u>ホオジロ科</u>							
ホオジロ	T+	S-	T-	16目38科164種	36、44、48	71、24、12	105
ホオアカ		S+	T+				

R留鳥；S夏鳥；W冬鳥；T旅鳥または一時的出現。 生息数、-：まれ；+：少ない；++：普通；+++：多い。

第4節 両生・爬虫類

釧路湿原の両生・爬虫類に関して最も詳細な調査を行ったのは高山(1975)である。その後は近藤(1983)の調査がある程度で、ここではこれらを参照し、一部新たな資料を加えて分布の概要を述べる。

1. 両生類

湿原およびその周辺に生息するものは有尾類2種、無尾類2種の計4種である(表6-3)。

エゾサンショウウオは北海道の森林地帯に広く分布し、釧路湿原域では丘陵域の布伏内で記録され

釧路短期大学生涯教育センター
第11講座 テキスト

標茶町の自然(2)

標茶町の野鳥

橋本正雄



釧路短期大学
標茶町教育委員会

釧路短期大学生涯教育センター

第11講座 テキスト

標茶町の自然(2)

標茶町の野鳥

橋本正雄

釧路短期大学
標茶町教育委員会

標茶町の野鳥

— 目 次 —

表紙写真・タンチョウ

題 字・標茶町教育長 福岡将孟

はじめに	(1)
I. 鳥はどんな動物でしょう	(2)
1. 鳥とは	(2)
2. 鳥の体と感覚	(4)
3. 鳥の用語	(7)
II. 標茶町で見られる天然記念物の鳥	(12)
1. タンチョウ	(12)
2. オジロワシ	(14)
3. オオワシ	(15)
4. クマゲラ	(16)
5. シマフクロウ	(16)
6. ヒシクイ	(18)
III. 野鳥と生息環境	(19)
1. 水辺の鳥	(19)
2. 草原の鳥	(25)
3. 森の鳥	(28)
IV. 標茶町の野鳥リスト	(33)
V. 楽しい野鳥観察	(46)
1. 双眼鏡	(46)
2. 観察の仕方	(46)
3. 観察のマナー	(47)
4. 野鳥を招こう	(47)
おわりに	(50)

はじめに

鳥は、野生動物の中で、もっとも人との関わりが深い動物といえます。東京のような大都市の街中でも、スズメやカラスの姿を見かけることができます。もちろん自然豊かな山野には沢山の野鳥が生活し、その囀（さえず）りや愛らしい行動は自然の味わいを一層生き生きとしたものにしてしてくれます。どんなに素晴らしい景勝の地でも、野鳥の姿や声がなかったら、なにか味気ない気がします。

ほんの一昔前までは、日本各地で野鳥を食用や観賞用にと大量に捕獲することが行なわれてきました。しかし、近年は人々の意識が変わり、大切な自然の一員である野鳥を保護することで、そこから得られる野鳥との出会いに大きな喜びを感じたり、庭先に野鳥の餌台を置くなどより積極的に野鳥との触れ合いを楽しむことが多くなっています。

南北60.5km、東西58.9km、面積1,107.45km²の標茶町は、北部の4,254haが阿寒国立公園に、南部の11,993haが釧路湿原に含まれるように、自然環境が豊かな町です。海岸から離れているために残念ながら海鳥はほとんど見られませんが、生息する野鳥は多く、特別天然記念物のタンチョウ、天然記念物のオジロワシ、クマゲラ、シマフクロウなどの貴重な鳥を含む150種ほどの野鳥が観察されています。これは約580種といわれる日本産鳥類のほぼ4分の1、約310種といわれる釧路産鳥類のほぼ2分の1を占めています。

天気の良い朝などに、公園や河原など身近な所で良いのですが、双眼鏡を片手に小一時間でも散策すると、思いのほか多くの野鳥に出会えるものです。そんな時に、本書がお役に立てば幸いです。

I. 鳥はどんな動物でしょう

1. 鳥とは

鳥は人間と同じ脊椎動物の仲間、爬虫類から進化したといわれます。世界には約9千種が生息し、チドリ目カモメ科やスズメ目カラス科などと27目61科のグループに分けられます。

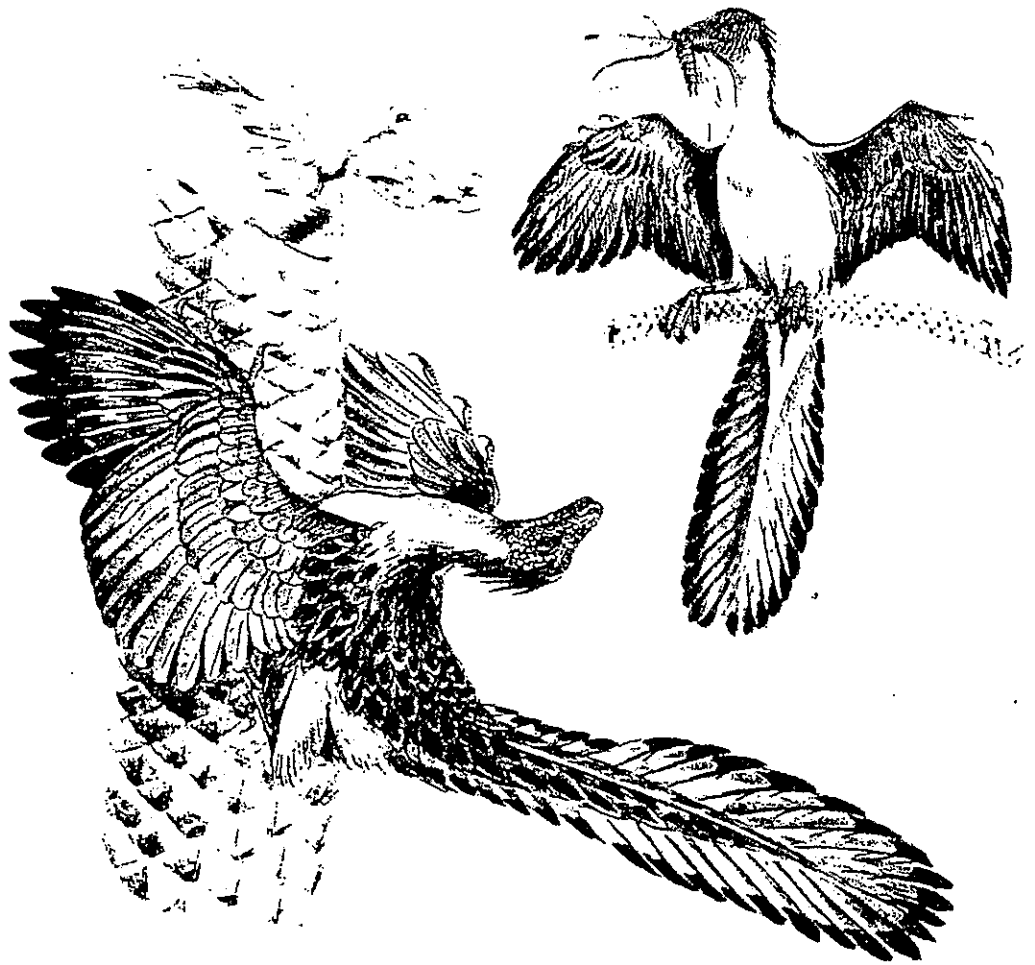


図-1 始祖鳥の復元図
資料：平凡社（1986）

第1図 鳥類各目系統概略図

①=地鳥, ②=渉鳥, ③=水鳥, ④=樹鳥を
しめす。各目の主体となる生活型である。
合計27目161科8927種。

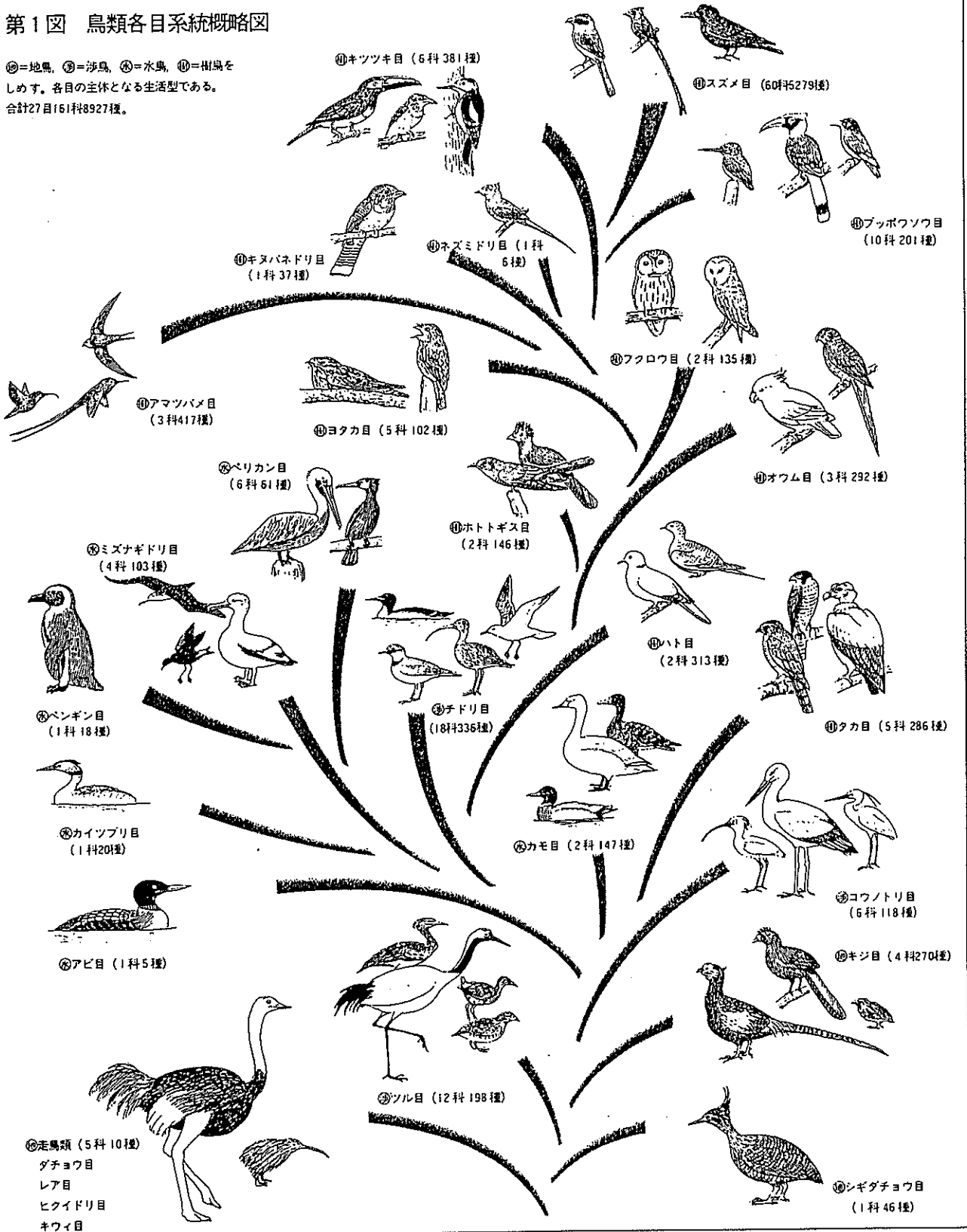


図-2 鳥類各目系統概略図

資料：世界文化社（1984）

鳥の体の特徴は、何といたっても羽毛を持つことです。鳥以外に羽毛をもつ動物はいません。1851年、ドイツ南東部のババリア地方の石切場で、始祖鳥という鳥の祖先にあたる動物の化石が発見されました。始祖鳥は1億5千万年前に生息していた動物で、大型のハトほどの大きさです。鳥よりもむしろトカゲに似ていましたが、腕の部分にははっきりとした羽毛が生えていました。

今日、鳥はもっとも繁栄している動物の一つです。深海を除いて、極寒の極地圏から不毛の砂漠、ヒマラヤ山脈などの高山までと、地球上のあらゆる場所に生息します。大きさもマメハチドリのように全長5.8cm、体重2gという小さなものから身長243cm、体重125kgのダチョウまでと様々です。

鳥は優れた能力の持主ですが、飛翔はその最たるものです。飛翔速度は小鳥で時速30~50km、カモやハクチョウでは60~80kmですが、最も速い鳥といわれるハリオアマツバメ（標茶町でも見れる）では時速170kmに達します。鳥の大部分は高度900m以下とあまり高くは飛びませんが、アネハヅルはヒマラヤ山脈（高度7km）を越しての渡りを行ないます。潜水能力も高く、コウテイペンギンでは265mの潜水記録があります。

2. 鳥の体と感覚

(1). 羽毛

鳥の羽毛は、爬虫類の鱗から進化したものです。生物の体で羽毛ほど軽くて丈夫なものは他にないといわれ、飛翔と保温に最高の機能を果たします。羽毛の数はツグミ大の小鳥で約3千枚ほどですが、ハクチョウ類では2万5千枚を超えます。

羽毛には正羽、糸状羽、綿羽などがあります。正羽は羽軸と羽弁からできていて、体をおおう体羽、翼についた風切羽、それに尾羽に分けられ、最も重要な羽です。鳥はすべて定期的に古い羽毛を落として新しい羽毛をつけますが、これを換羽と呼びます。ほとんどの鳥は、繁殖期が終了すると間もなく換羽をします。カモやツルなど水辺に住む鳥の中には、一度に多くの羽が抜けるためにある期間飛べなくなるものがあります。

鳥は赤、青、黄など美しい体色をしています。その多彩な色合は羽毛に含まれる色素のほかに羽毛の構造から生じる色から構成されています。色素には

カロチノイド系色素（赤、黄）とメラニン色素（黒）の2タイプがあります。青、緑、紫などの色素は羽毛にはありません。これらの色は、羽毛による光の反射、回折によって生じるもので、虹に色がつくのと同じ仕組みです。

羽毛には本来多少防水性がありますが、さらに鳥は尾羽の付根に羽脂腺を持っていて、その分泌物を全身に塗り防水処理をします。ですからカモなどの水鳥でも洗剤で体を洗うと、羽の防水性を一時失い、溺れてしまいます。

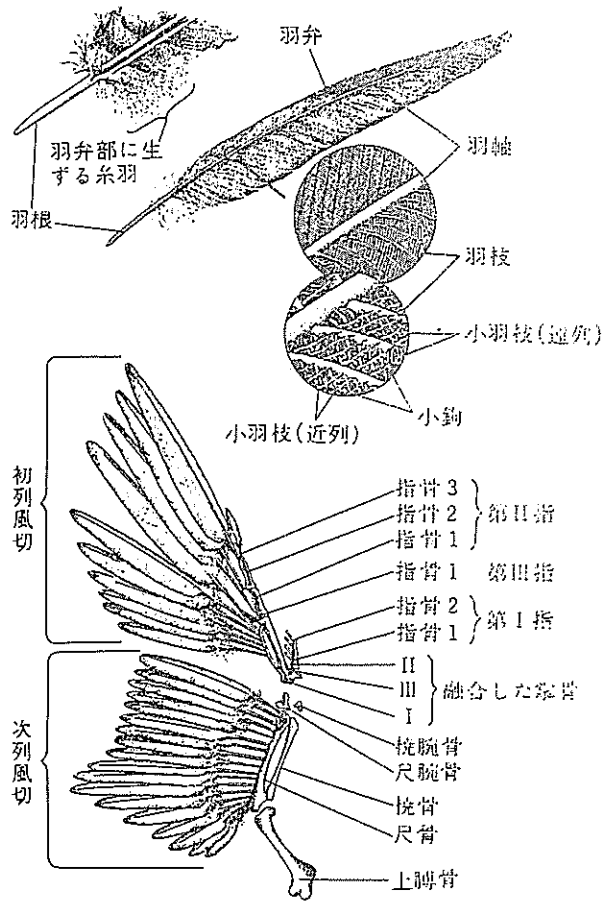


図-3 翼の骨と飛翔のための羽毛
資料：A & H・クリュックシャンク (1982)

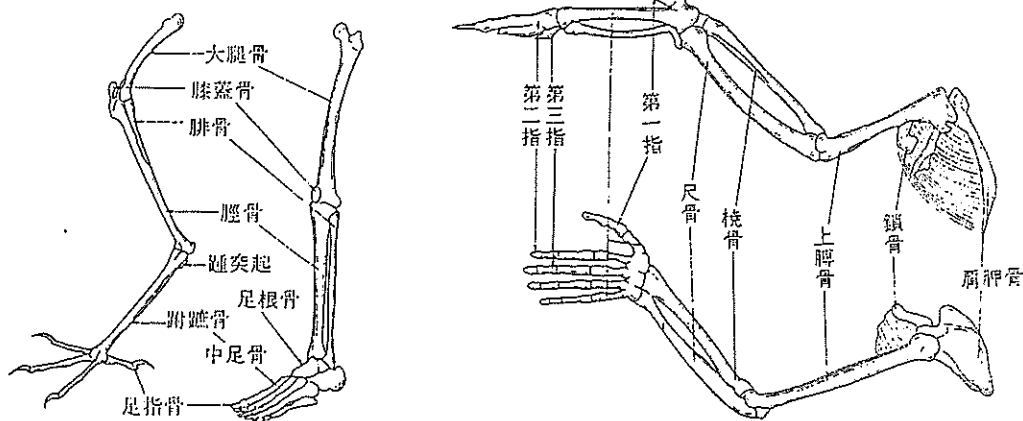


図-4 鳥とヒトの脚と腕の骨の比較
資料：A & H・クリュックシャンク (1982)

(2). 嘴

鳥の嘴は人の爪と同じように角質ですが、血管や神経が分布していて感覚があります。鳥によっては触覚だけで餌を探することができます。多くの鳥の嘴の色は繁殖期には変化します。また形も変化するものもあります。釧路地方の沿岸にも生息するエトピリカ（アイヌ語で嘴の美しい鳥の意味）の繁殖期の鮮やかな赤い嘴は、冬には黒ずみ、形も小さくなります。

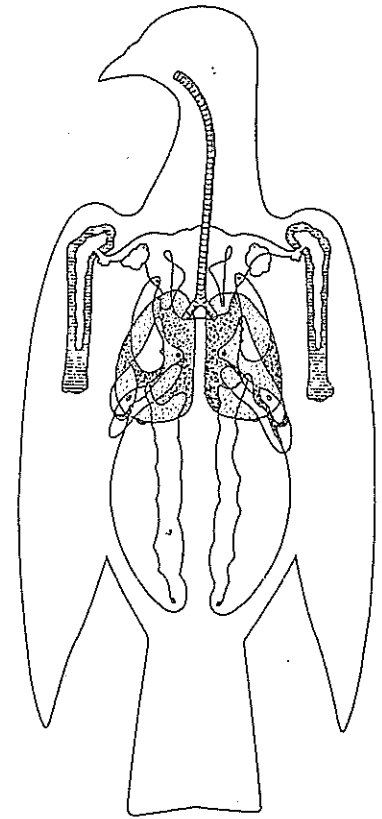
ふ化するときのヒナは、上嘴の先端に卵歯という鋭い突起をもっていて、この卵歯をつかって卵の殻を内側から壊します。卵歯はふ化後間もなく消失します。

(3). 気のうち

鳥には肺とつながった5対以上の気のうちが体中に広がり、骨の中まで伸びています。気のうちは呼吸をたすけ、また体内の熱を冷却する機能をもっています。鳥が酸素の薄い8千mもの高空を飛んだり、長時間飛び続けることができるのは、この気のうちが大きな働きをしているといわれます。

(4). 視覚・嗅覚・聴覚・味覚

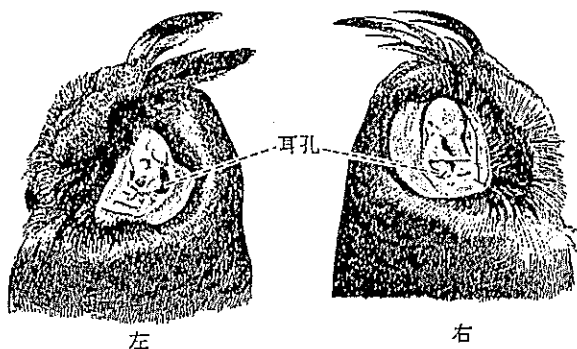
鳥は目の動物といわれ、すばらしい視力を持っています。色覚もすぐれ、また暗がりでも人間程度以上の視力があり、鳥目の鳥はまずいないというのが事実です。タカの視力は人間の8倍もあり、またフクロウは薄明りの中で人の10倍の視力をもつといわれます。鳥には上下のまぶたのほかに第三のまぶたといえる半透明な瞬膜があり、眼



鳥の気のうち（ハト）。肺に連結している気のうちは、鳥の体を軽くするばかりでなく、外呼吸を助け、体温調節（冷却）にも関係している。肺は図の中央の暗く陰をつけた部分。気のうちの一部は上腕の大きい骨の中まで入りこんでいる。（Carl Weltyによる）

図-5 鳥の気のうち

資料：A & H・クリュックシャンク（1982）



左
フクロウ（トラフズク）の大きな耳。左右の開孔部がずれている。

右

図-6 鳥の耳

資料：A & H・クリュックシァンク（1982）

の表面をきれいに保護する役目を果たしています。瞬膜はサングラスや水中眼鏡ともなります。ほとんどの鳥はこの瞬膜でまばたきをします。

鳥は普通嘴の基部に鼻孔がありますが、嗅覚はあまり発達していません。ハゲ

タカも臭いではなく、視力で腐肉を見つけて集まってきます。しかし、ニュージーランドに生息するキーウイのように、嗅覚で餌を見つけるものもいます。

鳥の耳は普通羽毛に隠されていて見えませんが、人間の耳とほぼ同じ位置にあります。フクロウでは大きな外耳孔が左右で異なる位置にあり、音源を左右、上下にとっても正確に探ることができ、暗闇でネズミなどを捕えることができます。人間の可聴域は20～1万7千ヘルツですが、鳥の場合は可聴域がこれよりもやや狭いといわれます。

鳥の舌には人間と同じく味を感じる味蕾（みらい）がありますが、その数は少なく、味覚はあまり発達していません。一般的に昆虫食の鳥の方が種子食の鳥よりも味覚は勝っていますが、昆虫には有毒のものや嫌な味のものが多いためと考えられています。

3. 鳥の用語

野鳥図鑑などでよく使われる用語を覚えておくと、探鳥会などに参加した時に便利です。その幾つかを紹介します。

◎♂：雄

◎♀：雌

◎L：全長。鳥を上向きにねかせて嘴を水平にしたときの、嘴の先から尾の先までの長さ。

◎W：翼開長（よくかいちょう）。翼の前縁がまっすぐになるまで両翼を広げた時の翼の先から先までの長さ。

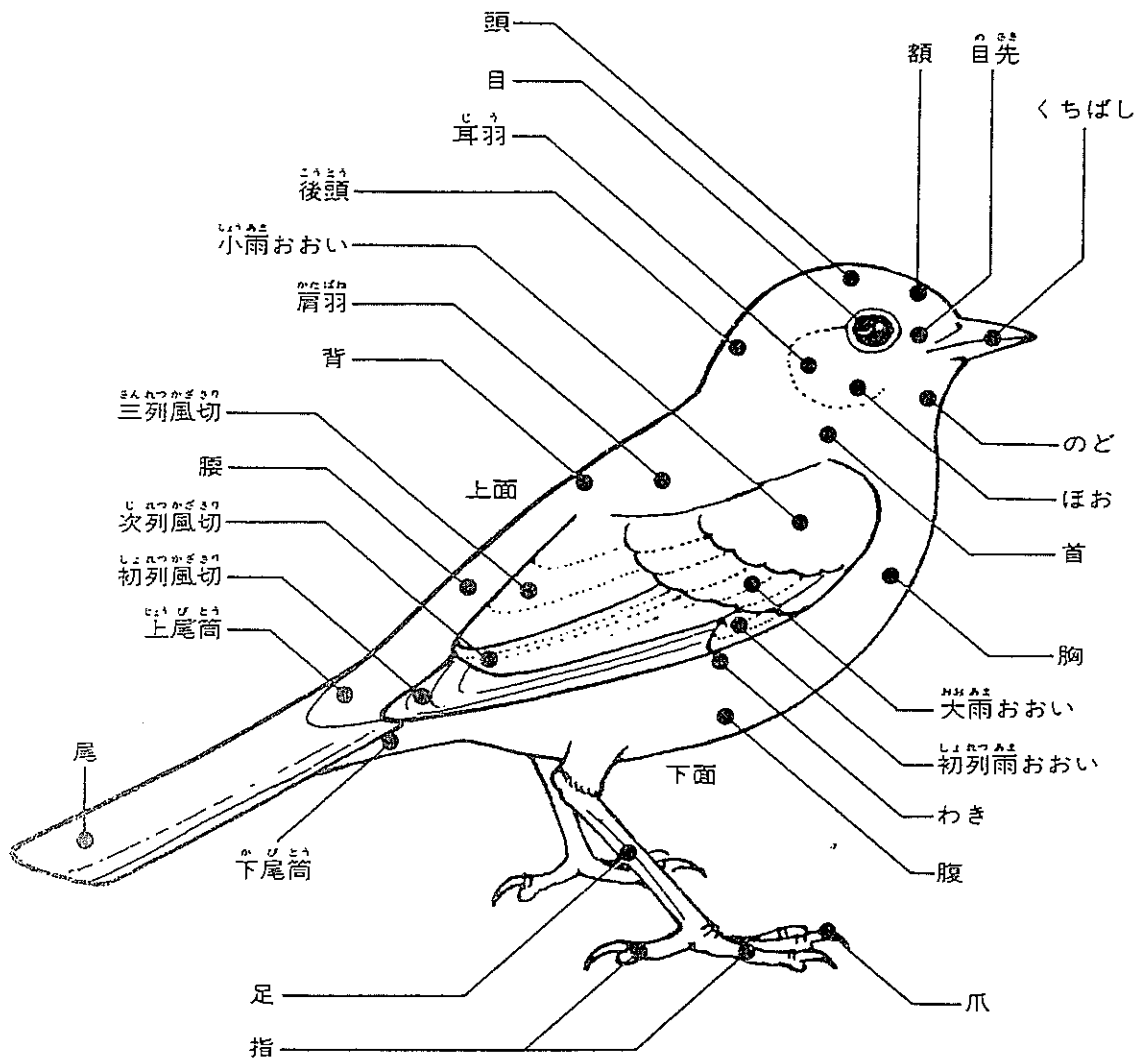


図-7 鳥の各部の名称
 資料：日本鳥類保護連盟（1988）

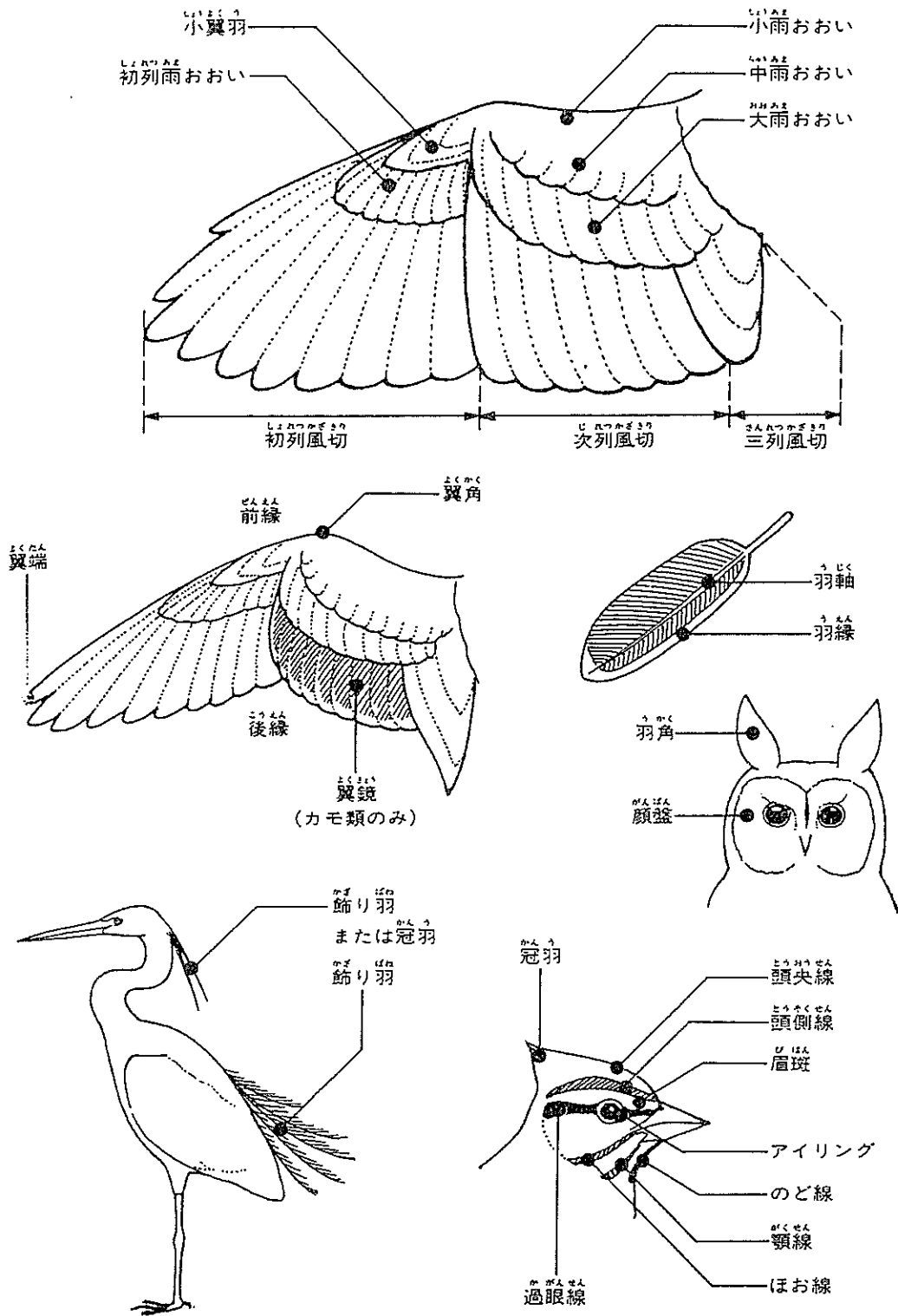


図-8 鳥の各部の名称
 資料：日本鳥類保護連盟（1988）

- ◎成鳥（せいちょう）：それ以上、成長による羽色の大きな変化が起こらない年令に達した鳥。小鳥では普通生まれた次の年の春に成鳥羽になるが、ワシやツルでは数年以上かかる。
- ◎若鳥（わかどり）：第1回の換羽後、成鳥羽になるまでの時期の鳥。はっきりとした若鳥の羽色を持たない鳥もいる。
- ◎幼鳥（ようちょう）：ふ化後、体羽が生えそろった時から第1回の換羽（普通は生まれた年の秋）までの時期の鳥。
- ◎ヒナ：卵からかえって体羽がはえそろうまでの時期の鳥。小鳥の場合は、巣立ってからは幼鳥であるが、「巣立ちヒナ」という場合もある。
- ◎早成性（そうせいせい）：かえった時に綿羽に覆われていて、目は開き、間もなく歩くことのできるヒナをいう。ツルやチドリなど。
- ◎晩成性（ばんせいせい）：かえった時には裸かわずかに幼綿羽が生えているだけで、目も開かず腰も立たないで歩くこともできないヒナ。多くの小鳥やワシタカなど。2週間以上も巣の中で親鳥の保育を受けてから巣立つ。
- ◎換羽（かんう）：羽毛がぬけ変わる事。どの鳥でも秋には羽毛をほとんど換羽するが、春にも換羽する種も多い。この場合、体の一部だけを換羽することがある。なお体の色の変化は換羽によることが多いが、羽毛の縁の磨耗による場合もある。
- ◎上面・下面：だいたい目と翼を結ぶ線を境にして、体の上側と下側をいう。「頭部と体の上面」という場合には背、肩羽、翼、腰を指す。
- ◎夏羽（なつばね）：生殖羽と同じ。繁殖に関係のある羽色をいう。夏羽になるのは必ずしも夏期ではなく、サギ類、ウミスズメ類、カモ類などでは1月～2月に夏羽になっている場合がある。
- ◎冬羽（ふゆばね）：非生殖羽と同じで繁殖に関係のない羽色。夏羽と冬羽の違いがない種も多い。
- ◎エクリプス羽：カモの雄は、繁殖が終ってつがい形成の時までの8月～11月に雌と同じような地味な色になる。これをエクリプス羽という。体の色では雌とまったく区別がつかない場合もあるが、嘴の色や翼のパターンは生殖羽と同じで雌と違う。
- ◎翼鏡（よくぎょう）：カモ類の次列風切は多くの種で緑や青の金属光沢があ

り、翼鏡という。

◎冠羽（かんう）：頭部にある長い羽毛。

◎ろう膜：上嘴の基部を覆っている柔らかくてふくらんだ部分。ワシタカ類、ハト類などにある。

◎額板（がくばん）：オオバンやバンにある上嘴の基部から額に続いている羽毛のない固い部分。

◎托卵（たくらん）：自分で巣を作らないで、ほかの鳥の巣に卵を産み、ヒナを育てさせること。カッコウが有名。

◎留鳥（りゅうちょう）：ある地域で一年中見られる鳥。

◎漂鳥（ひょうちょう）：日本国内を季節によって移動する鳥。

◎夏鳥（なつどり）：春に南の地域から渡って来て繁殖し、秋には南の地域に渡去する鳥。

◎冬鳥（ふゆどり）：春から夏にかけて北の地域で繁殖し、秋に渡来して越冬し、春には北へ帰る鳥。

◎旅鳥（りょうちょう）：日本より北で繁殖し、日本より南で越冬する鳥。日本には春と秋に北上と南下の途中で立ち寄る。

◎迷鳥（めいちょう）：本来の渡りのコースや分布からはずれて渡来した鳥。

◎囀（さえず）り：繁殖期に主に小鳥類の雄が発する特徴あるよい声で、縄張り宣言と雌を誘う機能がある。

◎地鳴（じな）き：囀り以外の声をいう。

◎ぐぜり：囀りに似た小さな声。冬の暖かい日などにぐぜり声で鳴くことがある。

◎帆翔（はんしょう）：気流を利用してはばたかないで飛ぶこと。

◎誇示飛翔（こじひしょう）：縄張り宣言や求愛のために行なう特殊な飛翔。

II. 標茶町で見られる天然記念物の鳥

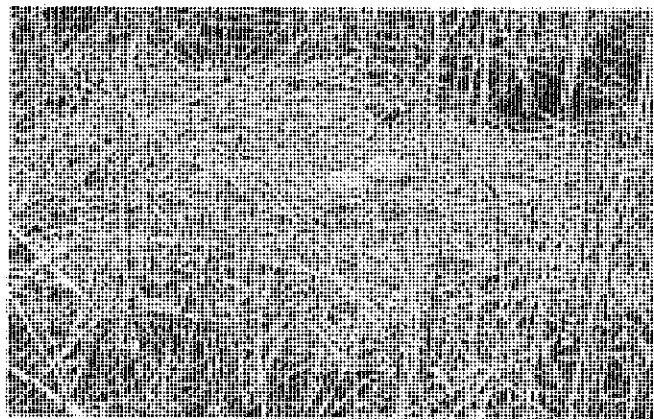
標茶町ではタンチョウを初めとしてヒシクイ、オジロワシ、オオワシ、シマフクロウ、クマゲラなど、釧路地方に生息する国指定の天然記念物の鳥のほとんどのものを見ることができます。

1. タンチョウ（特別天然記念物）

タンチョウは昭和10（1935）年に天然記念物に、昭和27年に特別天然記念物に指定されました。日本ではタンチョウのほかになべヅル、マナヅル、カナダヅル、アネハヅル、ソデグロヅル、クロヅルと7種のツルの生息が確認されていますが、繁殖するのはタンチョウだけです。タンチョウは雄では羽を広げると2.4m、体重15kgにもなる日本最大の鳥です。4才で成鳥になります。頭の赤い部分には羽はなく、皮膚をとおして血液の色が見えています。寒い時には縮まり色も黒ずんでいますが、求愛のダンスをしている時などには大きく引き伸ばされ色も鮮やかな赤色となっています。



タンチョウ



タンチョウの巣

アイヌの人たちは、タンチョウをサルルン・カムイ（ヨシ原の神様）と呼びました。江戸時代までは北海道の各地で繁殖し、冬には江戸の近辺でも見ることができました。江戸時代には北海道の南部で300羽ものタンチョウが鉄砲でとられ、その肉が塩づけにされ本州に送られたこともあります。しかし、明治末には北海道開拓の急速な進行や乱獲によってタンチョウは絶滅したといわれ

ていました。ところが、大正13（1924）年に釧路湿原の一角のキラコタン岬付近に十数羽生き残っているが発見され、手厚い保護が始まり、今日にいたっています。

昭和27年から毎年12月5日前後にタンチョウ生息調査が釧路、根室、十勝、網走管内で行なわれています。昭和27年には33羽であったものが33年には125羽に、47年には222羽にと順調に増え、平成6年1月の調査では628羽（幼鳥62を含む）と約20倍にもなっています。北海道のタンチョウ保護の成果は、世界でも類をみないほどに素晴らしいものです。昭和27年から行なわれてきた冬場の給餌が保護の重要な役割を果たしてきたのですが、そこにはタンチョウを愛する人々の献身的な努力がありました。国外では中国東北部に約千羽、ロシア東部シベリアに約200羽が生息します。

北海道のタンチョウは、留鳥です。夏場は十勝、釧路、根室の湿地で子育てをし、冬場には主に釧路管内にある給餌場へと短距離の移動をし越冬します。釧路湿原周辺には、20箇所をこす給餌場があります。鶴居村や阿寒町には、1ヶ所で200羽ものタンチョウが集まる給餌場があります。特定の給餌場に集中してタンチョウが集まるのは、近くに埜（ぬぐら）となる凍らない川があるためです。釧路の冬は氷点下20度以下になるため、タンチョウは寒さを防ぐためと、また外敵から身を守るために、凍らない川に入って眠ります。このため、タンチョウ保護には埜の安全確保が大切で、人の立ち入りを禁止しています。

平成6年の夏の調査では、道東で164箇所の営巣地が見つかっています。十勝で19箇所、釧路で84箇所（釧路湿原：47、別寒辺牛川：25、霧多布湿原：12）、根室で61箇所（根室半島：7、風蓮湖：44、野付半島：10）となっています。そして標茶町内にはシラルトロ湖畔や塘路湖畔などに22箇所もの営巣地があり、釧路湿原国立公園の約48%（11,993ha）を標茶町が占めているという自然環境の質の高さを裏付けています。

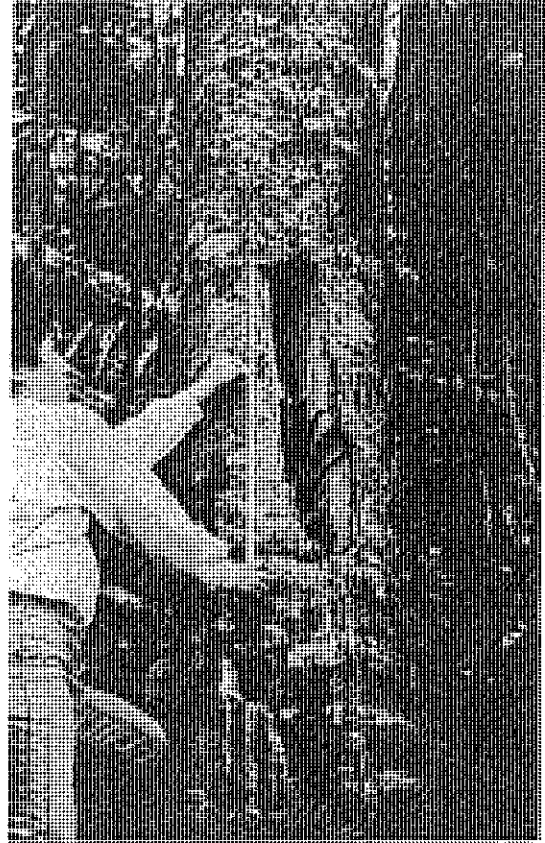
タンチョウは、3月下旬には繁殖を始めます。ヨシを積み上げ直径2～3メートルもの大きな巣をつくり、2個の卵を産みます。雄雌が4～5時間交替で32日間卵を温めるとヒナが誕生します。ヒナはふ化して数日もすると、親鳥と一緒に巣を離れて生活します。成長は早く、約100日で飛べるようになります。しかし、2羽のヒナが無事成長することは少ないようです。その原因の一つに

4. クマゲラ（天然記念物）

クマゲラは全長約46cmと日本最大のキツツキで、昭和40年に天然記念物になっています。留鳥として全道に分布しますが、大雪山系や日高山系、阿寒湖畔などの森林地帯が広がる道東域は格好の生息地です。近年、秋田県、青森県でも生息が確認されていますが、数はきわめて少ないようです。

原生林のような大木の多い森に生息し、1つがいのクマゲラが繁殖するには200haもの広い面積を必要とします。4～5月にトドマツやシナなどの巨木の、地上10mほどの幹に、雌雄で1ヶ月ほどかけて巣穴を掘り、4～6卵を産み、雌雄交代で12～14日間温め、ふ化したヒナは25～28日間で巣立ちします。

アイヌの人たちがチプタ・チカプ・カムイ（舟を彫る神様）と呼んだように、クマゲラは、採餌のため木の幹に時には人の顔がすっぽり入るほどの大きな穴をあけ、中に巣くうアリやカミキリムシなどを食べます。標茶町多和にある京都大学北海道演習林での調査では、クマゲラの糞からムネアカオオアリの頭や足がよく見つかっています。



クマゲラの食痕

5. シマフクロウ

シマフクロウは全長71cm、羽を広げると1.9m、体重4kgに達する世界最大のフクロウです。昭和46年に天然記念物になっています。北海道、南千島（国後、択捉、色丹）、サハリン、沿海地方、中国北東部、朝鮮半島、オホーツク沿岸に留鳥として生息します。



シマフクロウ

北海道では日高や大雪の一部と十勝、釧路、根室の道東域に生息し、その数はわずかに100羽ほどです。まさに、絶滅の危機に瀕しています。明治時代までは北海道南西部にも生息するなど北海道に広く分布し、人里近くでも繁殖するけして珍しい鳥ではなかったようです。アイヌの人たちは、この鳥をコタンクルカムイ（村を支配する神）と呼んでいました。

川沿いなどに広い縄張りをもって、一年中つがいで生活します。餌はおもに魚です。繁殖期は3月上旬に始まります。大きな樹洞に巣材を使わずに1～3卵を産み、雌が約1月間抱卵します。幼鳥が完全に一人立ちするのは翌年の5～6月と、1年以上も親鳥の保

護下で生活します。

河川沿いの森林が伐採され、またサケ、マスなどが河口で捕獲されるなど生息環境の急激な悪化により、北海道のシマフクロウは昭和40年代に激減しました。釧路湿原でも昭和47年以降、シマフクロウの生息が確認されていません。幸いなことに、標茶町虹別にはシマフクロウの生息地があり、毎年のようにヒナが誕生しています。

シマフクロウはまさに絶滅の恐れがあることから、環境庁は1984年より巣箱の設置と給餌による保護対策を進めています。1992年までに掛けられて巣箱は83個にのぼり、平成5年の春までに30箇所の巣箱で47羽のヒナが巣立ちするなど保護の成果があがっています。ただ、せっかく巣立ったヒナのその後の消息がほとんど不明となっているなど、生息に適した場所の不足が大きな問題となっています。シマフクロウが人手を借りなくても安住できるためには、自然環境の保全とさらには復元が必要なのです。

6. ヒシクイ (天然記念物)

ヒシクイは全長83cm、羽を広げると1.6mと大型の雁で、昭和46年に天然記念物になっています。ヒシの実を好んで食べます。カムチャツカで繁殖したものが日本へ冬鳥として渡ってきて、新潟県の福島潟やラムサール条約の指定地である宮城県の大沼ではそれぞれ数千羽が越冬します。

釧路湿原では3～4月と9～10月の移動時期に立ち寄るものが多く、越冬するものは稀です。標茶町のシラルトロ湖は道東でも重要な渡来地で、毎年数100羽の大きな群が飛来します。



ヒシクイ

Ⅲ. 野鳥と生息環境

標茶町に生息する沢山の野鳥は、森の鳥、草原の鳥、水辺の鳥の3つに大きくグループに分けられます。

1. 水辺の鳥

釧路川や塘路湖、シラルトロ湖などでは、四季折々に色々な水鳥を見ることができます。

表-1 塘路湖、シラルトロ湖の水鳥調査結果

No.	種名	塘路湖						シラルトロ湖					
		1989年			1991年			1989年			1991年		
		3/30	11/23	12/5	11/6	11/19	12/5	3/30	11/23	12/5	11/6	11/19	12/5
1	アオサギ	22	6	1	4	16	2	12			3	2	
2	ヒシクイ	33						34	2	23	103	61	212
3	オオハクチュウ	328	127	33	42	86	99	276	168	239	161	166	240
4	マガモ					2	17			300	12		
5	ヨシガモ												
6	ヒドリガモ	1						5		5	13	9	
7	オナガガモ							16					
8	ホシハジロ												
9	キンクロハジロ		2		9	5		172	4		4		
10	ホオジロガモ		2					3					
11	ミコアイサ	7	1		2	6			6		5		
12	カワアイサ	8	121	328	25	24	520	10	167	199	23	41	40
13	オジロワシ	5						4	1	1			
14	オオワシ	2						8					
15	チュウヒ	1											
16	タンチョウ			6					2	2			
17	オオバン		1										
18	ユリカモメ			30									
種類数計		9	7	5	5	6	4	10	7	7	8	5	3
個体数計		407	260	398	82	139	638	540	350	769	324	279	492

資料；橋本正雄 (1993)

表-2 釧路川（二本松橋右岸、距離2km）の鳥類調査結果（1992～1993年）

No.	科 目	種 名	春	夏	秋	冬
1	サギ	アオサギ	1.0	1.0		
2	ガンカモ	ヒシクイ			20.0	
3		マガモ			10.0	
4		コガモ	2.0		17.0	
5		オカヨシガモ			20.0	
6		カワアイサ				3.0
7	ワシタカ	トビ	1.0	1.0		
8	シギ	オオジシギ	1.0			
9	ハト	キジバト	1.0	3.0	1.0	
10	ホトトギス	カッコウ		2.0		
11	カワセミ	ヤマセミ		1.0		
12		カワセミ		1.0	2.0	
13	キツツキ	ヤマゲラ			1.0	
14		アカゲラ	2.0		1.0	1.0
15		コゲラ	1.0		1.0	
16	ヒタキ	ノゴマ		1.0		
17		アカハラ		1.0		
18		ウグイス	2.0	3.0		
19		エゾセンニュウ		8.0		
20		シマセンニュウ		1.0		
21		コヨシキリ		12.0	3.0	
22		エゾムシクイ	4.0			
23		センダイムシクイ	9.0	22.0		
24	シジュウカラ	ハシブトガラス	3.0	4.0	2.0	2.0
25		シジュウカラ	2.0		5.0	1.0
26	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ			1.0	1.0
27	ホオジロ	アオジ	6.0	6.0	17.0	
28	アトリ	カワラヒワ			2.0	
29		ベニマシコ	6.0	3.0	15.0	
30		ウソ				1.0
31	カラス	ハシボソガラス			1.0	
32		ハシブトガラス		4.0	5.0	2.0
個 体 数 計			41.0	74.0	124.0	11.0
種 類 数 計			14	17	18	7

資料：北海道開発庁（1994）

表-3 釧路川（五十石橋左岸、距離2km）の鳥類調査結果（1992～1993年）

No.	科 目	種 名	春	夏	秋	冬
1	サギ	アオサギ	1.0			
2	ガンカモ	マガモ		1.0		8.0
3		カワアイサ		1.0		
4	ワシタカ	トビ	1.0	1.0	2.0	
5	シギ	イソシギ	2.0			
6		オオジシギ	4.0			
7	カモメ	オオセグロカモメ	1.0			
8	ハト	キジバト		1.0		
9		ドバト	4.0			
10	ホトトギス	カッコウ		1.0		
11		ツツドリ		1.0		
12	カワセミ	ヤマセミ	1.0			
13		カワセミ	3.0	1.0		
14	キツツキ	ケラSp	1.0			
15	ヒバリ	ヒバリ	2.0	1.0		
16	ツバメ	ショウドウツバメ	2.0	52.0		
17		イワツバメ	10.0			
18	モズ	モズ	1.0	2.0		
19	ヒタキ	ノゴマ		1.0		
20		ノビタキ	1.0	1.0		
21		ウグイス	1.0	2.0		
22		エゾセンニュウ		6.0		
23		シマセンニュウ		2.0		
24		コヨシキリ		10.0	2.0	
25		センダイムシクイ	14.0	17.0	1.0	
26	エナガ	エナガ				1.0
27	シジュウカラ	ハシブトガラ			4.0	5.0
28		ヒガラ			4.0	
29		シジュウカラ			4.0	2.0
30	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ			4.0	
31	ホオジロ	アオジ	22.0	12.0	8.0	
32		オオジュリン		1.0		
33	アトリ	カワラヒワ	10.0	1.0	4.0	
34		ベニマシコ	2.0	2.0		
35	ハタオリドリ	スズメ	2.0	1.0		
36	ムクドリ	コムクドリ		1.0		
37	カラス	ハシボソガラス				2.0
38		ハシブトガラス	2.0			12.0
個 体 数 計			87.0	120.0	33.0	30.0
種 類 数 計			21	24	9	6

資料：北海道開発庁（1994）

◎アカエリカイツブリ（夏鳥、全長47cm）

北海道の湖沼で繁殖し、本州以南では冬鳥です。釧路湿原には4月下旬に渡ってきます。シラルトロ湖や塘路のサルルン沼で繁殖します。広い縄張りを持つので、1の湖沼にせいぜい2～3つがいしか繁殖しません。水草を積み重ねて浮き巣をつくり、3～6卵を産み、雌雄で21日ほど温めます。ふ化すると間もなくヒナは巣を離れ、よく親鳥の背に乗り休みます。潜水が巧みで、魚や水生昆虫を捕ります。

◎アオサギ（夏鳥、全長93cm）

羽を広げると1.6mにもなる日本最大のサギです。釧路地方には3月下旬に渡ってきて、11月頃まで留まります。梢に直径60cmほどの巣を造り、4月中旬に3～5卵を産み、雌雄で約4週間温めます。釧路市湿原展望台から湿原へ約3km入った所には、アオサギの日本最大ともいえる営巣地があります。100m四方ほどのハンノキ林に300以上の巣が造られています。しか



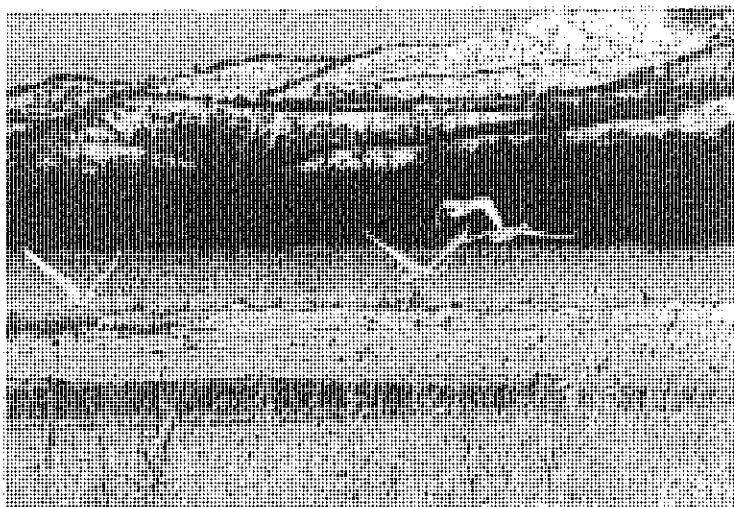
アオサギのコロニー

し、このコロニーで1990年ころから営巣木であるハンノキが寿命で枯れて倒れ始めました。そのために、一部のアオサギは別の場所に新たにコロニーを作るようになり、1993年の繁殖期には釧路市動物園内のカラマツ林に巣数約100個の、そして塘路湖畔の標茶町郷土館裏手のカラマツ林に巣数約60個のコロニーが誕生しました。

◎オオハクチョウ（冬鳥、全長141cm）

羽を広げると225cm、体重15kgに達します。サハリン、シベリア、カムチャツカなどで繁殖します。釧路地方へは早いもので10月上旬に渡来します。11月

の渡来最盛期には、塘路湖やシラルトロ湖では数百羽が羽を休めます。オオハクチョウは親子連れで渡って来て、春にはまた家族で一緒に北帰行します。



オオハクチョウ

◎マガモ (留鳥、全長59cm)

お馴染みのカモですが、アヒルはこのマガモを飼い慣らしたものです。水辺の草むらで地上に巣を造り、8～10卵を産み、雌が約28日間温めます。6月中旬ころになると、沢山のヒナを連れた母鳥を見かけるようになります。なお、皇居のお堀で有名なカルガモは釧路地方ではごく少ないのですが、塘路湖では繁殖しています。



マガモのヒナ

◎カワセミ (夏鳥、全長17cm)

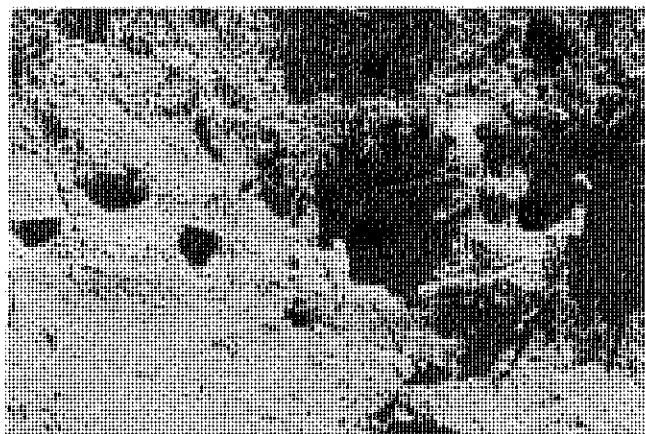
水辺の人気者といえはこの鳥で、青緑色の輝く色合から飛ぶ宝石といわれます。夏鳥ですが、シラルトロ湖畔の温泉が湧き出る不凍の川では越冬することもあります。水辺のがけなどに深さ50～100cmの巣穴をほり、その奥に柔らかい土と魚の骨を敷き、4～7卵を産み雌雄で20日ほど温めます。塘路のアイヌの人たちは、この鳥をチェプ・アッテ・カムイ (魚を支配する神) と呼んでいました。

◎ヤマセミ（留鳥、全長38cm）

鹿子模様が美しい大型のカワセミで、「かのこしょうびん」とも呼ばれます。幕末の北方探検家松浦武四郎は、釧路川を下る途中でこの鳥を見つけて射落としています。川沿いに4 kmにも及ぶことがある長い縄張りをもち、1つの溪流や湖沼に1つがいくらかしか生息しません。川沿いの土手に深さ1 mほどの巣穴を掘り、奥に細かな土を敷き、4～7卵を産み、主に雌が40日ほど抱きます。

◎その他の水鳥

潜水の巧みなカイツブリや白い額が目立つオオバンが夏鳥として湖沼で繁殖しますが、数は多くありません。溪流で釣りなどをしていて、ビツ、ビツと鋭く鳴きながら川面を黒い小鳥が飛んでいったら、それは留鳥のカワガラスです。ショウドウツバメは川辺の崖などに巣穴をほり集団で繁殖しますが、よく川や湖の水面近くを飛び回り虫を捕っています。セキレイは釧路地方ではいずれも夏鳥ですが、川の上流部ではキセキレイが、中下流部ではハクセキレイが生息します。また釧路地方では稀な鳥であるセグロセキレイも、釧路川の中流部で繁殖します。



ショウドウツバメ



ミコアイサ

カモ類では、キンクロハジロ、ホシハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、ヨシガモ、ヒドリガモ、コガモなどが冬鳥として多数渡ってきて、最盛期には塘路

湖やシラルトロ湖に数千羽が羽を休めます。

2. 草原の鳥

標茶町には釧路湿原の広大なヨシ原、広々とした牧草地と、いろいろなタイプの草原があります。そういった草原では、主に春から秋まで多く野鳥が生活します。

◎オオジシギ（夏鳥、全長30cm）

シギの仲間で、ずんぐりとした体に8cmほどの長い嘴を持っています。釧路地方へは4月下旬に渡ってきて、10月には遠くオーストラリアへと去ります。繁殖期には、ジープ、ジープと鳴きながら空高く舞い上がると素晴らしいスピードで急降下し、その時に扇形に開いた尾羽を震わせてガガガと激しい羽音を出すので、俗に雷シギと呼ばれます。地上に営巣し、普通4卵を産みます。

◎ヒバリ（夏鳥、全長17cm）

牧草地などでよく見かけると鳥といえばヒバリです。釧路地方へは3月下旬に渡ってきますが、本格的にさえずりだすのは4月中旬です。九州のような暖地では留鳥ですので、早々と1月頃からさえずりだします。ヒバリが初鳴きする時期の気温は、九州では6～9度、北海道では2～3度です。地上に営巣し、3～5卵を産み、雌が11～12日間温めます。ヒバリの語源の一つの「ヒハル（日晴）」は、日が晴れたときのみ高く上がり鳴くからとしています。

◎コヨシキリ（夏鳥、全長
13.5cm）

ヨシ原に多いのがこのコヨシキリで、釧路湿原では最も生息数の多い鳥です。日本では本州中部以北の草原や湿地で繁殖します。釧路地方へは5月下旬に渡ってきて、10月頃に東南アジアへと去ります。褐色の小さな鳥ですが、甲高い声で日中だけでなく夜間もしきりにさえずります。それこそ、この鳥が渡ってくると草原は一気に賑やかになります。巢は、ヨシの茎などを2～3本にまとめて支柱としてそこに掛けます。4～5卵を産み、雌が2週間ほど温めます。



コヨシキリ

◎シマセンニュウ（夏鳥、全長15.5cm）

湿原でよく見られ、釧路湿原ではコヨシキリについて数の多い鳥といえます。日本では北海道の草原で繁殖します。釧路地方へは5月下旬に渡ってきてます。鳴きながら飛び上がって、低い弧を描いて草むらに潜り込む鳥がいたら、たぶんシマセンニュウです。草の根本に巣をつくり、4卵ほど産み、雌が約13日間温めます。

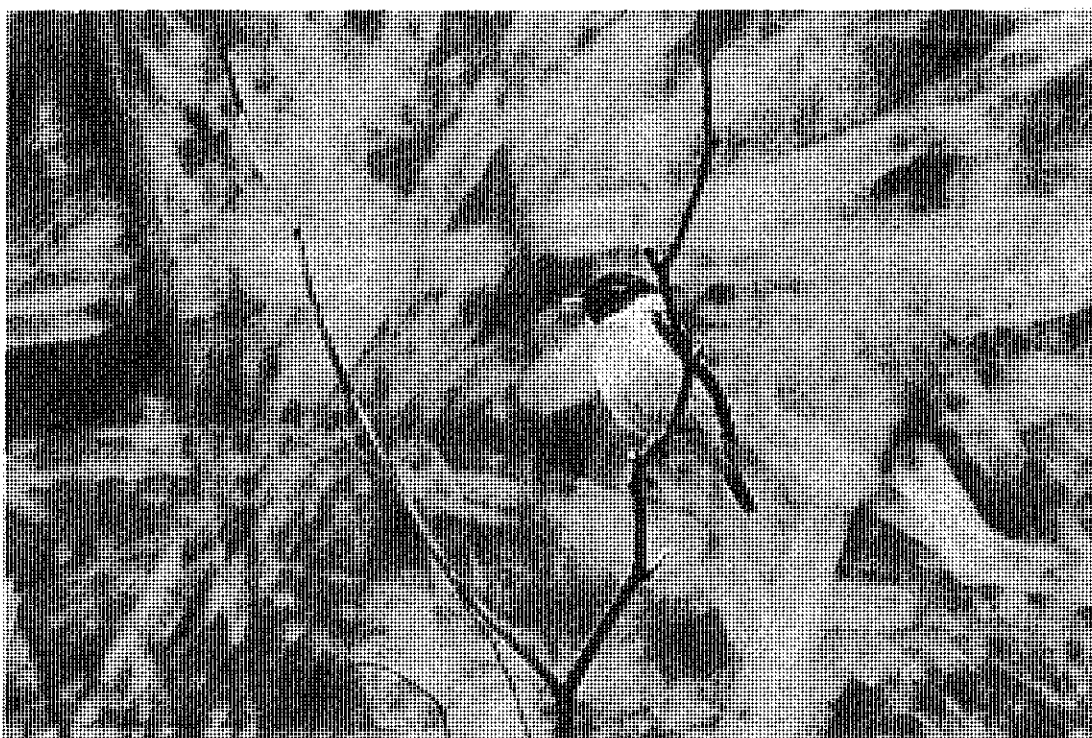
◎マキノセンニュウ（夏鳥、全長12cm）

日本では、北海道の草原で繁殖します。釧路地方には5月下旬に渡ってきて、10月頃に東南アジアへと去ります。草の根本に巣をつくり、3～5卵を産み、

雌が温めます。釧路湿原ではコヨシキリ、シマセンニュウについて生息数の多い鳥で、チリリリリと虫の音のような声でさえずります。

◎ノビタキ（夏鳥、全長13cm）

本州では高原に、北海道では平地から山地の草原までと普通に生息します。釧路地方へは4月下旬に渡ってきて、10月には東南アジアへと去ります。雄はオリーブ色の美しい胸を持ち、澄んだ声でヒーヒョーヒョーロリーとさえずります。地上に営巣し、5～7卵を産みます。



ノビタキ

◎ノゴマ（夏鳥、全長15.5cm）

ノゴマとは「野の駒（こま）鳥」の意味で、よくとおる高い声で元気よくさえずります。雄の喉の部分が深紅色をしていることから、俗に「日の丸」とも呼ばれます。日本では北海道の草原で繁殖します。釧路地方には5月下旬に渡ってきて、10月頃には東南アジアへと去ります。地上に営巣し、3～5卵を産みます。

◎シマアオジ (夏鳥、全長13.5cm)

シマアオジは、北海道の草原で繁殖します。背の栗色と胸の黄色の取り合せが美しく、またさえずりは「ヒーヒーヒーチュリリ」と微風のように澄んでいて、バードウォッチャーがあこがれる鳥の一つです。釧路地方へは4月下旬に渡ってきて、10月頃に東南アジアへと去ります。地上に営巣し、4～5卵を産み、雌雄で温めます。



シマアオジ

◎その他草原の鳥

オオジュリンはスズメの頭を黒くした感じの夏鳥で、よくヨシ原で繁殖します。ベニマシコは全身紅色の可愛らしい夏鳥で、灌木の混じった草原を好みます。ベニヒワやハギマシコやオオマシコなどの冬鳥が、雪原に枯れ残ったヨモギなどの実を食べているのを見かけることがあります。

3. 森の鳥

多和の京都大学演習林や西別岳の山麓などに代表される標茶町の豊かな森には、タカやキツッキやカラの仲間など多くの野鳥が生息しています。

そこで、ここでは京都大学演習林での野鳥の生息状況を紹介します。

京都大学演習林は1,443haの広さをもち、ミズナラ、ハルニレ、センノキなどが茂る貴重な天然林が広がっていて、沢山の野鳥が生息します。演習林が行った調査では、演習林および隣接地で32科111種の野鳥が観察されていて、繁殖する鳥もクマゲラ、エゾライチョウなど25種を数えています(表-5)。

広葉樹の多い鬱蒼とした林には、クマタカ、オオタカ、ハイタカ、アオバト、コノハズク、フクロウ、ハリオアマツバメ、クマゲラ、キビタキ、イルカなど深い森を好む鳥が生息していて、釧路地方を代表する森林性鳥類の生息地とな

表-4 標茶町の気象の変化及び植物、野鳥の季節変化

	気象の変化	植物の生態	野鳥の生態変化
3月	流水、ブリザード		オオハクチョウ、ヒシクイ、イスカ ハクセキレイ
4月	根雪が消える 凍土の融解はじまる	フクジュソウ、ヒメイチゲの花 フキノトウ、ニワトコノ芽ぶき カラマツ、ヤナギ、ハシドイの芽ぶき エゾヤマザクラの花	ベニヒワ、ヒバリS ウグイスの初鳴き、アオジS、オオジシギのフライトデイスフレイ ヤマギシ、カワセミ、イソシギ、センダイムシクイS、オオハクチョウの渡去 ヤマシギ抱卵
5月	春の異常乾燥期	ミズナラ、ヤチダモの芽ぶき、セイヨウタンポポの花 スズラン、クロユリの花	カッコウS、キビタキS、コノハズクS、ハリオアマツバメ エゾセンニュウS、アオバト、ムクドリの子雛 キビタキの子雛 クマガイの巣立ち
6月	エゾハルゼミ鳴く		
7月	コエゾゼミ鳴く	ハシドイ、ホガキシモツケの花 エゾリンドウ、エゾヤマハギの花	コムクドリの子雛、オオタカの子雛立ち ピンズイの子雛、シマアオジの子雛、ノビタキの子雛、ハイタカの子雛立ち カワセミの子雛
8月			
9月		オニグルミの黄葉	アオジの幼鳥 キアソウシギなどの渡り、キジバト、ハクセキレイの渡去 アオバト、ハリオアマツバメの渡去、から類の混群 オオハクチョウの渡来 ツグミ、ヒシクイの渡来 タンチョウ
10月	初氷 雄阿寒岳など初冠雪 冬日	ミズナラ、イタヤカエデの黄葉、ヤチダモの落葉 カラマツの黄葉	
11月	初雪、土曜凍結		イスカ、ベニヒワの渡来
12月	塘路湖などが全面結氷 真冬日		キンクロハジロ、ホオジロガモ カワアイサ、ヤマセミ
1月	ダイヤモンドダスト 凍土層40~50cm	樹木の凍裂現象	
2月			

※Sはさえずり
資料：二村一男 (1988)

表-5 京大北海道演習林（標茶町）の鳥類相の季節変化

資料：二村一男（1988）

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
カイツブリ	カイツブリ					○								多和池
サギ	アオサギ													釧路川
ガンカモ	ヒシクイ			—	—									通過
	オオハクチョウ													多和川、釧路川
	オシドリ				○	○								〃
	マガモ			—	—									〃
	カルガモ				—	—								〃●
	コガモ				—	—								〃
	キンクロハジロ		○											釧路川
ホオジロガモ			—	—									〃	
カワアイサ			—	—										多和川、8林班
ワシタカ	トビ													●
	オオタカ	○												●
	ツミ					○								●
	ハイタカ	○												●
	ノスリ				○	○								
クマタカ														
ハヤブサ	ハヤブサ						○			○				
	チゴハヤブサ						○	○		○				
	チョウゲンボウ		○				○							
ライチョウ	エゾライチョウ													●
キジ	キジ							○						
ツル	タンチョウ					○								
キツツキ	アリスイ					—								●
	ヤマゲラ													●
	クマガラ		○											●
	アカゲラ													●
	オオアカゲラ													●
	コアカゲラ													
コゲラ														
ヒバリ	ヒバリ													
ツバメ	シヨウドウツバメ													
	ツバメ													
セキレイ	キセキレイ								○	○				
	ハクセキレイ													●
	セグロセキレイ													●
	ビンズイ													●
	タヒバリ	○			○	○								
ヒヨドリ	ヒヨドリ													
モズ	モズ													●
レンジャク	キレンジャク		○											標茶市街
ミソサザイ	ミソサザイ													
ヒタキ	ノゴマ													
	コルリ													
	ノビタキ													●
トラツグミ										○				
チドリ	コチドリ													●釧路川

※キジはコウライキジ

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
チドリ	イカルチドリ													● 釧路川
シギ	ハマシギ					○								〃
	ツルシギ					○								〃
	タカブシギ					○								〃
	キアツシギ									○				〃
	イソシギ													● 〃 多和川
	ヤマシギ													●
カモメ	オオジシギ													●
	ユリカモメ				○							○		通過
	ミツユビカモメ	○												〃
ハト	アジサシ										○			〃
	キジバト													
アオバト	アオバト													
	ホトトギス													
フクロウ	カッコウ													
	ツツドリ													
アマツバメ	コノハズク													
	フクロウ													
アマツバメ	ハリオアマツバメ													●
カワセミ	ハリオアマツバメ													● 多和川, 釧路川
	ヤマセミ													〃
ヒタキ	カワセミ													
	アカハラ											○		
	ツグミ													
	ウグイス													
	エゾセンニュウ													
	シマセンニュウ						○	○						
	マキノセンニュウ													
	コヨシキリ													
	エゾムシクイ													
	キクイタダキ													
	キビタキ													
	オオルリ													
	サメビタキ							○						
	コサメビタキ							○						
エナガ	エナガ													●
シジュウカラ	エナガ													
	ハンブトガラ													
	ヒガラ													
	ヤマガラ						○	○						
シジュウカラ	シジュウカラ													●
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													●
キバシリ	キバシリ													●
ホオジロ	ホオジロ			○	○									
	ホオアカ								○	○				
	シマアオジ													
	アオジ	○												
	クロジ													
オオジュリン														●
アトリ	アトリ													
	カワラヒワ													
	マヒワ													
														●
														●
														窓に衝突死

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
アトドリ	ベニヒワ				—									
	ハギマシコ				—									
	イスカ				—									
	ベニマシコ									○				●
	ウソソ													
ハタオドリ	ニューナイスズメ					—								●
	スズメ													●
ムクドリ	コムクドリ													●
	ムクドリ													●
カラス	カケス													●
	ハンボンガラス													●
	ハシブトガラス													●

凡 例

————— 記録できたもの

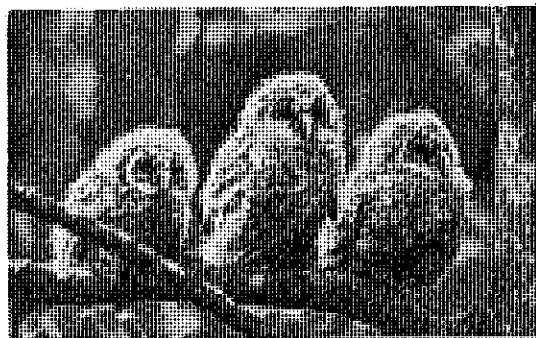
..... 記録できなかったが生息が確実と思われるもの

○出現時期（1回のみ及び観察頻度も低いもの）

●繁殖しているもの

っています。

また演習林に隣接する釧路川で、釧路地方ではなかなか見ることのできないコチドリ、イカルチドリ、セグロセキレイの繁殖が確認されたことは、学術的にも貴重な記録といえます。



フクロウのヒナ



エゾライチョウ

Ⅳ. 標茶町の鳥類リスト

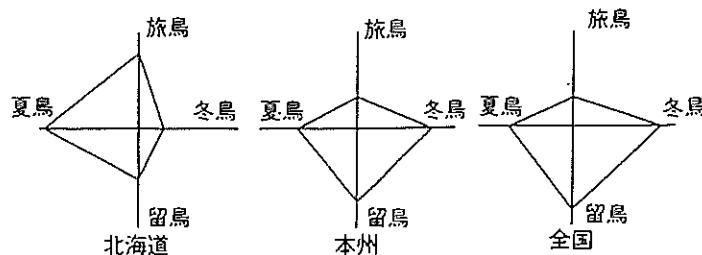
これまで標茶町で観察された鳥の記録を調べてみると、148種（表－6）をリストアップすることができました。町民の皆さんにお聞きするなどさらに詳細に調査すれば、標茶町に生息する鳥の種類はまだまだ増えることとでしょうが、この148種という数でも海鳥が生息しない内陸の町としては決して少ない数ではありません。

この148種を、標茶町で見られる時期や繁殖の状況から分類すると次のようになります。

- S : 釧路地方では夏鳥であり、標茶町で繁殖する鳥。…………… 60種 (40.5%)
- (S) : 釧路地方では夏鳥であるが、標茶町では繁殖しない鳥。…………… 8種 (5.4%)
- R : 釧路地方では留鳥であり、標茶町で繁殖する鳥。…………… 34種 (23.0%)
- (R) : 釧路地方では留鳥であるが、標茶町では繁殖しない鳥。…………… 7種 (4.7%)
- W : 釧路地方では冬鳥である鳥。…………… 26種 (17.6%)
- T : 釧路地方では旅鳥である鳥。…………… 11種 (7.4%)
- A : 釧路地方では迷鳥である鳥。…………… 2種 (1.4%)

標茶町で夏の期間だけ見ることができる鳥は、Sと(S)の合計の68種で約46%となり、標茶町の鳥のほぼ半数をしめています。標茶町に限らず、冬の気候条件が厳しい北海道では夏鳥が留鳥より多く生息し、留鳥の方が多い温暖な本州とは逆になります（図－9）。

北海道、本州、全国の留鳥、夏鳥、旅鳥、冬鳥の割合の比較



資料：(松田、1985)

図－9 北海道、本州、全国の留鳥、夏鳥、旅鳥、冬鳥の割合の比較

表-6 釧路管内及び標茶町管内の鳥類リスト

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
「アビ目」 GAVIIFORMES				
〈アビ科〉 GAVIIDAE				
1 アビ	<i>Gavia stellata</i>	T 少	*	海
2 オオハム	<i>Gavia arctica</i>	T 少	—	海
3 シロエリオオハム	<i>Gavia pacifica</i>	T 少	—	海
4 ハンジロアビ	<i>Gavia adamsii</i>	T 少	—	海
「カイツブリ目」 PODICIPEDIFORMES				
〈カイツブリ科〉 PODICIPITIDAE				
5 カイツブリ	<i>Podiceps ruficollis</i>	S 普通	@	水 辺
6 ハジロカイツブリ	<i>Podiceps nigricollis</i>	T 少	—	水 辺
7 ミミカイツブリ	<i>Podiceps auritus</i>	T 少	—	水 辺
8 アカエリカイツブリ	<i>Podiceps grisegena</i>	S 少	@	水 辺
9 カンムリカイツブリ	<i>Podiceps cristatus</i>	T 少	—	水 辺
「ミズナギドリ目」 PROCELLARIIFORMES				
〈アホウドリ科〉 DIOMEDEIDAE				
10 コアホウドリ	<i>Diomedea immutabilis</i>	(S) 少	—	海
11 クロアシアホウドリ	<i>Diomedea nigripes</i>	(S) 少	—	海
〈ミズナギドリ科〉 PROCELLARIIDAE				
12 フルマカモメ	<i>Fulmarus glacialis</i>	W 少	—	海
13 シロハラミズナギドリ	<i>Pterodroma hypoleuca</i>	(S) 少	—	海
14 オオミズナギドリ	<i>Calonectris leucomelas</i>	(S) 稀	—	海
15 アカアシミズナギドリ	<i>Puffinus carneipes</i>	(S) 稀	—	海
16 ハイイロミズナギドリ	<i>Puffinus griseus</i>	(S) 少	—	海
17 ハンボンミズナギドリ	<i>Puffinus tenuirostris</i>	(S) 普通	—	海
〈ウミツバメ科〉 HYDROBATIDAE				
18 ハイイロウミツバメ	<i>Oceanodroma furcata</i>	W 少	—	海
19 コシジロウミツバメ	<i>Oceanodroma leucorhoa</i>	S 普通	*	海
〈ウ科〉 PHALACROCORACIDAE				
20 ウミウ	<i>Phalacrocorax filamentosus</i>	R 普通	*	海
21 ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i>	(R) 普通	—	海
22 チンマウガラス	<i>Phalacrocorax urile</i>	(R) 少	—	海
〈グンカンドリ科〉 FREGATIDAE				
23 オオグンカンドリ	<i>Fregata minor</i>	A	—	海
24 コグンカンドリ	<i>Fregata ariel</i>	A	—	海
「コウノトリ目」 CICONIFORMES				
〈サギ科〉 ARDEIDAE				
25 サンカノゴイ	<i>Botaurus stellaris</i>	(S) 稀	—	水 辺

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
26 ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i>	S 少	—	水 辺
27 オオヨシゴイ	<i>Ixobrychus eurhythmus</i>	S 少	—	水 辺
28 ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	A	—	水 辺
29 アマサギ	<i>Bubulcus ibis</i>	(S) 稀	—	水 辺
30 ダイサギ	<i>Egretta alba</i>	(S) 稀	—	水 辺
31 チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>	(S) 稀	*	水 辺
32 コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	(S) 稀	—	水 辺
33 カラシラサギ	<i>Egretta eulophotes</i>	A	—	水 辺
34 アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	S 普通	@	水 辺
〈コウノトリ科〉 CICONIDAE				
35 コウノトリ	<i>Ciconia ciconia</i>	A	—	水 辺
「ガンカモ目」 ANSERIFORMES				
〈ガンカン科〉 ANATIDAE				
36 コクガン	<i>Branta bernicla</i>	W 少	—	水 辺
37 マガン	<i>Anser albifrons</i>	W 稀	—	水 辺
38 カリガネ	<i>Anser erythropus</i>	W 稀	*	水 辺
39 ヒシクイ	<i>Anser fabalis</i>	W 普通	*	水 辺
40 サカツラガン	<i>Anser cygnoides</i>	A	—	水 辺
41 コブハクチュウ	<i>Cygnus olor</i>	(S) 稀	*	水 辺
42 オオハクチュウ	<i>Cygnus cygnus</i>	W 普通	*	水 辺
43 コハクチュウ	<i>Cygnus columbianus</i>	W 少	—	水 辺
44 ツクシガモ	<i>Tadorna cristata</i>	A	—	水 辺
45 オシドリ	<i>Axi galericulata</i>	S 少	@	水 辺
46 マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	R 普通	@	水 辺
47 カルガモ	<i>Anas pecilorhyncha</i>	S 少	@	水 辺
48 コガモ	<i>Anas crecca</i>	W 普通	*	水 辺
49 トモエガモ	<i>Anas formosa</i>	W 稀	—	水 辺
50 ヨシガモ	<i>Anas falcata</i>	W 普通	*	水 辺
51 オカヨシガモ	<i>Anas strepera</i>	W 少	*	水 辺
52 ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	W 普通	*	水 辺
53 アメリカヒドリ	<i>Anas americana</i>	A	—	水 辺
54 オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	W 普通	*	水 辺
55 シマアジ	<i>Anas querquedula</i>	T 少	—	水 辺
56 ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i>	W 普通	*	水 辺
57 ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	R 普通	*	水 辺
58 オオホシハジロ	<i>Aythya valisineria</i>	A	—	水 辺
59 キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	W 普通	*	水 辺

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
60スズガモ	<i>Aythya marila</i>	W 普通	*	海、水辺
61コケワタガモ	<i>Polysticta stelleri</i>	W 稀	—	海
62クロガモ	<i>Melanitta nigra</i>	W 普通	—	海
63ビロードキンクロ	<i>Melanitta fusca</i>	W 普通	—	海
64アラナミキンクロ	<i>Melanitta perspicillata</i>	W 稀	—	海
65シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	W 普通	—	海
66コオリガモ	<i>Clangula hyemalis</i>	W 普通	—	海
67ホオジロガモ	<i>Bucephala clangula</i>	W 普通	*	海、水辺
68ヒメハジロ	<i>Bucephala albeola</i>	W 稀	—	海
69ミコアイサ	<i>Mergus albellus</i>	W 普通	*	水 辺
70ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>	W 普通	—	海
71カワアイサ	<i>Mergus merganser</i>	R 普通	*	水 辺
「ワシタカ目」 FALCONIFORMES				
〈ワシタカ科〉 ACCIPITRIDAE				
72ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	S 少	@	水 辺
73トビ	<i>Milvus migrans</i>	R 普通	@	山 野
74オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	R 少	@	水 辺
75オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	W 少	*	水 辺
76オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	R 少	@	森 林
77ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	S 少	@	森 林
78ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	R 少	@	森 林
79ケアシノスリ	<i>Buteo lagopus</i>	W 少	*	山 野
80ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	R 普通	@	山 野
81クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i>	R 少	@	森 林
82カラフトワシ	<i>Aquila clanga</i>	A	—	森 林
83ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i>	W 少	*	草 原
84チュウヒ	<i>Circus aeruginosus</i>	R 少	@	草 原
〈ハヤブサ科〉 FALCONIDAE				
85シロハヤブサ	<i>Falco rusticolus</i>	W 少	—	草 原
86ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	R 少	*	山 野
87チゴハヤブサ	<i>Falco subbuteo</i>	S 少	@	森 林
88コチュウゲンボウ	<i>Falco columbarius</i>	W 少	—	山 野
89チュウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	(S) 少	*	山 野
「キジ目」 GALLIFORMES				
〈ライチュウ科〉 TETRAONIDAE				
90エゾライチュウ	<i>Tetrastes bonasia</i>	R 普通	@	森 林
〈キジ科〉 PHASIANIDAE				

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
91ウズラ	<i>Coturnix coturnix</i>	S 少	—	草原
92キジ (コウライキジ)	<i>Phasianus colchicus</i>	R 少	@	草原
「ツル目」 GRUIFORMES				
〈ツル科〉 GRUIDAE				
93クロヅル	<i>Grus grus</i>	A	—	—
94タンチョウ	<i>Grus japonensis</i>	R 普通	@	水辺
95カナダヅル	<i>Grus canadensis</i>	A	—	—
96マナヅル	<i>Grus vipio</i>	A	—	—
97アネハヅル	<i>Anthropoides virgo</i>	A	—	—
〈クイナ科〉 RALLIDAE				
98クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	S 少	—	水辺
99ヒメクイナ	<i>Porzana pusilla</i>	S 少	—	水辺
100ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	S 少	—	水辺
101シマクイナ	<i>Porzana exquisita</i>	S 少	—	水辺
102バン	<i>Gallinula chloropus</i>	S 少	—	水辺
103ツルクイナ	<i>Gallinula cinerea</i>	T 少	—	水辺
104オオバン	<i>Fulica atra</i>	S 普通	@	水辺
「チドリ目」 CHARADRIIFORMES				
〈ミヤコドリ科〉 HAEMATOPODIDAE				
105ミヤコドリ	<i>Haematopus ostralegus</i>	A	—	干潟
〈チドリ科〉 CHARADRIIDAE				
106ハジロコチドリ	<i>Charadrius hiaticula</i>	T 少	—	干潟
107コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	S 少	@	水辺
108イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	S 少	@	水辺
109シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	S 少	—	水辺
110メダイチドリ	<i>Charadrius mongolus</i>	T 普通	—	干潟
111オオメダイチドリ	<i>Charadrius leschenaultii</i>	T 稀	—	干潟
112ムナグロ	<i>Pluvialis dominica</i>	T 普通	—	干潟
113ダイゼン	<i>Pluvialis squatarola</i>	T 普通	—	干潟
114タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	A	—	水辺
〈シギ科〉 SCOLOPACIDAE				
115キョウジョシギ	<i>Arenaria interpres</i>	T 普通	—	干潟
116トウネン	<i>Calidris ruficollis</i>	T 普通	—	干潟
117ヒバリシギ	<i>Calidris minutilla</i>	T 普通	—	干潟
118オジロトウネン	<i>Calidris temminckii</i>	T 少	—	干潟
119ヒメウズラシギ	<i>Calidris bairdii</i>	T 少	—	干潟
120アメリカウズラシギ	<i>Calidris melanotos</i>	T 稀	—	干潟

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
121ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i>	T 少	—	干 潟
122チシマシギ	<i>Calidris ptilocnemis</i>	T 少	—	干 潟
123ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	T 普通	*	干 潟
124サルハマジキ	<i>Calidris ferruginea</i>	T 少	—	干 潟
125コオバシギ	<i>Calidris canutus</i>	T 少	—	干 潟
126オバシギ	<i>Calidris tenuirostris</i>	T 普通	—	干 潟
127ミユビシギ	<i>Crocethia alba</i>	T 普通	—	干 潟
128ヘラシギ	<i>Eurynorhynchus pygmeus</i>	T 少	—	干 潟
129エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i>	T 少	—	干 潟
130コモンシギ	<i>Trygites subruficollis</i>	T 稀	—	干 潟
131キリアイ	<i>Limicola falcinellus</i>	T 少	—	干 潟
132オオハシシギ	<i>Limnodromus scolopaceus</i>	T 稀	—	干 潟
133ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i>	T 少	*	干 潟
134アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i>	S 少	—	干 潟
135コキアシシギ	<i>Tringa flavipes</i>	T 少	—	干 潟
136コアオアシシギ	<i>Tringa stagnatilis</i>	T 少	—	干 潟
137アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	T 普通	—	干 潟
138カラフトアオアシシギ	<i>Tringa guttifer</i>	T 稀	—	干 潟
139クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	T 少	—	水 辺
140タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	T 普通	*	水 辺
141メリケンキアシシギ	<i>Heteroscelus incanus</i>	T 少	—	干 潟
142キアシシギ	<i>Tringa brevipes</i>	T 普通	*	干 潟
143イソシギ	<i>Tringa hypoleucos</i>	S 普通	@	水 辺
144ソリハシシギ	<i>Xenus cinereus</i>	T 普通	—	干 潟
145オグロシギ	<i>Limosa limosa</i>	T 普通	—	干 潟
146オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i>	T 普通	—	干 潟
147ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i>	T 少	—	干 潟
148ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i>	T 少	—	干 潟
149チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus</i>	T 普通	—	干 潟
150ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	S 普通	@	森 林
151タンシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	T 少	—	草 原
152オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	S 普通	@	草 原
153アオシギ	<i>Gallinago solitaria</i>	W 少	—	水 辺
〈セイタカシギ科〉 RECURVIROSTRIDAE				
154セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i>	A	—	干 潟
〈ヒレアシシギ科〉 PHALAROPODIDAE				
155ハイイロヒレアシシギ	<i>Phalaropus fulicarius</i>	T 少	—	海

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
156アカエリヒレアシシギ	<i>Phalaropus lobatus</i>	T 普通	—	海
〈トウゾクカモメ科〉 STERCORARIIDAE				
157トウゾクカモメ	<i>Stercorarius pomarinus</i>	(S) 少	—	海
158クロトウゾクカモメ	<i>Stercorarius parasiticus</i>	(S) 少	—	海
159シロハラトウゾクカモメ	<i>Stercorarius longicaudus</i>	(S) 少	—	海
〈カモメ科〉 LARIDAE				
160ユリカモメ	<i>Larus ridibundus</i>	T 普通	*	海
161セグロカモメ	<i>Larus argentatus</i>	W 普通	—	海
162オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	R 普通	*	海
163ワシカモメ	<i>Larus glaucescens</i>	W 少	—	海
164シロカモメ	<i>Larus hyperboreus</i>	W 少	—	海
165カモメ	<i>Larus canus</i>	W 普通	—	海
166ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	S 普通	*	海
167ミツユビカモメ	<i>Larus tridactylus</i>	W 普通	*	海
168ハジロクロハラアジサシ	<i>Sterna leucoptera</i>	A	—	海
169アジサシ	<i>Sterna hirundo</i>	T 普通	*	海
170コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	(S) 稀	—	海
〈ウミスズメ科〉 ALCIDAE				
171ウミガラス	<i>Uria aalge</i>	(R) 少	—	海
172ハシブトウミガラス	<i>Uria lomvia</i>	(R) 少	—	海
173ウミバト	<i>Cephus colmba</i>	W 少	—	海
174ケイマフリ	<i>Cephus carbo</i>	R 少	—	海
175マダラウミスズメ	<i>Brachyramphus marmoratus</i>	W 少	—	海
176ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>	W 普通	—	海
177カンムリウミスズメ	<i>Synthliboramphus wumizusume</i>	(S) 稀	—	海
178エトロフウミスズメ	<i>Aethia cristatella</i>	W 普通	—	海
179シラヒゲウミスズメ	<i>Aethia pygmaea</i>	W 稀	—	海
180コウミスズメ	<i>Aethia pusilla</i>	W 普通	—	海
181ウトウ	<i>Cerorhinca monocerata</i>	R 少	—	海
182ツノメドリ	<i>Fratercula corniculata</i>	W 稀	—	海
183エトピリカ	<i>Lunda cirrhata</i>	R 少	—	海
「ハト目」 COLUMBIFORMES				
〈ハト科〉 COLUMBIDAE				
184キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	S 普通	@	森 林
185アオバト	<i>Sphenurus seiboldii</i>	S 普通	@	森 林
「ホトトギス目」 CUCULIFORMES				
〈ホトトギス科〉 CUCULIDAE				

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
186 ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	S 少	—	森 林
187 カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	S 普通	@	山 野
188 ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	S 普通	@	森 林
「フクロウ目」 STRIGIFORMES				
〈フクロウ科〉 STRIGIDAE				
189 シロフクロウ	<i>Nyctea scandiaca</i>	W 稀	—	草 原
190 シマフクロウ	<i>Ketupa blakistoni</i>	R 少	@	水 辺
191 トラフズク	<i>Asio otus</i>	R 少	—	森 林
192 コミミズク	<i>Asio flammeus</i>	W 普通	*	草 原
193 コノハズク	<i>Otus scops</i>	S 少	@	森 林
194 オオコノハズク	<i>Otus bakkamoena</i>	R 少	—	森 林
195 キンメフクロウ	<i>Aegolius funereus</i>	A	—	森 林
196 アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>	S 少	—	森 林
197 フクロウ	<i>Stirx uralensis</i>	R 少	@	森 林
「ヨタカ目」 CAPRIMULGIFORMES				
〈ヨタカ科〉 CAPRIMULGIDAE				
198 ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	S 少	—	森 林
「アマツバメ目」 APODIFORMES				
〈アマツバメ科〉 APODIDAE				
199 ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>	S 普通	@	山 野
200 アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	S 普通	@	山 野
「ブッポウソウ目」 CORACIIFORMES				
〈カワセミ科〉 ALCEDINIDAE				
201 ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	R 少	@	水 辺
202 アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	S 少	—	水 辺
203 カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	S 少	@	水 辺
〈ヤシガシラ科〉 UPUPIDAE				
204 ヤシガシラ	<i>Upupa epops</i>	A	—	草 原
「キツツキ目」 PICIFORMES				
〈キツツキ科〉 PICIDAE				
205 アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	S 普通	@	山 野
206 ヤマゲラ	<i>Picus canus</i>	R 少	@	森 林
207 クマゲラ	<i>Dryocopus martius</i>	R 少	@	森 林
208 アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	R 普通	@	森 林
209 オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>	R 少	@	森 林
210 コアカゲラ	<i>Dendrocopos minor</i>	R 少	@	森 林
211 コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	R 普通	@	森 林

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
「スズメ目」 PASSERIFORMES				
〈ヒバリ科〉 ALAUDIDAE				
212コヒバリ	<i>Calandrella rufescens</i>	A	—	草原
213ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	S 普通	@	草原
214ハマヒバリ	<i>Eremophila alpestris</i>	A	—	草原
〈ツバメ科〉 HIRUNDINIDA				
215ショウドウツバメ	<i>Riparia riparia</i>	S 普通	@	水辺
216ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	S 少	*	人里
217コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	(S) 稀	—	人里
218イワツバメ	<i>Delicon urbica</i>	S 普通	@	山野
〈セキレイ科〉 MOTACILLIDAE				
219ツメナガセキレイ	<i>Motacilla flava</i>	A	—	水辺
220キガシラセキレイ	<i>Motacilla citreola</i>	A	—	水辺
221キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	S 普通	@	水辺
222ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	S 普通	@	水辺
223セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	S 少	@	水辺
224ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	S 普通	@	山野
225ムネアカタヒバリ	<i>Anthus cervinus</i>	A	—	草原
226タヒバリ	<i>Anthus spinoletta</i>	T 普通	*	草原
〈サンショウクイ科〉 CAMPEPHAGIDAE				
227サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	A	—	森林
〈ヒヨドリ科〉 PYCNONOTIDAE				
228ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	S 少	@	森林
〈モズ科〉 LANIIDAE				
229モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	S 普通	@	山野
230アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	S 少	*	山野
231オオモズ	<i>Lanius excubitor</i>	W 少	*	山野
〈レンジャク科〉 BOMBYCILLIDAE				
232キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>	W 普通	*	山野
233ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>	W 少	—	山野
〈カワガラス科〉 CINCLIDAE				
234カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	R 普通	@	水辺
〈ミソサザイ科〉 TROGLODYTIDAE				
235ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	S 普通	@	森林
〈イワヒバリ科〉 PRUNELLIDAE				
236カヤクグリ	<i>Prumella rubida</i>	S 少	—	高山
〈ヒタキ科〉 MUSCICAPIDAE				

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
(ツグミ亜科) TURDINAE				
237 コマドリ	<i>Erithacus akahige</i>	S 普通	—	森 林
238 シマゴマ	<i>Erithacus sibilans</i>	A	—	山野
239 ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>	S 普通	@	草原
240 オガワコマドリ	<i>Erithacus svecicus</i>	A	—	山野
241 コルリ	<i>Erithacus cyane</i>	S 普通	@	森林
242 ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	S 普通	—	高山
243 ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>	W 少	—	山野
244 ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	S 普通	@	草原
245 イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>	(S) 稀	—	海岸
246 マミジロ	<i>Turdus sibiricus</i>	S 少	*	森林
247 トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	S 普通	@	森林
248 クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	S 少	—	森林
249 アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	S 普通	@	森林
250 シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	W 少	—	山野
251 マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	T 少	*	山野
252 ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	W 普通	*	山野
(ウグイス亜科) SYLVINAE				
253 ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	S 少	—	森林
254 ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	S 普通	@	山野
255 エゾセンニュウ	<i>Locustella fasciolata</i>	S 普通	@	山野
256 シマセンニュウ	<i>Locustella ochotensis</i>	S 普通	@	草原
257 マキノセンニュウ	<i>Locustella lanceolata</i>	S 普通	@	草原
258 コヨシキリ	<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	S 普通	@	草原
259 オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>	(S) 稀	—	草原
260 キマユムシクイ	<i>Phylloscopus inornatus</i>	(S) 稀	—	森林
261 メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	(S) 少	—	森林
262 エゾムシクイ	<i>Phylloscopus tenellipes</i>	S 普通	@	森林
263 センダイムシクイ	<i>Phylloscopus occipitalis</i>	S 普通	@	森林
264 キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	R 普通	@	森林
(ヒタキ亜科) MUSCICAPINAE				
265 キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	S 普通	@	森林
266 オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	S 普通	@	森林
267 サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	S 少	@	森林
268 エゾビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>	T 普通	—	森林
269 コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	S 普通	@	森林
<エナガ科> AEGITHALIDAE				

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
270 エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	R 普通	@	森 林
〈シジュウカラ科〉 PARIDAE				
271 ハシブトガラ	<i>Parus palustris</i>	R 普通	@	森 林
272 コガラ	<i>Parus montanus</i>	R 少	@	森 林
273 ヒガラ	<i>Parus ater</i>	R 普通	@	森 林
274 ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	R 少	*	森 林
275 シジュウカラ	<i>Parus major</i>	R 普通	@	森 林
〈ゴジュウカラ科〉 SITTIDAE				
276 ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	R 普通	@	森 林
〈キバシリ科〉 CERTHIIDAE				
277 キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	R 普通	@	森 林
〈メジロ科〉 ZOSTEROPIDAE				
278 メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	(S) 少	—	山 野
〈ホオジロ科〉 EMBERIZIDAE				
279 シラガホオジロ	<i>Emberiza leucocephala</i>	A	—	山 野
280 ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	S 少	@	山 野
281 ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	S 少	@	草 原
282 コホオアカ	<i>Emberiza pusilla</i>	A	—	山 野
283 カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	W 普通	*	山 野
284 ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	A	*	山 野
285 シマアオジ	<i>Emberiza aureola</i>	S 少	@	草 原
286 ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	A	—	山 野
287 アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	S 普通	@	森 林
288 クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	S 少	*	森 林
289 オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	S 普通	@	草 原
290 ヌキホオジロ	<i>Plectrophenax nivalis</i>	W 少	*	草 原
〈アトリ科〉 FRINGILLIDAE				
291 アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	W 普通	*	山 野
292 カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	S 普通	@	山 野
293 マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	R 少	*	森 林
294 ベニヒワ	<i>Acanthis flammea</i>	S 普通	*	山 野
295 ハギマシコ	<i>Leucosticte arctica</i>	W 普通	*	山 野
296 オオマシコ	<i>Carpodacus roseus</i>	W 少	*	山 野
297 ギンザンマシコ	<i>Pinicola enucleator</i>	W 少	—	山 野
298 イスカ	<i>Loxia curvirostra</i>	W 少	*	山 野
299 ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	S 普通	@	山 野
300 ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	S 普通	@	森 林

種	名	釧路管内	標茶町管内	主な生息場所
301イカル	<i>Eophona personata</i>	S 少	@	森 林
302シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	R 普通	@	森 林
〈ハタオリドリ科〉 PLOCEIDAE				
303ニュウナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	S 少	@	森 林
304スズメ	<i>Passer montanus</i>	R 普通	@	人 里
〈ムクドリ科〉 STURNIDAE				
305コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	S 普通	@	山 野
306ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	S 普通	@	山 野
〈カラス科〉 CORVIDAE				
307カケス	<i>Garrulus glandaris</i>	R 普通	@	森 林
308ホンガラス	<i>Nucifraga caryocatactes</i>	R 少	—	高 山
309ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	R 普通	@	山 野
310ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	R 普通	@	山 野
種	類	数	310種	148種
				—

*釧路管内の鳥類リストは、次の文献より作成した。

浜中町教育委員会生涯学習課 1994. 浜中町の鳥.

日本野鳥の会北海道ブロック支部連合協議会 1991. 北海道地域別鳥類リスト.

*標茶町管内の鳥類リストは、次の文献より作成した。

橋本正雄 1981. 釧路管内鳥類観察記録(1). 釧路市立博物館紀要. 第8輯.

橋本正雄 1982. 釧路管内鳥類観察記録(2). 釧路市立博物館紀要. 第9輯.

二村一男 1987. 北海道演習林の鳥類相. 京都大学農学部演習林集報. 第17号.

標茶町郷土館 1992. 標茶町郷土館収蔵・展示資料目録(3), 一哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類
・魚類一.

*記号の意味。

S : 釧路地方では夏鳥である種。

(S) : 釧路地方では夏場に生息するが、繁殖はしない種。

R : 釧路地方では留鳥である種。

(R) : 釧路地方では周年生息するが、繁殖はしない種。

W : 釧路地方では冬鳥である種。

T : 釧路地方では旅鳥である種。

A : 釧路地方では迷鳥である種。

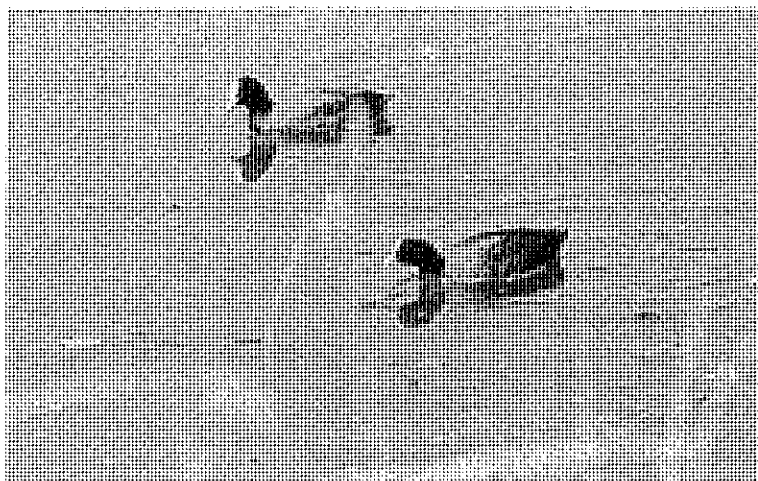
@ : 標茶町で繁殖する鳥。

* : 標茶町での生息確認はあるが、繁殖はしない種。

— : 標茶町での生息確認がない種。

標茶町で繁殖する鳥はSとRの合計の94種で約64%に達します。ちなみに、北海道の内陸（森林・草原・市街地など）および内水面（河川・湖沼・干潟など）の環境では153種の鳥が繁殖する可能性があるといわれます。

標茶町の鳥には、タンチョウやオジロワシ、シマフクロウなど天然記念物にも指定されている貴重な種が含まれており、また、豊かな自然環境は湖沼の鳥、湿原の鳥、草原の鳥、森林の鳥と様々なタイプの野鳥の生息を可能としています。



オオバン



ベニヒワ

V. 楽しい野鳥観察

野鳥の美しい姿や歌声、そして愛らしい仕草など、野鳥との出会いには楽しいことがいっぱいあります。目と耳を十分に使えば、観察のための特別な道具や服装がなくてもよいのですが、双眼鏡や鳥へのちょっとした心遣いがあれば一層楽しさが増します。

1. 双眼鏡

肉眼で小鳥を見るには5～6 mまで近づけることが必要ですが、それはなかなか難しく出来ません。でももし8倍の双眼鏡を持っていると、40 m離れていても5 mまで近づいたのと同じように鳥を見ることができます。

双眼鏡は少し高くても2～3万円のメーカー品を選ぶことです。特価品など質の悪いものは、壊れやすくまた目を傷めたりします。双眼鏡には必ず8×30などと数字が書いてあります。これは倍率が8倍で対物レンズ口径が30mmということです。野鳥観察には、倍率が7～10倍、口径が30～40mmのものが適当です。双眼鏡を上手に使うには、ヒモの長さ、レンズの幅、視度の調節が大切です(図-10)。

2. 観察の仕方

鳥の名前が分からなくても十分姿や声を楽しめますが、出会った鳥の名前が分かるともっと楽しくなります。

鳥の名前を知るには、次のような手がかりがあります。

◎姿：鳥の大きさ、形、色などが一番の手がかりです。

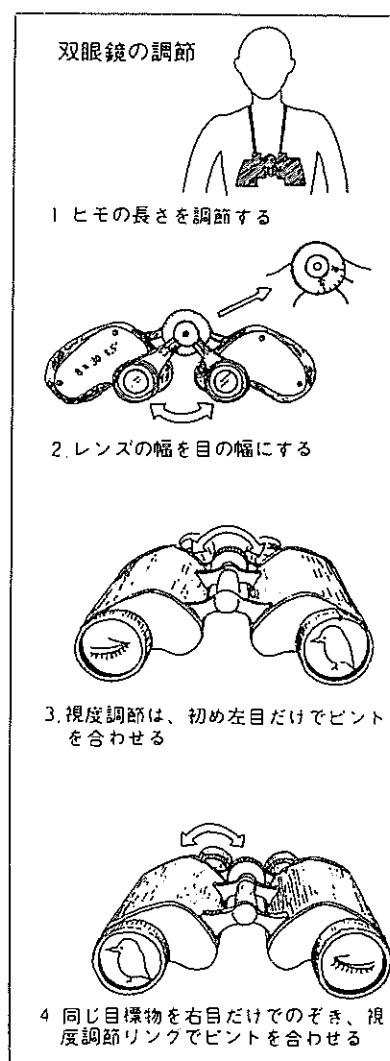


図-10 双眼鏡の使い方
資料：日本野鳥の会 (1981)

◎声：カッコウやウグイスなど、姿が見えなくても声で分かる鳥が沢山います。
姿が瓜二つの鳥でも、さえずりは違います。

◎動作：鳥によって飛び方、歩き方、泳ぎかたが違います。動作だけでどんな仲間の鳥かが分かります。

◎時期：姿や声だけでは名前が分からない場合でも、見た時期が重要な手がかりになることがあります。釧路ではカッコウの様な夏鳥が、冬に居ることはありません。

◎環境：湖沼や森林など、環境によって生息する鳥が違います。

3. 観察のマナー

野鳥観察では、なんといっても鳥や自然への思いやり「や・さ・し・い・き・も・ち」が大切です。

◎や：野外活動、無理なく楽しく。

◎さ：採集はしないで、自然はそのままに。

◎し：静かに、そーっと。

◎い：一本道、道からはずれないで。

◎き：着る物にも一工夫。派手な服装は、鳥が警戒します。

◎も：持って帰ろう、思い出とゴミ。

◎ち：近づかないで、野鳥の巣。

4. 野鳥を招こう

街中の公園や家庭の庭先へ、もしいろいろな野鳥が訪れてくれたなら、それは素晴らしいことです。愛らしい姿や仕草や鳴声を散歩がてら、あるいは部屋の中から堪能することができます。

野鳥を身近な場所へ招くには、一つには野鳥の好む実をつける木を増やすことです。イチイ（オンコ）やナナカマドはもっとも手ごろな木です。表-7に野鳥が食べる果実、種子をいくつか紹介します。

また、野鳥の餌台（バードテーブル）を設け、ヒマワリの種、パン屑などを置いてみると、シジュウカラやシメヤツグミなどがやってきます。バードテー

表-7 野鳥が食べる果実・種子

樹の種類	鳥の種類
イチイ (オンコ)	オオアカゲラ、コゲラ、カケス、シジュウカラ、ヤマガラ、ウソ、ゴジュウカラ、シメ、キレンジャク、ヒレンジャク、ヒヨドリ、ツグミ、イカル、カワラヒワ
トドマツ エゾマツ	ホシガラス、イスカ、ギンザンマシコ、カケス、キクイタダキ、カラ類
カラマツ	イスカ、シジュウカラ、ハシブトガラ、エナガ、キクイタダキ
ミズナラ コナラ カシワ	カケス、ホシガラス、ゴジュウカラ、オシドリ、オオアカゲラ
ヤドリギ	カケス、キレンジャク、ヒレンジャク、ツグミ、ヒヨドリ、ムクドリ、ジョウビタキ
シラカバ	ヒガラ、マヒワ、ベニヒワ、ハギマシコ、ウソ、スズメ
キタコブシ	カケス、アオバト、イカル、ツグミ、ヒヨドリ、ハシボソガラス
ハマナス	ギンザンマシコ、ウソ
エゾヤマザクラ	アオバト、カケス、ハシブトガラス、ムクドリ、コムクドリ、アカハラ、クロツグミ、トラツグミ、キジバト、イカル、ヒヨドリ
ナナカマド	ツグミ、ヒヨドリ、アトリ、シメ、キレンジャク、ヒレンジャク、イスカ、イカル、ギンザンマシコ、ムクドリ

資料：北海道自然保護協会（1988）

ブルといっても、けっして立派なものはいりません。ざるを木の枝に吊るすだけでも十分です。ただし、野鳥にとっては厄介者のネコが近づきにくくする配慮は必要です。なお、餌を置くのは野山に餌が不足する冬の間ということになります。



カケス



キレンジャク

おわりに

近年、バードウォッチング（野鳥観察）を趣味とする人が、随分と増えました。それとともに、探鳥という言葉が新聞などによく登場するようになりすっかりと市民権を得ています。しかし、ほんの20年ほど前には、探鳥会といっても、「丹鳥会」と勘違いされて、タンチョウについて何かする会と思う人さえいました。人々の関心は、自然との触れ合いよりも経済的な豊かさを求めるほうに偏っていたと思います。

経済的発展最優先の結果、今、地球環境を検証すると、オゾンホールや地球温暖化など、地球規模で解決しなければならない問題が山積しています。これらの問題の解決は大変に難しいことですが、本質的には、私たちが日々の生活の中で自然環境へのちょっとした配慮をすることが出来るか否かにかかっているのではないのでしょうか。

野鳥など野生動物が元気に生活できる自然環境を守ってこそ、私たち人間も宇宙船地球号の一員としての生存が許されと思われれます。野鳥観察などを通して肌で自然と接することは、とくに子供たちにとって自然の素晴らしさや大切さを理解し自然への思いやりを育てることとなると思います。この本をお子さんやお孫さんと一緒に使っていただければ、こんな幸いなことはありません。

最後に、この本を書くに当たり、釧路市立博物館の小笠原立男館長、加藤春雄さんなど職員の方々には何かとご援助ご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

引用文献

- A & H・クリュックシヤンク (1982). 鳥についての300の質問. 講談社.
- 橋本正雄 (1981). 釧路管内鳥類観察記録(1). 釧路市立博物館紀要. 第8輯.
- 橋本正雄 (1982). 釧路管内鳥類観察記録(2). 釧路市立博物館紀要. 第9輯.
- 浜中町教育委員会 (1994). 浜中町の鳥.
- 北海道自然保護協会 (1988). 森と私たち～北海道自然保護読本～.
- 北海道新聞社編 (1993). 釧路湿原～知られざる生き物たち～.
- 北海道開発庁 (1994). 釧路川水系(釧路川)鳥類調査報告書.
- 平凡社 (1986). 動物大百科7～鳥類I～
- 釧路市史編さん事務局編 (1987). 釧路湿原.
- 松田道生 (1985). 野鳥の調査～バードカウント入門～. 東洋館出版.
- 日本鳥類保護連盟 (1988). 鳥630図鑑.
- 日本野鳥の会 (1981). バードウォッチング.
- 日本野鳥の会北海道ブロック支部連合協議会 (1991). 北海道地域別鳥類リスト.
- 二村一男 (1987). 北海道演習林の鳥類相. 京都大学農学部演習林集報. 第17号.
- 二村一男 (1988). 北海道演習林における鳥類相の季節変化について. 京都大学農学部演習林集報. 第18号.
- 標茶町郷土館 (1992). 標茶町郷土館収蔵・展示資料目録(3), ～哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・魚類～.
- 世界文化社 (1984). 決定版生物大図鑑～鳥類～.

(著者紹介)

橋 本 正 雄 (はしもと まさお)

- 1947年、北海道栗山町生まれ。
- 1971年、北海道大学農学部卒業。
- 1971年より釧路市立博物館勤務、現在に至り、副館長補佐。

著作・論文

「鷗（ごめ）の話」、釧路新書、釧路市

「北国の鷗～オオセグロカモメの生活～」、共著、岩崎書店

「釧路湿原」、共著、北海道新聞社

釧路短期大学、生涯教育委員

鳥居良四郎（教授、生涯教育センター長）

小笠原政一（緑ヶ岡学園常務理事、事務局長）

弘谷多喜夫（教授）

西塔 正一（助教授）

中島 常安（助教授）

芳賀みづえ（講師）

鈴木 美枝（助手）

木村 修一（附属図書館主任司書）

標茶町

福岡 将孟（教育長）

大場 義行（教育次長）

磯田 永蔵（社会教育課長）

角田 雅彦（社会教育主事）

藤岡 克己（社会教育係長）

第11講座「標茶町の自然」(2)

標 茶 町 の 野 鳥

橋 本 正 雄 著

平成7年2月28日 発行
釧路短期大学生涯教育センター
標 茶 町 教 育 委 員 会

標茶町郷土館報告

— 第 8 号 —

- 北海道東部の半翅類 (Ⅱ) — カメムシ類 —飯島一雄 (1)
- 北海道東部の双翅目 — アブ科 —飯島一雄 (13)
- 北海道東部のハサミムシ目 (革翅目)飯島一雄 (22)
- 北海道東部の長翅目飯島一雄 (24)
- イイジマルリボシヤンマの異常産卵飯島一雄・飯島猛美 (25)
- シラルトロ沼周辺の鳥たち — 春のバードウォッチングから —阿部信行 (26)
- トンボを見る会の結果報告について飯島猛美 (30)
- 明治21年開削の厚岸道路 (標茶～厚岸間) について藤本 亨 (35)
- 標茶のムックリ製作方法 — マキリ1本のムックリづくり —青山俊生 (40)

1995

標茶町郷土館

シラルトロ沼周辺の鳥たち

—春のバードウォッチングから—

阿部 信行^{*}

「釧路湿原」、特に塘路湖、コッタロ湿原、シラルトロ沼を中心とした情報を「釧路湿原だより」として発信している「釧路湿原パークボイス」の94年度の取組みとして、直に自然と触れ合い、楽しみながら、自然に興味を持ってもらうために「バードウォッチング」と「トンボを見る会」を開催しました。今年度の「バードウォッチング」は釧路湿原の中で最大の水鳥の飛来地として全国的に知られているシラルトロ沼を中心として行いました。

講師は「日本野鳥の会」に所属している水口成子氏（標茶町磯分内在住）北村善春氏・貴子氏夫妻（標茶町市街在住）と「雁を保護する会」にも所属している丸山潔氏（標茶町中茶安別在住）の4名に依頼し、開催当日の講師の都合により各講師が担当されました。一般参加者への周知は「釧路湿原だより」で行いました。

観察場所はシラルトロ沼の西岸と「憩の家かやぬま」（以下憩の家）からシラルトロ・塘路探勝歩道（以下探勝歩道）のシラルトロ沼までの区間で行いました。この区間の湖岸段丘はミズナラを優占種とした広葉樹の二次林となっており、その中には一周2.5kmのサイクリングロードが整備されていますが、標茶町に生息する84種類の蝶の生活環境の回復を願って食草を植え、「蝶の森」として活用されています。憩の家前広場はタンチョウの給餌地となっており、一年中タンチョウを観察できます。また、冬期間にはバードテーブルが置かれており、カラ類を中心として多くの小鳥が見られます。

第1回目の3月21日は時々雪の降るあいにくの天気でしたが午前9時から午前11時まで行いました。（一般参加者5名、講師4名）憩の家周辺では木立の中にウソの群れやハシブトガラなどのカラ類そしてタンチョウを観察しました。サイクリングロード周囲の雑木林ではシジュウカラなどのカラ類やハシボソガラスなどが見られ、上空にはオジロワツ、トビが飛んでいました。探勝歩道の木道の上にペリットらしきものみつき、それを分解して講師と参加者がいろいろな論議が行われました。シラルトロ沼ゲート手前の小高い観察地からは沼にオオハクチョウ、マガモ、カワアイサなどがみられました。今回の最大の観察目標であったヒシクイは見ることはできませんでしたが、参加者から20日にこの沼の近くの下御卒別の牧草地で約100羽の群れがいた事が報告され、講師の丸山氏よりこの沼でのヒシクイの観察状況やこの沼がヒシクイのカムチャッカ半島～宮城県伊豆沼への渡りの中継地として位置付けられているとの説明がありました。1回目は16種類が確認できました。

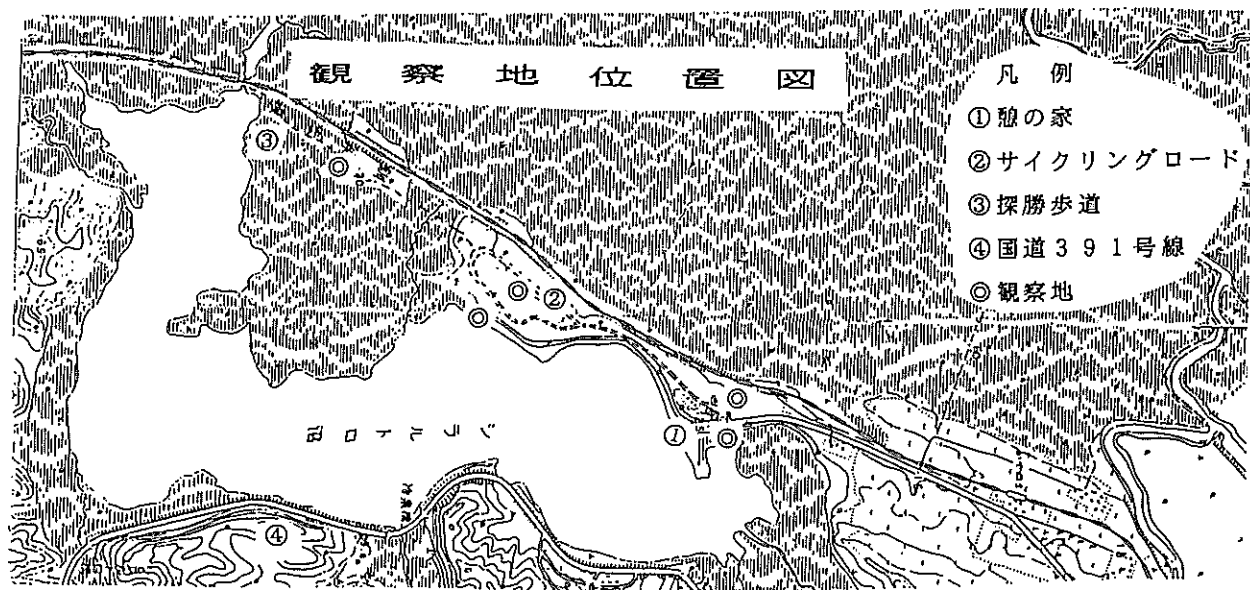
第2回目は4月24日を予定していましたが雨天の為延期し、29日に行いました。（一般参加者2名、講師1名水口氏）今回のテーマは「鳥の見分けポイント」とし、コースは前回とほぼ同じ所をじっくり見て回りました。シラルトロエトロ川の河口ではオオハクチョウ、アオサギ、カワアイサ、コガモなどが

※釧路湿原パークボイス

がみられました。憩の家周辺では講師よりカラ類の見分け方の説明が行われ、カラ類をじっくり観察し、ヒガラをはじめ4種類が見られました。またツバメも軒下に見られ、シメ、ハクセキレイ、スズメ等も見ることができました。サイクリングロード周囲の雑木林ではアカゲラ、ヒヨドリ等が見られ、沼西岸の丘陵部からヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ等をじっくり観察しました。ゲート手前の観察地では沼にミコアイサ、カワアイサ等を観察し、上空ではオオジシギのディスプレイが繰り返され、湿原の春の訪れが感じられました。2回目は30種類が確認できました。

第3回目は5月29日午前7時から午前11時30分まで標茶町中央公民館と共催で行いました。(一般参加者22名、講師2名 北村貴子氏、水口氏)参加者の年齢は小学生から70代と幅広く、また、初心者もいたため、講師により双眼鏡の使用方の説明が行われた後、サイクリングロードをゆっくりしたペースで回りました。今回のテーマは「春の鳥の観察」。オオジシギ、カッコウ、ツツドリを遠くに聞きながら、憩の家前でタンチョウをじっくり観察してからは「センダイムシクイ」が主役。その(チョチョズィー、チョチョズィー)という鳴き声を聞きながら、木立の中にその姿を求め、皆で確認しあいました。参加者の中には動態視力の優れた人がいて、その人が鳥を見つけては、講師が確認し望遠鏡をセットして、参加者に解説をしながら確認してもらうなど和やかな雰囲気のうちに進みました。サイクリングロード先の探勝歩道の木道は100m先で増水のために通れず、途中から引き返す状態となり、水鳥の観察ができませんでした。3回目は23種類が確認できました。

3回のバードウォッチングの結果、釧路湿原で観察される鳥約170種類の25%の41種類の確認となりました。沼、湿原、西岸斜面の原始林、丘陵部の二次林、憩の家前の草地等色々な要素を含んだこの観察地は時期によってまだまだ多くの鳥たちが確認されるものと思われます。自然に興味を持ってもらうための試みとして初めて企画しましたが、参加者からは通年の開催の要望が出されるなど、初期の目的は達せられたような気がします。95年度は同時期に月2回のバードウォッチングを企画し、この観察地の鳥たちをもう1年追って見たいと思います。



野 鳥 観 察 リ ス ト

No.	種 類 月日	3/21	4/29	5/29	No.	種 類 月日	3/21	4/29	5/29
1	ア オ サ ギ	○	○	○	22	ハ ク セ キ レ イ		○	○
2	オ オ ハ ク チ ョ ウ	○	○		23	ヒ ヨ ド リ		○	
3	マ ガ モ	○			24	ノ ゴ マ			○
4	コ ガ モ		○		25	ノ ビ タ キ		○	○
5	ヨ シ ガ モ		○		26	ウ グ イ ス			○
6	ヒ ド リ ガ モ		○		27	セ ン ダ イ ム シ ャ イ			○
7	オ ナ ガ カ モ		○		28	ハ シ ブ ト ガ ラ	○	○	○
8	キ ン ク ロ ハ ジ ロ		○		29	ヒ ガ ラ		○	○
9	ス ズ ガ モ		○		30	シ ジ ュ ウ カ ラ	○	○	○
10	ミ コ ア イ サ		○		31	ゴ ジ ュ ウ カ ラ	○	○	○
11	カ ワ ア イ サ	○	○		32	ア オ ジ		○	○
12	ト ビ	○	○	○	33	カ ワ ラ ヒ ワ			○
13	オ ジ ロ ワ シ	○		○	34	ウ ソ	○	○	
14	タ ン チ ョ ウ	○	○	○	35	シ メ	○	○	
15	オ オ ジ シ ギ		○	○	36	ス ズ メ	○	○	○
16	オ オ セ グ ロ カ モ メ		○		37	コ ム ク ド リ			○
17	カ ッ コ ウ			○	38	ム ク ド リ			○
18	ツ ツ ド リ			○	39	カ ケ ス	○		
19	ハ リ オ ア マ ツ バ メ		○		40	ハ シ ボ ソ ガ ラ ス	○	○	○
20	ア カ ゲ ラ		○		41	ハ シ ブ ト ガ ラ ス	○	○	○
21	ツ バ メ		○				16	30	23



湿原だより

1994
5. 1



(水溢れる…コッタロ湿原)

《カエルの声響く…湿原の春》

エゾアカガエルの声が湿原内に響き渡り、釧路湿原は本格的な春を迎えました。タンチョウも営巣が行われ、5月上旬には雛が生まれます。エゾエンゴサク、ミスバショウ、ウラボイチゲ等の花も咲き、オオハクチョウ、ミコアイサ等の冬鳥、アオサギ、ノビタキ等の夏鳥が見られ、上空にはオオジシギの翔空が見られるようになりました。これから湿原は日一日と緑濃くなって行きます。

5月の釧路における日の出、日の入り時刻

	日の出	日の入
上旬	午前4時12分頃	午後6時27分頃
中旬	午前4時00分頃	午後6時38分頃
下旬	午前3時50分頃	午後6時49分頃

※ 双眼鏡を持っていくと便利です。

まだ冷え込みますので、防寒対策はしっかりと!!

コッタロ湿原が面白い

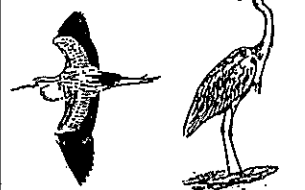
釧路からコッタロ湿原に向かう釧路川沿線ではヤナギのやわらかな新緑が美しく映え、林床には可憐なウラボイチゲの白い花が所々に見られます。湿原内にはエゾアカガエルの大合唱が響き渡り、コッタロ湿原は山際、川筋から緑色濃くなり、第3展望地からは、タンチョウの営巣が見られると共に、蒼鷺を食べているエゾシカや、オオハクチョウ・アオサギやマガモなどのカモ類、カモ類を追っているチュウビの姿が時々見られます。上空ではオオジシギが、すさまじい羽音で誇示しています。丘陵ではフッキソウ、フキノトウ・バイケイソウなどが見られ、コゲラ・ミヤマカケス・ヤマゲラなどが見られます。コッタロ湿原にいつて春を満喫してはいかがでしょう。

【オオジシギ】(9種)



夏鳥としてオーストラリアの南部やタスマニア島から約1万キロをノンストップで渡ってくる。ハト位の大きさでくちばしが長くズンズンしている。繁殖時には上空を旋回し、『ズビヤーク、ズビヤーク』と鳴きながら飛び回り、ザ、ザ、ザと尾羽を振動させながら急降下し、その音からカミナリシギともいわれている。

【アオサギ】(9種)



日本のサギの中では最大。夏鳥として釧路湿原に渡ってきますが、一部は越冬しています。タンチョウと似ていますが、アオサギは首を曲げて飛びます。飛翔中は『キヤッ』という高い声をだし、地上では『ゴア』という声で鳴きます。

郷土館の後ろでは一生懸命を運んでいる姿が見られます。

【チュウビ】(9種)



ヨーロッパ及びアジアの中部で繁殖。日本では北海道及び本州の一部で巣をつくる。巣は湖沼の岸のヨシ原や草原の地上にある。ヨシ原の上を低く飛び回り、野ネズミ、水鳥、カエルなどをとる。V字型の飛行形が特徴。

標茶町郷土館によって見ませんか

「釧路湿原の動植物」や「標茶町の歴史資料」を展示している標茶町郷土館に、特別天然記念物の「タンチョウ」、絶滅の危険にある「シマフクロウ」の展示物に続き天然記念物の「オオワシ」が展示されました。「オオワシ」は冬から春にかけて釧路・シラルトロの両湖沼の水の上や近くの樹上で見かけることがありますが、是非真近で見て、その大きさ、美しさを感ぜてほしいものです。また、この館の代表展示物の一つである敷島一雄氏による「昆虫の標本」も是非観賞してほしいものです。「薬治監の資料」、「先史時代の石器」なども展示してあります。郷路にお越しの際には是非立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



ムックリ、口琴に興味のある方は、一言学芸員に声をかけてみては……

①開館期間 通年(ただし、12月30日から1月5日までは休館)。月曜日と国民の休日の翌日は休館(ただし、月曜日が国民の祝日に関する法律に規定する休日にあつた時は、翌日が休館)。

②時間 午前9時30分から午後4時まで

③料金 無料

探鳥会の結果

3月21日、4月29日の両日シラルトロ湖畔で探鳥会を実施しました。21日は時々雨が降りつけるあいにくの天気でしたが「野鳥の会」の水口氏・北村夫妻・丸山氏が講師となり、9名で午前9時から11時までサイクリングロード・木道・ゲート前小丘陵間で行いました。「熊の家」の前でウソの群れの歓迎を受け、途中、木道上にペリットまたはキタキツネのフンらしきものがあつたため、それを分析して論議をしたり、ヒシキのルートについての説明がされるなどなかなか興味深いものでした。21日確認された鳥 16種

ウソ、シメ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、タンチョウ、オオハクチョウ、マガモ、カワアイサ、アオサギ、トビ、オジロワシ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

第2回目の4月24日は雨天ために中止し、29日、水口氏を講師として3人で同じコースを回りました。同日は鳥の見分け方を中心として行われました。

29日確認された鳥 30種

ウソ、シメ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、タンチョウ、オオハクチョウ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガカモ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カワアイサ、アオサギ、トビ、オオジシギ、オオセグロカモメ、ハリオアマツバメ、アカガラ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノビタキ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

釧路湿原に住んで…… 消えた足跡

今年も2月から3月にかけて裏山や向かいの釧路川沿いに雪の降った朝など歩いてみたが、昨年、一昨年と見られた「野ウサギ」の足跡を遂に見つけることは出来なかった。

「野ウサギ」は何故いなくなったのだろうか。ある人は「キツネが増え過ぎたために食べられてしまったんだろう」又「人間が動物たちの住む山(森)を削り取ってしまったのだ」と言う人もいます。どちらにしても、人間が動物たちの環境を(開発、整備、造成などの営業に代表される)してしまつたために起こつた事ではないだろうか。森が切り開かれたために、棲み家や逃げ場が少なくなり、ウサギはキツネなどの格好の餌的となつてしまつたのではないだろうか。

昔は、至る所に野ウサギがいたといひます。そこには彼らが敵から身を守るための隠れ家となる大きな藪があつたはずですが、しかし、その藪は伐採され残っているものが少なくなつた。

もうこの辺で、少しは人間以外の生き物にも目を向けよう環境作りを皆で考えていく時期に来ているのではないのでしょうか。(投稿 五十石 名真直氏)

『お知らせ』

☆祖根内ビジターセンター ☎ 0154-65-2323

モーニングウォーク 毎月第2・第4日曜日 時間午前8時から10時

『湿原だより』の編集者の一人であつた佐藤光則氏が今年4月から同ビジターセンターに勤務しています。湿原の朝の一時、祖根内木道において写真家の目に見た湿原の解説が行われます。是非参加して下さい。

☆94年度標茶アースデイ 5月15日(日) AM10:00-PM3:00

場所 シラルトロ湖畔「ログキャビン」前広場(強風、雨天の場合は5月22日)

①フリーマーケット 不用品、オリジナル作品農作物など何でもOK!

自由売って下さい。買って下さい。

②空カンを拾い、AM10:00-12:00までの一時間、皆で道端の空カンを拾って歩きます。自由参加です。どしどし参加して下さい(ゴミ袋は会場で用意します。軍手などは個人で用意して下さい。)場所は湖畔周囲。コッタロ湿原 場所 湖畔周囲。コッタロ湿原 実行委員会 ☎5-1176 ㊟

☆第3回探鳥会 5月29日(日) 場所 シラルトロ湖畔 時間 AM7:30~AM11:30 標茶町公民館と共催で行います。標茶以外の人はAM7:30まで茶泊「熊の家駐車場」に集まって下さい。標茶の人は公民館に申し込んで下さい。(☎5-2040)

はなごき

4月30日に7cm位雪が積もりました。湿原内の各木道がシラルトロを除き開放されています。直に湿原に歩いてみてはいかがでしょうか

編集・発行・監修 「釧路湿原パークボイス」

連絡先 088-22 北海道川上郡標茶町宇都路湖畔 標茶町郷土館内 ☎ 01548-7-2332

標茶町郷土館報告は、主に標茶町及び北海道東部に関する論文・報告・総説・資料・雑録などを掲載します。投稿を希望される方は、標茶町郷土館（電話01548-7-2332）へご連絡下さい。

標茶町郷土館報告 第8号

1995.3 発行

編集・発行

標茶町郷土館

088-22 川上郡標茶町字塘路56番地

印刷

米内印刷株式会社

標茶町郷土館報告

— 第 9 号 —

- エトロフの名工、シタエホリ幻のマキリについて ……………伊藤 務 (1)
- 歴史の彼方の鉄路 ……………永浜 亮 (21)
- 原胤昭(釧路集治監教誨師)とその著作 ……………安形 静男 (39)
- 標茶の自家用薪作り ……………青山 俊生 (65)
- 北海道東部の鞘翅目 ……………飯島 一雄 (73)
- 北海道東部の脈翅類 ……………飯島 一雄 (77)
- ヒメアカタテハの食草 ……………飯島 一雄 (85)
- ヒメアカネの新産地 ……………飯島 一雄・飯島 猛美 (86)
- 標茶町のトンボ観察記録 ……………飯島 猛美 (87)
- 芦美池のトンボ相 ……………佐々木誠治 (95)
- アネハヅル飛来 ……………北村 善春 (111)
- 秋のアマサギの確認について ……………北村 貴子 (112)
- シラルトロ沼周辺の鳥たちⅡ ……………阿部 信行 (113)

1996

標茶町郷土館

シラルトロ沼周辺の鳥たちⅡ

阿部 信行[※]

前年度報告に引き続きシラルトロ沼の「バードウォッチング」を「釧路湿原パークボイス」の95年度の事業として開催しました。今回も講師は「日本野鳥の会」に所属している水川成子氏（標茶町磯分内在住）北村貴子氏（標茶町市街在住）に依頼し、開催当日の講師の都合により各講師が担当されました。一般参加者への周知は「釧路湿原だより」で行いました。観察コースは前年と同一に設定しました。

第1回日は3月12日。17種類確認。ホオジロガモの雄が飛来し、その特徴である嘴の基部近くの白く丸い斑で確認され、東京、横浜からの参加者は感激していました。

第2回日は3月26日。21種類確認。一度全面解氷した沼が前日からの寒波により、凍結し、オオハクチョウが鏡のような表面を滑り、リリーと鈴の音のような響きをたてて氷を割り着水。丘陵部の雑木林内でカラ類の混群の中にキバツリを確認。木の幹に縦に止まり、らせん状に上り、細くて下に曲がっている嘴が特徴。又上空を飛ぶケアシノスリも確認。

第3回日は4月16日。24種類確認。サイクリングロードの湖岸沿いから眼下に飛ぶヤマセミを確認。丘陵部の雑木林内でヒガラ、コサメビタキを確認。

第4回日は4月29日。29種類確認。「憩の家」からキャンプ場へ下りて行く坂の途中で右側のヤナギの花穂を啄んでいるメジロらしき鳥を確認。特徴である日の回りの白色、黄緑色の羽。この鳥は釧路地方でも観察例が少なく、標茶町では観察例が発表されていません。この時期、雑木林内ではキツキ類のドラミングが響き渡り、上空ではオオジギのディスプレイが繰り返され、湖面には北帰行のためにオオハクチョウ、ヒシクイ、オナガカモ等が羽を休めている等などバードウォッチングには最適と思われます。

第4回日は5月28日。標茶町中央公民館、標茶町郷土館と共催で実施。31種類確認。講師を含め参加者26名と人数も多かったためか、最高値を記録。キャンプ場でカワセミを確認。その美しさに多くの人が感激。

2年間の春のバードウォッチングの結果、釧路湿原で観察される鳥約170種類の34%にあたる57種類の確認ができました。水鳥については、木道の通行不能等により遠距離からの観察となったため沢山いる水鳥を識別できず、観察例が少ない状態となっています。シラルトロ沼の湿原、原始林、二次林、草地等色々な要素を含んだこの観察地は時期によってまだまだ多くの鳥たちが確認されるものと思われます。今回のバードウォッチングの期間中の5月19日、前年度講師をしていただいた北村善春氏夫妻が標茶町上磯分内で迷鳥と言われているアネハツルを確認されました。この鳥は今まで標茶町では確認されていませんでしたが、今回は北村氏により写真撮影も行われました。また、10月中旬には標茶近郊に3羽のアマサギが飛来し、多くの人により写真撮影がされました。私たちが4月29日に見たメジロらしき鳥については、断定できませんでしたが、定説も確実なる確認により改められるものであり、同時期にもう一度調査を行い、メジロの写真撮影を行いたいと思います。

※ 釧路湿原パークボイス

野鳥観察リスト (95年)

No.	種 類	94確認	3/12	3/26	4/16	4/29	5/28	No.	種 類	94確認	3/12	3/26	4/16	4/29	5/28
1	アオサギ	※	○	○	○	○	○	31	ハクセキレイ	※		○	○	○	○
2	ヒシクイ		○		○	○		32	ヒヨドリ	※				○	
3	オオハクチョウ	※	○	○	○	○		33	ノゴマ	※					
4	マガモ	※	○	○	○		○	34	ノビタキ	※					○
5	コガモ	※	○	○				35	ウグイス	※					○
6	ヨシガモ	※			○			36	エゾムシクイ						○
7	ヒドリガモ	※		○	○	○		37	センダイムシクイ	※					○
8	オナガガモ	※			○	○		38	コサメビタキ				○		○
9	キンクロハジロ	※			○	○		39	ハシブトガラ	※	○	○	○	○	
10	スズガモ	※			○	○	○	40	ヒガラ	※			○	○	○
11	ホオジロガモ		○					41	シジュウカラ	※	○	○	○	○	○
12	ミコアイサ	※	○	○	○			42	ゴジュウカラ	※	○	○	○	○	○
13	カワアイサ	※		○	○	○		43	キバシリ			○			
14	トビ	※	○	○	○	○	○	44	メジロ					○	
15	オジロワシ	※	○	○			○	45	アオジ	※				○	○
16	オオワシ		○	○				46	オオジュリン				○		
17	ケアシノスリ			○				47	カワラヒワ	※				○	○
18	タンチョウ	※	○	○		○		48	マヒワ						○
19	オオジシギ	※				○	○	49	ウソ	※	○			○	
20	オオセグロカモメ	※				○	○	50	シメ	※					
21	キジバト					○	○	51	ニューナイスズメ						○
22	カッコウ	※					○	52	スズメ	※		○	○	○	○
23	ツツドリ	※					○	53	コムクドリ	※					○
24	ハリオアマツバメ	※						54	ムクドリ	※			○	○	○
25	ヤマセミ				○			55	ミヤマカケス	※					
26	カワセミ						○	56	ハシボソガラス	※		○		○	
27	ヤマゲラ				○	○	○	57	ハシブトガラス	※	○	○	○	○	○
28	アカゲラ	※	○	○		○	○	58							
29	コアカゲラ						○								
30	ツバメ	※							合 計	41	17	21	24	29	31

標茶町郷土館報告は、主に標茶町及び北海道東部に関する論文・報告・総説・資料・雑録などを掲載します。投稿を希望される方は、標茶町郷土館（電話01548-7-2332）へご連絡下さい。

標茶町郷土館報告 第9号

1996年3月 発行

編集・発行 標茶町郷土館
088-22 川上郡標茶町字塘路56番地
印刷 米内印刷株式会社

業務写真票

	<p>No.1</p> <p>定点観測調査</p> <p>P-1</p> <p>平成 17 年 10 月 16 日</p>
	<p>No.2</p> <p>定点観測調査</p> <p>P-2</p> <p>平成 17 年 10 月 16 日</p>
	<p>No.3</p> <p>ラインセンサス調査</p> <p>R-1</p> <p>平成 17 年 10 月 16 日</p>

業務写真票

	<p>No.4</p> <p>ラインセンサス調査</p> <p>R-2</p> <p>平成 17 年 10 月 16 日</p>
	<p>No.5</p> <p>夜間定点観察調査</p> <p>P-1</p> <p>平成 17 年 10 月 16 日</p>
	<p>No.6</p> <p>夜間定点観察調査</p> <p>P-3</p> <p>平成 17 年 10 月 16 日</p>

業務写真票

	<p>No.7</p> <p>定点観察調査</p> <p>P-1</p> <p>平成17年10月17日</p>
	<p>No.8</p> <p>定点観察調査</p> <p>P-2</p> <p>平成17年10月17日</p>
	<p>No.9</p> <p>ラインセンサス調査</p> <p>R-1</p> <p>平成17年10月17日</p>

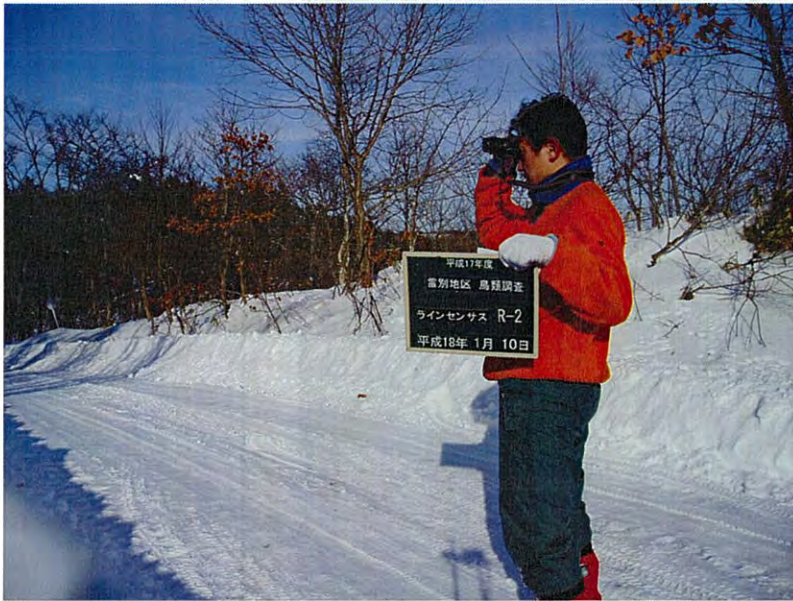
業務写真票

	<p>No.10</p> <p>ラインセンサス調査</p> <p>R-2</p> <p>平成 17 年 10 月 17 日</p>
	<p>No.11</p> <p>夜間定点観察調査</p> <p>P-1</p> <p>平成 17 年 10 月 17 日</p>
	<p>No.12</p> <p>夜間定点観察調査</p> <p>P-3</p> <p>平成 17 年 10 月 17 日</p>

業務写真票

	<p>No.13</p> <p>定着観察調査</p> <p>P-1</p> <p>平成 18 年 1 月 10 日</p>
	<p>No.14</p> <p>定着観察調査</p> <p>P-2</p> <p>平成 18 年 1 月 10 日</p>
	<p>No.15</p> <p>ラインセンサス調査</p> <p>R-1</p> <p>平成 18 年 1 月 10 日</p>

業務写真票



No.16

ライセンス調査

R-2

平成 18 年 1 月 10 日



No.17

定点観察調査

P-1

平成 18 年 1 月 12 日



No.18

定点観察調査

P-2

平成 18 年 1 月 12 日

業務写真票



No.19

ライセンス調査

R-1

平成 18 年 1 月 12 日



No.20

ライセンス調査

R-2

平成 18 年 1 月 12 日

